チートを通り越した先には何があるのか

xx

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チートを通り越した先には何があるのか

【Ｎコード】
Ｎ５４７２Ｕ

【作者名】
ｘｘ

【あらすじ】
「チートを通り越した先には何があるのか」
を覗いて下さり有難うございます
この小説（？）というより物語は
「これがやりたかっただけだろ」をこれでもかと詰め込んでおります
作者は中二病ないし大二病を患っております
楽しめたら作者に近い思考回路を持ってます
楽しんで頂けたら嬉しいです
後「不定期更新＋短い」ですが一週間に一話位

は出したいと思ってます
そして色々な小説やアニメや動画やゲームに
多大な影響を受けています

さらにクロスオーバーしている
もみじ作「そして半分の吸血鬼は何を願うのか」
を読むとお得です

追記：もみじ作「そして半分の吸血鬼は何を願うのか」
がもみじさんごと消えました

追記：どうやら本当にユーザーＩＤが吹っ飛んでたみたいです
キサラギ君達どうしよう・・・

1：はじめ、自己紹介？

自分の名前は霧先涼（きりさきりょう）
色々と変哲は有るだろうが高校生だ

先ず一つ目は厨二病が未だに抜けきっていない事だ
これは自覚しているので大したことはないだろう

二つ目はエロ本やアダルトビデオの類を一切購入していないし中を覗いたことが無い事だ
・・・押し付けられることは多々あるがその場合は両親が勝手に燃やす（僕のと勘違いして）

三つ目は一人称が安定しないこと
ぶっちゃけ言ってノリで変わる
範囲は「俺（おれ）・自分（じぶん）・僕（ぼく）・」

四つ目からは重大だ

四つ目
この間の大地震で父親が職を失った事だ

五つ目
母親が離婚を決意した事だ
元々両親の仲は悪く父親が職を失った事を皮切りに離婚を決意したのだ
これは洒落にならない

六つ目

自分が早熟であること
冷めてる、と言えばいいだろう
両親の仲が悪かった為にネットに逃げ込んだ
そして「現実ってこんなもん」って小説も読んだ
ゲームにも走った「ＬＩ○○　Ａ　○○ＶＥ」はいい作品だった

七つ目
自殺を考えている事だ
厨二病的思考とは関係無しに鬱である
理由は五つ目である
遺書も書いてある
でもただで自殺する気はない

今日その日が来たようだ

1：はじめ、自己紹介？（後書き）

作者の両親は仲睦まじいですので心配しないで下さい

霧先の苗字は涼の先祖が都から見て霧の先にあった事から出来た
という裏設定がありますがあまり関係ないので気にしなくて良いです
ぶっちゃけ当て字です

2：死んだその後

さて、前回で自殺する時が来たと話したが
それは非常に簡単で『ただ死んで何も残らないのが嫌だった』
と言うことで非常に他力本願で自分勝手だと言うことだ
だがこんなテンプレな状況になる訳である

1：どこの誰かも解らない少年が不注意で飛び出す
2：そこに居眠り運転のトラックが突っ込んでくる
3：それを助けて轢かれる（助かれても轢かれる）
4：あるかどうかも解らない転生チートを願ってみる

といった具合に
そして

「4はあっても無くても良いと思ったんだけど」
こんな状況になった訳である

［霧先の元居た世界では］

助かった少年サイド

ぼく「そんな・・・」
ぼくがボール追いかけて飛び出したばっかりに

人が一人死んじゃった

ぼく「救急車！・・・はもう間に合わないよね・・・」
どう見てもしんでる
だって体の上半分と下半分がちぎれてそこに・・・うっ！
吐き出しそうになった、こんな所を見たら誰だってそうなると思う
・・・僕のせいで？
ぼく「うわ～～～～ーーーーー！！！！！！」

・・・僕は逃げてしまった

［少年の家～一日後～］

あれから一日、そう一日
昨日は長い一日だった
眠ったらあの人が夢に出てきそうで

予想通り夢に出てきた・・・でもあの人は僕が怖がってるのを見て
ただ頭を撫でるだけだったんだ（「大丈夫だよ、僕は大丈夫だから
心配するな）」
って・・・何でなの？僕のせいであなたは死んだのに
でもそれは朝たまたま見ていたニュースを見て分かったんだ

男性《では昨日のニュースです》
女性《◎○市□■町▼△公演付近で大型車両に轢かれたと思われる
青年の遺体が発見されました
その青年の遺体から身元が解る物が出てきており
その自宅から遺書と思われるものが発見されました》

父さん「おいおい、家の近くの公園じゃないか・・・」

遺書？

男性《その遺書と思われる物の内容は
「≪この内容を見ている、もしくは聴いてる少年もしくは少女へ
自分を助ける為に俺が死んだと思ってるならそれは大間違いだ
自分が死ぬためにお前を助けた、それは非常に身勝手なことだ
何故なら俺は助けた見返りにそいつに名を残して
自分の生きた証を代わりに作ってもらおうというのだから
だったら自分で残せばいいと思う？
最近両親の仲が非常に悪くてこのままじゃ離婚だったんだ
・・・両親の離婚なんて見たくない≫」
でした
この遺書により警察は自殺と裁定を下しました》

・・・自殺？少年？
僕じゃ無かったら助けなかったかもしれないてこと？
でも僕はこの人のおかげで助かったんだから・・・・・・
うん、恩返しの方法がわかり易いっていいよね！
マイナス思考になっても仕方ない！

と　に　か　く

ぼく「父さん」

父さん「なんだ？」

ぼく「勉強おしえてよ」

父さん「なんだいきなり」

母さん「まさか・・・」

父さん「？いいぞ、おしえてやるからしっかり覚えろよ！」

ぼく「うん！」

女性《どうやら遺書には二枚目があったそうです
内容は（「勉強はやることではなく覚えることが大事
あと学校の勉強もきちんとしないといけない
いきなりやりはじめた事で成功したやつなんていままでの歴史で一
人もいないからな
だいたい成功したやつってのは今まである者を組み合わせたり新し
い使い方を見つけたやつだ
大人の世界に揉まれても子どもの発想を忘れるな！初心忘れるべか
らずだ」）》

男性《そうですね、解ってることの筈なのに忘れていました》

女性《では・・次のニュースです・・・グスッ》

ぼく（うん！頑張るよ！）

この少年が歴史に名を残すことになるのだが
それはまた別のお話

2：死んだその後（後書き）

茶番ですかね（汗

３：世界と世界の（ｒｙ　・・・長いから狭間さんで（単位変更・注意）（前書

今話の狭間は自由風の狭間と同一人物です

3：世界と世界の（ｒｙ　・・・長いから狭間さんで（単位変更・注意）

［世界と世界（ｒｙ］
霧先サイド

「ここはどこだ・・・天国だろうと地獄だろうと
閻魔の裁判所だろうと他に人影らしき物があるはず
つまりここはそのどこでもないが、だったらここは何処だ？」

そうしてたら急に後ろから声が聞こえてきた
「よう、初めまｓ「なんか初めての挨拶が微妙に矛盾している気がするが気のせいか？」
・・・初めて俺と会った奴も俺の言葉を遮ってたな
人間ってみんなこうなのか？
まぁはじめに疑問に答えるとするよ
ここは［世界と世界の狭間と呼ばれる世界］だ
「長いから「『狭間』って呼んでくれていいぞ
初めて連れてきた奴もそうだった」・・・」

「了解、それで狭間お前はなんで俺をここに？」

容姿は上の上（文句なし）
雰囲気は研究者・観察者・ＮＥＥ（ニート）「否定できないのが悲しい」

「おっと、よくある話ではこういう所の相手は神とかで
そいつは心が読める場合が多いな」

「いや、顔に出てた」

（お前の心を読むのは何故か無理だつーか顔に出してたのわざとだろ）

「あとさっきの質問だがお前は並行世界とか並列世界にお前が存在しないんだ」

「？どういうことだ？」

「ああ、要はパラレルワールドと呼ばれる世界に『霧先　涼』が存在しないということでそれは『「霧先　涼」が「狭間」の中に一人しか存在出来ない』事を表す最初に俺を超えた奴もそうだったたなそれに平行世界にお前がいないということは『鏡の中の世界』と呼ばれる場所にもお前はいないお前が見ていた鏡の向こうのお前はただの虚像だつまりお前を転生させたら他のやつを転生させるより面白くなりそうだってことだ」

「闇雲にやるとどうなる？」

「世界と言う名前の物語がグダグダになる」

「ＯＫ、つまりむやみやたらにやると楽しめないってだけなんだな」

「そういうこと、一度やったことがあるが隔離世界でやって正解だったよ」

（つまり世界の均衡が崩れるとかそういうのは「どうとでもなる」のか「どうでもいい」ということか

それにやったことあるのか）

「でだ、お約束だと転生する時に色々と特典がつくそうだが
俺の場合はどうなる？」

『お約束』では
（「死なせてしまったお詫びにいくつか願いを叶えて転生させます」
とかいう展開になるだろうが・・・
どう見てもこいつが間違えて殺したような気配はない
面白そうだから持ってきただけっぽいな、つまり普通に寿命か）

「もちろん付けるぞ、なんでもございだ」
（お約束通り？いや、『お約束』を知る者に『お約束』は絶対に続
かない筈だ）

「じゃあまずは『ひと』の得ている、得られるすべての『知識』が
欲しい」
「了解、ではさっそk「ちょっと待った」なんだ？」

「お約束だと元からあったみたいにポンと入ってくるけど
それは入れる側がそいつに入りやすいように加工するからじゃない
のか？」

「その通りだがそれでおまえはどうする気だ？」
「そういう加工を一切せずにぶち込んで欲しい」

「！・・・なぜそんなことを、お前正気か？」

「ただ（「お前はそれを得るために努力をしたか？」）の問いに対
して

『是(ぜ)』と答えたいんだよ」

「分かった、ただし後悔するなよ？・・・そら」
その刹那
俺の意識はあまりの情報量に押し流された

［それから］
狭間サイド

「とりあえず常人がギリギリ耐えられる量を流し込んでみたんだが
（加速含め）
あれから十年、いったいどうなってるか」
あれから十年後、そこには

「よう、体感時間ではついさっきだが何年たった？」
余裕綽々と会話をする霧先が・・・

「えい、「ぬわーーーーーーー」・・・パ〇スを言う余裕があるのか
もう少し量を増やすか
このままちんたらやっても追いつかないし」

※量とは情報量でありそれを増やすということは蛇口を捻る感じで増やすのだ
さらに日々『ひと』の知る知識は増えているため遅かれ早かれ増やす必要はありました※

［その後１００神世紀後］
※１神世紀はだいたい神様の平均寿命（１００億世紀くらい）※

狭間サイド

「いくらなんでも」
これは早すぎだ

「もう速度的に追いついたのか・・・
いくらこの『狭間』では限界が無いからって規格外すぎるぞ」
ついでに言うと狭間がタイミングを見計らって絶妙のバランスで
つまみを捻っていた（狭間が調節用に創った、そしていらない）

「だが今までのすべての『知識』の分の処理には時間がかかるぞ・・・
・」

［それからだいたい１０００億神世紀後］

そこには知識の処理・吸収が終了した霧先の姿が

「それにしても規格外だな、さらにあれから加速しっぱなしとは
加速の仕方も尋常じゃないし
普通はこれの４０倍はかかるぞ・・・・・・いつか私を超えるかもな
もう驚く気も失せた、とりあえずラインはカットするか」

※狭間基準の『普通』でありその基準は
『今まで連れてきた奴の中での平均』です※
※常人は終わりません※

「ふぁ～終わったか・・・」

「おつかれさん」

「あ＝疲れた、寝る「！今のｈ」ＺＺＺ」

（今『あ＝』って、その発音を既に使えるようになったのか・・・
知るだけで使えるなんてとことん規格外だな）

その後１００年以上霧先が休む事になったのは言うまでもない

３：世界と世界の（ｒｙ　・・・長いから狭間さんで（単位変更・注意）（後書

作者「霧先規格外過ぎるな」

狭間「私が居るこの『狭間』は限界こない事に特化してるが
それでも私を超えることは普通無理だ
そう設定しているのではなく『そうしか設定できない』んだ
それでも突破した奴は何人かいるがな
そして霧先はその突破したやつと同じ気配がする
楽しみだ」

作者「はい、では次回は別の人の視点です」

狭間「では」

作者　狭間「「また次回で！」」

４：狭間「普通にチート与えて転生させようと思ったんだがな」

［『狭間』］
狭間サイド

「どうしてこうなった！」

あれから霧先は色々と自分を虐め抜いてる、そう虐め抜いてるのだ
「お前Ｍか？」
と聞いたら
「ネトゲでレベル上げしてる感じと言えばわかりやすいと思う」
という返事が帰ってきた
「だったらチートすれば済むが？」
と言ってみたら
「それだと達成感がない」
・・・・・・

これはあれだな、敵をぶちのめす為ならどんな苦行でも成し遂げる人みたいな
レベル上げというドＭ作業は苦ではないは叩きのめすのは大好きなドＳ先攻のドＭって奴か？

・・・あれからの霧先の修行メニューはこれだ
『集中力訓練：サイコロの出目操作』
始めは４面ダイス一つ・最終的には２０面ダイス１０個を意のままにしていた
これが見ていて一番楽そうだった

本人曰く「ダイス云々はともかく集中力はあったほうがいい」
これには納得、しかし集中力の訓練は物凄く地味だった

精神力訓練ａ１：自傷行為（痛覚敏感化１．５倍）
爪剥がしたり電気ショック加えたり動脈切ったり
腕もぎ取ったり足切断したり金玉握り潰した時の痛覚再現したり・・・
見ているだけでＳＡＮ値が下がったぞ

本人曰く「己が傷つく事を戦況の判断材料として考えないように」
傷ついてることではなく傷つくことらしい
『感情的に』ではなく『判断的に』だそうだ

精神力訓練ａ２：妖怪化の痛覚再現
何回繰り返してたかなあいつ・・・
１０を越してからはＳＡＮ値が続かなかったよ
魂の痛みまで再現して意識が飛ばなかったそうだし・・・

１回目は「今までのどんな痛覚よりも痛かった、全身の細胞という細胞から痛覚が来るんだからな」
と言ってたが５回目からは「いい加減慣れたな」
１０回目からは「痛覚切断すげぇや、それに集中していて動けんが」
いやいや、痛覚切断は所謂暗示であり
本当に痛覚が消えるわけではないのだが・・・・・・

見なくなって久しくなったある時
「よう」「やっと訓練終わったか、いい加減待ちくたびれたぞ」
「いや、今もやってる」「は？」

「痛覚再現は今もやってる」「どういうことなの・・・」
「妖怪化の痛みでも普通に動けるということだ」「いや、説明されても」

本人曰く「痛みで動けないなんて事がないように」
だそうだが『ありえん（笑）』
そこまでやるか普通

精神訓練ｂ１：ゲームのレベル上げ
延々とやってた延々と（大事なことなので二回言いました）

閃光依頼ＩＶをノーセーブノーツールオールクリア（隠し要素込）
した馬鹿は何処探しても此奴（こいつ）しかいないんじゃないか？
レベルが億単位突入したときは「なにこのゲーム」って思った
それでも一撃死するのが隠しボス・・・
ＭＭＯＲＰＧもけっこうやってたな
ああいうのって最終的に１Ｌｖに一週間かかるらしいがあいつは四日でやってた
そりゃ四六時中ずっとやってればなぁ

精神訓練ｂ２：ただ闇の中でじっと
千年の暇は神の精神をも破壊するが此奴の精神には傷一つ付けられなかったようだ
闇の中とは情報を完全に絶った状態だ
しかも意識が飛ぶのを防いでいたそうだし
はぁ、そんな事俺でも多分発狂するぞ
１０万年やってたときは「こいつ壊れたんじゃね？」
と思って声をかけたら「よし！終わった～」・・・
なに？俺が声をかけるまでを目標に頑張ってたのか？

・・・既に正気じゃないなこいつ

しかもそれをゲームの自キャラが手に入れた技を自慢するように言いやがって

・・・まさかな

４：狭間「普通にチート与えて転生させようと思ったんだがな」（後書き）

作者「ナガンさんの妖怪化時痛覚描写を少し使ってます」

狭間「・・・（ＳＡＮ値直葬状態）」

作者「おーいしっかりしろー」

5：霧先『限界突破』　狭間「ハァ！？」

［『狭間』］
狭間サイド

ある時の事だ
《パリン！》
！？

この音は『限界突破』！
初めて聞いたのはエリスの時の≪顕現≫だったかな
今度は霧先どんな非常識な訓練やってたんだ？
見に行ってみると

「いようところで狭間この剣（？）見てくれ、こいつをどう思う？」

「すごく・・・規格外です・・・」
そこには灰色のオーラ（と言っても２１次元を内包しているがそれを知っているのは霧先のみ）
を纏った剣を下げて私に自慢する霧先の姿が

「とことん規格外だなお前は、所でそういう純粋な『力』というものは本来色を持たないはずだが
無駄に力を消費するだけではないか？」

「あぁ、色は威圧効果を出すためだけのものだ

付けないことも出来る」
と言って色を消し完全な無色になる
「それでも言い知れぬ雰囲気を醸し出してるんだが」
「『隠蔽』」
今度は完全に気配が消えた
見つけられないのではなく『完全に』だ
「・・・（汗）」
でも嫌な予感は消えない
多分これは狭間の知識と経験から来るものであろう

霧先サイド

「それじゃ、訓練も満足するまでやったしいよいよ転移しますか」
「その前に」「なんだ？」
「あんまり永くいたせいか霧先は「ここ」の住人として認識されたみたいだ」
「つまり？」
「今からする転移というのは意識だけのものになるというか元の体は今は完全に使えなくなってるし体は向こうで勝手に出来るだろう」
「了解それじゃ行ってくる」

パチポチっと、機械っぽいのを弄る
元々機械には弱い方ではなかったし
その上膨大な知識とそれを全て処理し切った頭脳があるし
（向こうでは制限しとくか・・・・）
常にマルチタスクで円周率の計算とグラハム数の計算、そしてそれらの検算と
これらが約１０％の制限
「ひと」以外の知識の流し込みを処理させておく事で制限をかける
これが約９０％、合計約１００％の制限（約なので９９．９％以上いってるが１００％ではない）
さらに『リミット』をかけて「力」の制限
バイト単位での解除が可能で「一般人＝１b（バイト）」にしてある
（一般人の強さ＝１バイドではなく１バイト＝一般人の処理にしたのだ）

ちなみに本来『バイト』はＰＣのＣＰＵの処理能力の単位だ
１（有）と０（無）の二進数を処理する速度を表す
１０バイトと言ったら二進数の十桁であり１０進数で表す事の出来る絶対値は
１０２３（２の１０乗ー１）となる

・・・話がずれた
元に戻そう

「転移っと、あ・・・」
しまったこんな凡ミスを
「この設定じゃその世界の何処に飛ぶか分かったもんじゃない・・・」
元々ある程度ランダムにする予定だったがランダム範囲の指定をしていなかったのだ

制限かけてなかったら強引に転移を止めて設定し直せば良かった事
に気がついたんだろうが
そのまま飛ばされてしまった

5：霧先『限界突破』　狭間「ハァ！？」（後書き）

狭間「やっと転移したか、長かった
だがそれにしてもあの・・・なんだあれ？
顕現とも違うし力が大きいとかそういうものでもない
だが『嫌な予感』が激しくする代物だったんだが」

追記：ｘｘ「あれは・・・なんというか
今度戦闘で使った時に説明しようと思う」

霧先「以降制限は外す描写が無ければ常にかけてるぞ」

ｘｘ「所謂制限プレイですね、わかります」

霧先「行き先はもみじさんの「半分の吸血鬼」の世界だ」

追記：ｘｘ「許可は既に頂いてますよ」

6：転移先は・・・ここどこ？（前書き）

ｘｘ「勢い余ってニレンダァ！」

狭間「はいはい」

6：転移先は・・・ここどこ？

［？？？？］
霧先サイド

「え～と、この世界ってこんなに殺風景だったか？」
『転移先』には真っ黒な風景

《バタン！》
そして背後に大きめの扉がありました

≪ガチャンガッチャン≫
鍵（錠前）が閉まる
「・・・・・・閉じ込められた？
錠前なら罠を仕掛けるのは無理そうだし鍵穴を覗いてみるか」

［とある少女のお話］
少女サイド

私はある貴族の娘

父親は水と土の属性を持って生まれその色の髪の色だった
母親は火と風の属性を持って生まれその色の髪の毛だった

その二人から生まれた私は良いのか悪いのか「火　水　風　土」全ての属性を持ち
魔力量も神がもたらしてくれたのか膨大だった

でも知ってる？色って全部混ざると黒になるそうだよ？
４つも属性を持ったから黒とは言わなくてもそれに近い色になってしまった私
私の髪の毛の色は見られるといけないから隠された

でも両親は愛してくれた
隠されていても本は沢山もらえたし
頻繁に会いに来てもくれた
でもそれはあまりよくなかった

だって髪の毛が黒っぽい子に頻繁に会いに来ているのだ
それだけで問題になってしまう
しかもそれが血の繋がっている子どもだと分かったら？

答えは簡単他の貴族に追い立てられてしまう
膨大な魔力量もあって『魔王の生まれ変わり』として追われた
幸いかどうかなのか子どもは私一人だったし
死んだのは打首にされた両親だけ
私はなんとか逃げ延びた
だけどいくら逃げ延びても行く先々で髪の毛の色による迫害を受ける

「疲れた・・・少し眠ろう」
私は森の中で力尽きた

［判明『精神世界』］
霧先サイド

鍵穴を覗いて見た記憶はそんなものだった

「・・・」
（そりゃあ真っ黒な心の風景なはずだ）
薄々感じてはいたがここは精神世界だったようだ

「『反射』」
今の自分の姿を見る為に光を反射させる

「・・・なるほど」
『ここは精神世界（ゆめのなか）だから自分しかいない』
とでも思っているのだろう
今の霧先の姿はさっき鍵穴を覗いて見た少女そのものだった
・・・髪の毛の色以外
霧先の髪の毛の色は完全な黒
さっきの少女は黒に近い混色

「行きましょうかね、こんな事が許される今の状況を放置している上層部を叩きのめしに」
理由？『イラッと来たから』以上に必要か？
「でもその前にこの子自身をどうにかしないと」

どうでもいいが精神が体に引っ張られているな

元々中性的な思考と容姿だったし気にすることじゃないが

・・・別に高校生の時授業参観で友人の母親（初対面）に
「霧先　涼・・・ちゃん？」と言われたことがショックで記憶に残っているわけじゃないぞ
そのあと女子生徒（初対面）に「女子・・・だよね？」
と言われたこともショックで記憶に残ってるわけじゃないぞ
当時はショックだったが
（一体何十億年前の記憶だよ鮮明に残りすぎだ
まぁ、残っているのは悪いことじゃないけど）

6：転移先は・・・ここどこ？（後書き）

ｘｘ「作者は幼稚園生の頃にですが霧先と同じ経験があります」

狭間「それはまだ男の子と女の子の区別がハッキリつく時期じゃないぞ？」

ｘｘ「それでもショックでした、しかも霧先みたいに「？」なんてつかずに
確定系で言われたし
友人母の方は言い訳がましく「いや、可愛かったから」とか言ってたけど
渡してきたお土産は女の子用でしたしね・・・・・」

霧先「へぇ・・・」

7：試練・・・と言えば聞こえはいいんだろうけどなぁ

［精神世界］
少女サイド

「ここは・・・夢？」
気がつくとそこは真っ黒な場所だった
さっき寝た記憶があるので多分夢だと思う

「ここはあなたの精神世界よ」

「え？」
魔物に襲われたり迫害する人間に追われたりするので
気配を探るのは非常に重要
そんな嫌でも気配の探知ができるようになるような環境で育った私
『突然そこに現れた』ようなその人は

《シュッ！》《キィン！》

突然攻撃を仕掛けてきた
あわててそれを防ぎ、距離をとる
私もその人もいつの間にか剣を持っていたが
それを気にしている場合じゃなかった

対峙したその人の姿は私そのものだった
髪の毛の色を除いて
その人の髪の毛は完全な黒
私みたいな黒っぽい混色などではなく真っ黒だった

「ねぇ、人間って馬鹿ばかりだと思わない？」

「どういう事？」

「だってただ髪の毛の色が黒っぽいってだけで迫害したり
挙句の果てには何も考えずに
ただの「娯楽」で異種族を殺す始末」

《ヒュッ》《カァン！》

お父さんが買ってくれた物語の本で似たようなことがあったっけ
その通りだとすれば今対峙しているのは
『人間を疑う自分自身』ということになる・・・けど
そうだとすれば今の「私」は
『人間を信じる自分自身』なのだろう

でも「私」は知ってる
お父さんやお母さんみたいに髪の毛の色なんて気にしない人間がき
ちんといることを

「『私』は知ってる
大部分の人間は髪の毛の色だけで差別し拒絶する人間だということ
を」

・・・戦おう
信じる覚悟を持って

霧先サイド

「『私』は知ってる
大部分の人間は髪の毛の色だけで差別し、拒絶する人間だということを」
まったく、こんな臭い芝居をしないといけない方法しか思いつかないなんて
でも立ち直らせるには手っ取り早い

「今までいた人間は
『私』の髪の毛の色だけで判断するような人間ばかりだった」
敵役演じるのも楽じゃないね

《キィン！》攻撃、鍔迫り合いに持ち込む

「でも！お父さんやお母さんみたいに
『私』をきちんと見てくれる人もいる！」

《ギリギリギリ・・・》力は拮抗し剣は丁度真ん中で止まってる

「そういう人の発言が強い世界なら
『私』は迫害なんて受けなかった！」

《ズズズ・・・》ここで少しこちらが勝る
がしかし今の『私』は完全に向こうと拮抗するように「力」を下げたはずだが・・・
成程、『疑う心』が私に力を貸しているのか
それだと納得がいくが少しまずい

「確かにそう
でも今がダメなら変えていけばいい！
一緒に変えてくれる人を探せばいい！」

《シャン！》《ザシュ！》
そう言いながら向こうは鍔迫り合いを中断しこちらを切る
ここまで言えるなら大丈夫だろう

「！？」
斬られた事に驚いた演技をする
と言ってもここまで戦えると思っていたわけでもないので
本当に驚いてる部分もある

少女サイド

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙
多分両方とも私の本心、でも私は信じる方をとった
この選択は間違ってはいない筈だ
ううん、「筈」なんて不確かなことは言わない
絶対に間違っていない

そうすると向こうはニコッと笑い
「うん、そこまで言えるならもう大丈夫だね」
・・・へ？
「貴方、黒っぽい髪の毛で生まれたせいで相当苦労していたのね」
「どういうこと？貴方は私の疑う心じゃないの？」
「違うよ、私は貴方の外から来たの
疑う心とは関係ないとは言えないけど」
「だとするとなんで貴方は私の記憶を？」
「それは転送座標を間違えてここに来てしまった時いきなり扉が閉まっちゃってね
その時鍵が閉まった物だから魔法でどうにか開けられないかと思ってその時鍵穴覗いたら貴方の記憶の一部を覗いてしまったという経緯（いきさつ）だよ」
「今転移で来たって言ったよね
空間魔法が使えるの？それで髪の毛が黒色って事はまさかあなた魔王？
それになんで私そっくりなの？」
「う～ん・・・貴方そっくりなのはあなたが原因だと思うけど」
「どういうこと？」
「あなたはここに来たとき最初にどう思った？」

「私以外はここにいない・・・・・あ」

「たぶんあなたがそう思ったせいで私が『あなた』に変えられてしまったからだと思うんだけど」

「御免なさい、あなたの姿を変えてしまって」

「姿が変わるくらい別にいいんだけど」「『くらい』って・・・」

「あと魔王であるかならなる可能性もあるしならないかもしれないでもそれは貴方次第」「私次第？」

「私は闇と時属性持っていて髪の毛が黒
そしてそれだけで差別する人間に怒りを覚えた
『お前たち人間は愚かだ、個を見ず自分勝手な想像で差別し迫害する貴様らはそれをされる側を考えたことはあるか？
一度でもされる側の言葉に耳を傾けたことがあるか？』って」「・・・・・・」

「でも貴方の両親を見て考えが変わった
『世の中にはこんな素晴らしい人間もいる』ってね
あなたはいい両親を持った」「・・・そうね」

「だからあなたの両親のような人を探すための旅にでましょう？」

「でも私たちは迫害される側なんだよ？そこはどうするの？」

「それは起きてのお楽しみ」

「起きたら解るしいいのかな・・・でも旅って具体的にどうするの？」

「でもそれを話す前に大事なことがあるよね？」

「・・・あ！忘れてた
私の名前はノルゥ、意味は『夜』なんだって」

「私はミスト、意味は『霧』
やっと自己紹介が出来た・・・・・と時間みたいね」

「時間ってなんｎ・・・」
そこで目が覚めた

7：試練・・・と言えば聞こえはいいんだろうけどなぁ（後書き）

狭間「なんだか重い話が多いなお前の文は」

ｘｘ「作者は設定が重く、内容はコミカルになる癖があります
二人の苗字は考えなくていいので楽でした」

狭間「そして恐ろしいのはここまで狭間がほとんど嘘を言ってない
ことだ
本当に食えない奴だなあいつは」

1：目が覚めたらそこには（前書き）

次話でノルゥのカンストっぷりも見せられたらなと

1：目が覚めたらそこには

［森の中の湖のそば］
ノルゥサイド

「う・・・ん・・・」
眠りから覚め意識を取り戻す

さっきまで夢を見ていた気がする
頑張っていたような
辛かったような
でも
驚いたような
嬉しかったような
それでいて何か新しいことが始まったような・・・

後周りを見渡してみると森の中だったのにいつのまにか湖の近くに
移動しているような・・・

「起きた？」

「うわっ！」
目の前にいきなり私そっくりな女の子が声をかけてくる
髪の毛は少し暗い緑色でそれ以外は私ソックリ
ここで夢の中での出来事を思い出す

「もしかしてミスト？」

「その通り、あと水面を見てみなさいな」

ミストに言われた通りに水面を見てみると私の髪の毛は緋色になっていた

「これって・・・」

「私が貴方の精神世界から出るときに貴方の属性から二つ適当に抜き取った
ちなみに魔力も半分抜き取ってる」

「お楽しみってこういうことだったんだ」

「これなら外を出歩いても問題ないでしょ？」

「そうね・・・でまず旅の方針はどうするの？」

「まずは近くの街で情報収集かな？」

「まぁ、それが妥当だよね」

「では出発しましょう」

「そうだね、行こう！」

私たちは近くの街に歩を進めた

1：目が覚めたらそこには（後書き）

ｘｘ「属性が４つもあるので分けてもらいました」

ノルゥ「普通そんな事言っても出来ることじゃないんだけどね・・・何者なの？ミストって」

ｘｘ「正直俺にもよくわからん、『規格外』としか言いようがない」

ノルゥ「規格外って・・・」

ｘｘ「霧先の精神は思いっきり少女（ノルゥ）の体に引っ張られてますが
霧先は男としてのプライドとかそういうのは全くありませんので
一切抵抗しておらず、その結果このような口調になっております
そしてノルゥ、お前も基本四属性全持ちとか普通にチートだから」

ノルゥ「まるで元々ミストは男だったような言い方だけど」

ミスト「そうだよ？」ｘｘ（無視された・・・）

ノルゥ「えっ」

ｘｘ「解りにくすぎる次回予告終了
ちなみにノルゥからミストが抜き取った属性は水と土です」

2：否定と推定両方集めよ、それをしないのは人形や機械くらいだ（前書き）

タイトルは内容にあまり関係はありません

そして前回の次回予告はこの話の次回になりそうです

2：否定と推定両方集めよ、それをしないのは人形や機械くらいだ

［王都の近く］
ミストサイド

どうやらあの森は王都の近くだったらしい
狭間からパクッたノートパソコンっぽい奴でしらべてみると
どうやら王都が一番偏見や差別が激しいらしい

（これは王都というより『嘔吐』だよね
なにこの典型的な腐った堕族（きぞく）や呉族（おうぞく）達・・・）
いままでそいつらがやった事を調べててそう思った

「どうしたの？」

「いや、典型的な『何故滅んでいないのかわかんない国』だなぁ・・・って」

「なるほど」

ちなみにノルゥにはここにくるまでにしっかりと修行をした

・・・今俺が『狭間』でやったような
無茶苦茶な訓練をしたのではと思ったやつちょっとこっちこい
流石にあれが無茶な訓練だってことは
自分でもわかってるし訓練として教えたのは細かい魔力制御と
科学と化学と道徳と高度な数学くらいだ
最後に二人の間で通じる文字を教えた

ハイリア語だ
考えるのも面倒だったからこれが手っ取り早かった
それに覚えさせたのも元素配列表くらいだし
そんなのここまで歩いてくる一ヶ月でどうにでもなった

そう二週間を歩いて旅してきたのだ

「水が飲みたい」と言ったなら水の魔力をノルゥに移して
「さっき言った授業の復習、この魔力で上空にある雲から水分を集める事
今回は無駄遣いしてもいいようにかなり多めに渡したけど
これからだんだん減らすから
魔力制御の訓練にもなる」と言ったり
「肉を食べたい」のなら食べられるモンスターの肉を
実践訓練と並行して取りに行ったり
その後もしないよりはいい栄養管理のために食べられる野草と
ついでに薬草と毒草について教えたり
そしてその野草の美味しい調理法や香料に使えるハーブも教えたりした
薬について教えたときは驚かれたっけ
「この薬草はこうして４０倍に薄めれば痛みを和らげる薬になるんだよ」と教えたときに
それを毒草だと覚えたいたらしく驚いた顔をしていたっけ
そこから熱心に聞いてくることと言ったら
「○○△□はどう使うの！？」
「それは◎◎◆▼の毒の中和に使う、逆もまたしかり
これは両方の毒が全く逆の作用だからなんだ
○○△□は神経を麻痺させて動けなくする毒で

逆に◎◎◆▼は神経を過敏にさせて風にすら痛覚を感じさせる毒
多量に取ると石ころひとつでショック死するから注意」

「◎◎■◆は！？」
「それは１００倍に薄めて魔力の活性剤にするの
元のままだと魔力が暴走して勝手に放出し最終的には全て放出しきって
一週間は動けなくなるから注意」

「◆□▼△○△◎は！？」
「それは乾かしたあと粉々にして３０倍の水に溶かしてから傷口に塗って止血するの
そのまま飲むと血液が凝固して詰まり最悪の場合は心筋梗塞や肺梗塞、死に至る」

覚えられなかったら○○とかではなく覚えられるまで何度も教えた
科学と化学にかなり興味がありスルスルと覚えたが
今まで見たことが無かったからだと思う
初めて魔法を見た現代人みたいなものだろう
「今日は今まで教えた事をきちんと覚えているか
簡単にテストしてみる」

「では問題です、『乳化』とは一体何のことでしょう」

「水に溶けない液体があたかも溶けたように
見える状態の事です」

「具体的にどうなっているでしょう」

「水に溶けない液体が（例えば油）が
小さな小さな粒子になって水の中を舞っています」

「時間が経つとどうなるでしょう」

「比重で別れて乳化する前の状態に戻ります」

「他に覚えていることを一つ述べよ」

「『乳化』という名前は光が乱反射して見える色が白っぽく
牛乳っぽくに見えた事から付きました」

「正解
次、点描法について」

「はい、点描法とは
近くで見るとただのカラフルな点の集まりですが
少し離れてみると、錯覚で色が混ざり絵に見える描写法の事です
この方法は非常に手間が掛かり使われなくなってます」

「正解
次からは交渉術、知能戦や舌戦の問題です
私が教えた『世の中の物の見方』は？」

「『いくら推定や否定の材料があっても必ず反対の材料も探しかき
集めよ
我々は全知全能な訳では無いのだから
欠けた情報で判断なんて出来る訳がない、だから無駄だと思う情報
も集めろ

「与えられた」情報のみで判断するのは人形や機械と同じだ』でしたよね？」

「大正解、覚えていてくれて何よりです
次の問題　（今日のおやつの為に焼き上げたケーキ）《トス、トス、トス》
このように三等分されたケーキがあります
三分の一を百分率で３３．３３３３３３３３３３……％ですが
残りの０．０００００００００００……１％は何処に行ったでしょう？」

「はい、それは　・「《チラッ》」！？
切ったナイフに付着しているものと思われます」

「正解、今のは数学の問題ではなく
前問に引き続き『物の見方』の問題でした
良く覚えていましたね」

「照れるなぁ、ミストがナイフを見せなければ気付かなかったよ～」

「『見せたら気づいた』のでしょう？
それは頭の随まで私の教えを覚えたということで悪いことではないのですよ？
今回は情報を『置き』ましたが本来相手は情報を『落として』行くのです
『落とした』情報をいかに拾い集めて繋ぎ合わせるか、それが重要なで
練習ではこの程度の難易度で十分なのですよ」

とこんな具合
教えてから一度問題を出して覚えさせる
そして次の日に問題を出して覚えさせる
覚えていなかったらもう一度教える
ということの繰り返しで教えたのだ
『覚えていなければ何度だって教える』
イラついてはいけません

傍から見たら双子の片方がもう片方に教えているようにしか
見えなかっただろうな・・・

それでいいんだけどさ

「頭を使ったから疲れたよね、このケーキ食べようか」《スッスッスッ》
ケーキにさらに3回ナイフを入れて6等分にする
小麦粉も卵も嘔吐（誤字にあらず）に行く前に寄った村で買った

「やった！前に食べたときもこのケーキってやつ美味しかったんだよね
王都についたら売ってみる？」

「それはありかもね、さ食べようか今日は一切れね
明日の昼と夜にあと二切れを食べようか」
この程度で太ったりはしない
なぜかは解らないが魔力を消費すると一緒にカロリーも消費するのだ
魔力も人のエネルギーだからだろうけど

頭を使った後のケーキは美味しかった
ノルゥの笑顔も最高だった

２：否定と推定両方集めよ、それをしないのは人形や機械くらいだ（後書き）

ｘｘ「ふぅ、地味にですが２ｃｈから群抜
ゼル伝を少しパクったりもしています
そして薬草と毒草の効果は自分で考えました
元の小説に同じ効果の薬草や毒草が出たら記号を名前と入れ替えます」

狭間「良くここまでやったな」

ｘｘ「やるからには力をいれます
そしてそれが楽しいのです」

狭間「そして霧先にノーパソパクられた・・・・」

ｘｘ「ご愁傷さま」

3：ギルド登録・武器入手

［王都・・・に入る少し前］
ミストサイド

「ふぅ、やっと着いた・・・」
「はぁ、お疲れ様」
上からノルゥ、ミスト
いくらでも身体能力は上げられるが
疲れた『経験』をしておきたいので身体能力はノルゥに合わせてある
今まで知識と技術は最高まで磨いたが『経験』が霧先には殆どない
のだ

「とちょっと待った」

「なぁに？」

「あなた『ノルゥ』として街に入る気？」

「あ・・・・・」

「偽名は・・・そうね『シァラ』意味は緋色」

「ありきたりだけど元の名前も似たようなものだからね
それで行こうか」

「OK、それじゃぁ入ろうか」

［外門］
ミストサイド

「止まれ」

「何でしょうか？」

「身分証明書を見せろ」

「ありません、私たちはそれを作りにここまで来たのです
腕に覚えがあるので冒険者ギルドで発行するつもりですが・・・・」

「駄目だ、それでは入れるわけにはいかない」

「これではだめでしょうか」
と、銀貨を数枚見せる

「きちんとあるではないか」《ニヤニヤ》
駄目だこの国、末端まで腐ってる
いつか空中分解するよこの国

「さ、シァラ行きましょう」

「あ、うん」

［王都の中］
ノルゥサイド

「うわぁ・・・」
人がいっぱい！
そしてアクセサリーや屋台（食べ物）
そして服屋や武器屋を眺めていると

「あっ」
そう言えばこういう風にキョロキョロしていると
（「ほら、キョロキョロしないさっさとギルドに行く！」）
とか言われそうだなぁ・・・と思って後ろを振り向くと
《キラキラキラキラキラ》
（あれ？・・・・・さっきの私と同じくらいに目が輝いてる？）

それもそのはず
ミストは知識で色々なものを知っていてもそれを見た情報は無いのだ
簡単に言うとテレビで見た外国の道具を初めて生で見る気分に似てるだろう

「《キラキラキラ》・・・・・あっごめん、知ってはいるけど
見るのは初めてだったものだからつい」

「あ、うんいいよ
私だって似たような感じだったし・・・」

「だったらおあいこさまだね、早く冒険者ギルドに行こうか」
そこからはまっすぐ冒険者ギルドに向かった

［冒険者ギルド］
ミストサイド

《カランカラン》

チラリ、と少しだけこちらを見たのが何名か
新人だと解ると特に気に止めるでもなく仲間内の会話に戻る

「普通はこんなものだよね」
というか普通は登録する新人の顔まで覚えている奴の方が少ない

カウンターの前に座り受付呼ぶ

「すいません、ギルドの登録に来たのですがー」

「はい、登録は何名でしょうか」

「二名です」

「了解しました名前をこちらにどうぞ
代筆は必要ですか？
偽名で登録されても構いませんが罪を犯した場合は身元を調べますので」
と紙を渡される

「必要ありません」

「わたしもいりません」
私は『ミスト』ノルゥは『シァラ』と書き入れる
「ではこちらのギルドカードをどうぞ
ランクはFとなっております」
緑色のカードが二枚渡される
「どうも」「ありがとうございます」
「仕事ですので・・・ギルドへの登録が完了しました」
これでギルドへの登録は終わった
「今度は武装を整えないと」
「あ、待って！」
次は武器屋に向かう
［武器屋］
「なるほど、なかなかの物があるわね」
「ねぇこれは？見たことない武器だけど・・・」
「これは・・・！？」
『四方詰鍛え』と呼ばれる製法で作られた日本刀、業物だ
『四方詰鍛え』は非常に手間がかかる上に難易度が高くこれで刀を

つくる奴なんていない
ハッキリ言って卓上の空論だ
だが奇跡的にでも成功させたなら最高の業物になる
さらに異世界と言うべきか

側金(かわがね)に火
この部分は左右両側にあり他3つの全てに接している為
純粋なエネルギーである熱をここに持って来るのは上手い物だろう
心金(しんがね)に水
不定形でありながら硬さを持つ水
柔らかさと硬さの両方が必要なこの部分にはもってこいだ
刃金(はのかね)に風
ここは『切る』部分でありそれに最も適した風を持ってきている
棟金(むねがね)に土
ここは目立たない部分
しかし切るには実は非常に重要な部分なのだ
つまり裏方で支える存在であり無いと困る
まさに土が適任である
鍔(つば)に光
鞘(さや)に闇（内側）と影（外側）
これは刀を鞘に収めたとき光と闇の間に影が挟まることになる
柄(つか)に時と空
握りの部分であり刃はここに食い込む形で入り込んでいる
つまりこの二つの属性で刃の状態を保っている
そしてここは持ち主が手を触れる部分である
時と空間、属性を与える部分には適している
最後に峰(みね)には・・・なんだこれ
これらのどの属性にも当てはまらない
かといって無属性でもない属性の魔力が込めてあった
だがそれ以外は練りこんであった

そう『練りこんであった』のだ
込められていると言うよりも馴染ませてあると言った方が正しい
他はともかく心金はどう調べたかって？
それは刃の中から水の魔力を感じるからさ
四方詰鍛えの構造を知っていれば解る

これに至るまで一体いくつの失敗作を作ったのだろうか、想像する
だけで恐ろしくなる
間違いなくこの刀には魂が入っている
俺が『力』を使って作った剣の方が強いは強いが
そんなの、この『刀』とその職人に失礼だ
（一体これほどの業物がなぜここに、なんでこんなところに・・・」

「ミストそれ知ってるの？
『こんなところに』って言う位なら知ってるんだよね？」
どうやら途中から声が漏れていたようだがあまり関係ない

「店主、これはお幾らですか？」

「銀貨１０枚だね」
（銀貨１０枚？）
耳を疑った

「はっきり言ってそれは飾りだ、なんせ武器に必要な力がない
そんなんじゃこの板すら斬れなかったよ」
ヒョイっと私が手に持ってる刀を取り銅の塊を『叩いた』
それでも半ば当たりまで食い込んでいるのは流石だろう

「・・・・・」

「な、こんなものだ
少々魔力は篭っているけど大したことはない
言っておくけど銀貨１０枚すらふっかけ、４枚で十分だよ」
違う、この魔力は属性に馴染ませるための物だ
魔力での強化に最も適した配置で作られてある
決して魔力を込めて魔法を発動させるための物ではない

「１０枚払うよ」

「は？」
《ちゃりちゃり》

「ふっかけで金貨や星貨が出なかった事を後悔させてやる」

「ちょっとまて、金貨はともかく星貨って・・・」
「店主」

「なんだ？」

「これで私はこの刀を『買いました』よね？」

「カタナとか言ったな、ああ『売った』」

「行こう、シェラ」
「ちょっと待って」

「なんだ？」

「私の武器まだ買ってない」

「速く選んで持って来い」

「うん・・・・・・・じゃあこれ」

ノルゥサイド

「私の武器まだ買ってない」

「速く選んで持って来い」

「うん・・・・・・・じゃあこれ」
さっきよくわからない武器を選んでミストが即決で購入したから
もっと解らないこれはどうなるのか渡してみた、二つ同じものがあった

「店主、これお幾らですか」

「一つ銀貨一枚
と言ってもそれも飾りさ、どうやって使うの？投げつけるの？
武器屋にあるのも馬鹿らしい代物さ」

「へぇ、ではこれはどこから？」

「この店を買い取った時にそのカタナとやらと一緒にあった

一体なんに使うのだろうな」《ケラケラケラ》

「・・・・・・これも買った」

とミストは銀貨二枚を出した

「え・・・」

「おや、それも『売っちゃって』いいのだな？」《ニヤー》

「ああ『買った』よ」

「取引成立だな」

（こんな訳の分からない物まで？）

「ハァ・・・・・」

「何ため息ついてるのミスト？」

「世も末だなってね」

「はぁ・・・・・」

一体どう使うんだろうあれ

3：ギルド登録・武器入手（後書き）

ｘｘ「さて、これでギルドへの登録が完了したわけですが」

霧先「なんだあの日本刀は、何が目的で作られたんだ」

狭間「あれはこちらの世界に来た昔の日本の職人が
『最高の一振り』を目指して作った物だ
私はそいつに全ての魔法が使えるようにしただけだが
元の世界の技術も使えた、峰の部分はそれだよ」

霧先「何故それほどのものがあんな値段で売られてたんだ？」

ｘｘ「それは店主の目が節穴だったのです」

ノルゥ「私の武器は一体どうなってるの？」

ｘｘ「次回をお楽しみに！」

4：ではさっそく依頼を・・・どうしてこうなった

［街中の大通り］
ノルゥサイド

「ねぇ」

「なに？」

「私が今持ってるこれってなんなの？」

「拳銃、拳魔銃とでも言いましょうか」

「なにそれ？」

「それは街の外でやらないと色々とまずいから
そこらへんの森で」

「わかった」

［王都の外れの森］
ノルゥサイド

「ねぇ、ここで何するの？」

「その武器の試し打ち」

「この武器どう使うの？」

「その魔銃の宝石部分にグリップから魔力を込めてみて」
「こう？」
宝石部分が少し輝く
「引き金を引いてみて」
「引き金ってこれ？」
「そうそれ」
と言われて引くと
《パン！》と乾いた音が響いて木を貫通した
「それは急所を打ち抜いて殺す武器なの
弓矢と同じね、でもそれの初速は音速を超える」
でも今のって初速はマッハ４くらい行ってたよ
なにこれ強い
「それって・・・」
「あとこれは推測だけど
込める魔力に属性を付けるとその属性の攻撃になると思う
後、今思いついたんだけどもう一つ火の魔術についてもう一つの使い方があると思うの」
「火の魔術をどうするの？」
「火の魔術は熱、つまりエネルギー

だったら『電気量』も操れると思わない？」

「え？」

その発想はなかったよ

世の中ではこの魔力は火だと認識されてたけど

本当は「力」の魔術だったんだね

「やってみる」

・・・・・・《バチバチバチ・・・・・・》

「おお、成功した

今度はそれを使って磁力を操ってみてよ」

そのまま集中し今度は「磁力」をイメージする

《ザザザザザザザザザザザザ》砂鉄が集まる

「次、熱量で溶かして鉄にする」

そこに鉄を溶かす程の熱量が集まる

「熱い・・・熱量そこの中に留めておいてよ」

言われた通りに熱量を纏め上げる

「次、熱量を下げる」

今度は熱量を下げる

「よし、鉄が完成

次はその鉄を丸い弾にして」

風の魔法で切って丸く加工する
大体直径１ｃｍくらい
「鉄球に固定化（空間魔法）をかけてと、次はさっき操った磁力の魔法をその銃に込めて」
言われた通りに銃に魔力を込める
「次、さっきの鉄弾を風魔法の応用のハードエアーで空中に動かして」
ハードエアーは空気を集めて密度を濃くして固形並みの硬さにする魔法
その固めた空気の中に鉄弾を入れて動かす
「次、まだ磁力足りないからもっと磁力魔法込めて」
さらに魔銃に磁力魔力を込める
「次、鉄球を空気の檻から出した直後にその磁力魔弾で鉄球を打ち抜いて
鉄球と一緒にあの森から出てきたレッドベアーを撃ち抜くように」
「はい」《ズゥン》
（って撃ってから気づいたけどレッドウルフってＡランクモンスターじゃん！
なんでここにいるの！）
解説：ブラウンウルフはレッドウルフに餌を減らされていました

そしてレッドウルフが餌場を移動する際に森を抜けて別の森に行こうとした時
運悪くレールガンにぶち抜かれてしまいました
そしてミンチが完成、主にソニックブームで
ちなみにレッドウルフは群れに捨てられた奴で単独行動しています

「・・・・・・」
ノウゥ　は　かたまって　しまった！
「《ニヤニヤ》」
ミスト　は　ニヤニヤ　している！

「な　ん　じゃ　こ　りゃー！！」
ノルゥ　は　ぜっきょう　した！

その後拡大解釈で
土魔法で固体
水魔法で液体
風魔法で気体
を操ってみたがどれも上手くいった

［ワイルの森］

ミストサイド

私は
『Ｆランククエスト　ブラウンウルフ５匹の討伐』

最近このブラウンウルフが餌が減ったのか王都に来る人を襲うよう
になったそうだ

餌を減らしていたレッドウルフは先ほどミンチになったが
証拠となる素材も判別不可になっていたのではぎ取れなかった

ウルフ、つまり狼だが魔法を使えたりはしないので
腕に覚えがある奴なら奇襲に警戒すれば剣や魔法一発で殺すことが
できる
一般人でも倒すことができる魔物なので冒険者なら倒せて当然

そしてノルゥは
『Ｅランククエスト　魔力草１０枚の採集』

魔力草とは栄養と共に魔力を蓄えている草で
主にヒーリングポーション生成の材料などで使用される

その名の通り魔力が集まっている場所に良く生えている
本当にどこにでも生えているが
ランクが高い場所で生えている魔力草の方が
より魔力を多く含み質の良いポーションの生成が可能となる

の依頼を受けていた

基本は魔力草を採集しつつ奇襲に警戒
そしてブラウンウルフを見つけ次第討伐
という方針をとるつもりだったのだが

短剣を持った吊り目の痩せた感じの長身の男と
杖を持ったローブを着た魔術師風の男が不自然に硬直したまま
恐らく魔法で動けなくなっているのだろうか
喋る事すらできないようだ
そしてブラウンウルフに襲われている、丁度五匹
後誰かの首が転がっている、あいつらの仲間だったのだろうか
だとしても体が無いのはおかしい

こんな光景を見て自分は
「エグイね」
と言って顔をしかめただけだった

ノルゥサイド

「エグイね」
ミストはそう言って顔をしかめてる

「ねえあれ！助けようよ！」

「仕方ない、目の前で死なれても目覚めが悪いし助けようか」

ホッ、良かった
ミストが『見殺しにする』と言ったらどうしようかと

「よし貴方がやりなさい、実践訓練も兼ねるよ」
こんなこと考えてるのバレた？ちょっと不機嫌そうなんだけど
「『風よ　我が声に応え　射抜け』」
そう唱えると風の矢が五本
見事にブラウンウルフの脳を射抜き絶命させた

ノルゥサイド

「さてと・・・ってなにこれ
魔術に喧嘩でも売ってるの？無理矢理魔力で押し通したようなこの魔法
それこそ吸血鬼並みの魔力が無いと無理よ？」

「は？」

「巷で『獣人の里の人達が新しくできた吸血鬼の国に移動したらしい』
とか『吸血鬼が作っている国は人間に嫌われてる者を集めている』
とか突拍子もない噂が流れているけどあながち間違っちゃ居ないかもね」

そんな噂聞いたことが・・・
てそういえば情報集めなんてやってなかったよね

「どういうこと？」

「どうやら吸血鬼が国を作ろうとしているらしい

でもあくまで噂だと思ってたんだけど
少なくとも吸血鬼に準ずるなにかがいることは間違いない様だ」

「私たちも・・・」

「駄目ね」

「えっ？」

「そこに行ったら最後
『人間に忌み嫌われている』と思われる、そうなったら動き難くなる」

「でもそれってこの二人に聞かれてもいいの？」

「この二人は時魔法で動きを止められているから全く聞こえちゃいない」

「時魔法・・・ってそれ勇者しか使えないんじゃないの？」

「さぁ？でもこの二人が時魔法で動きを止められている事は確かねボソボソッ（でもこんなんじゃこいつらにくるしみなんてあたえられないけどアホなのかな）」

「だとするとその吸血鬼ってかなり強いことに・・・」

「多分これでも魔力をあまり消費していない
普通吸血鬼でも今のあなたの三分の二もあればいい方
こんな魔力の無駄遣いをしたりはしない」

「なるほど、つまりこのくらいの『無駄遣い』をしても
全く響かないような奴がこれをやったんだね」

「その通り
無詠晶でもそれなりに技術があれば消費を減らせるんだけど
これはそれすらやっていない
私がこれをやるとしたらこの魔力の十分の一もいらない、と早く解除しないと」

何気に力業でやった魔法って力業でしか解けないんだよね
とか言いながら解除を行なっている

「それ」《パキーン！》

「うわーーーーー！！！って居ない？」
と短剣を持った男

「助かったのか俺たち・・・」
と魔導士風の男

「さて、どうしようか」

「お、お前たちが助けてくれたのか！？」

「そうだよ、私たちが助けたの
でも私達が助けたことは誰にも言わないでくれる？」

「あと、誰にやられたのかも言わないでくれると嬉しいんだけど」

「畜生、相手の実力見てから仕掛けるべきだったよ、ごめんな・・・

・・」
短剣持った男は仲間の死を嘆いているようだ
「助けてくれたお礼だ、それくらいはお安い御用だ
だが何故知らせてはいけないんだ？」
魔導士風の男はなかなか鋭い
「それを貴方達の教える義理があると？」
「・・・そうだな」
少なくとも実力差は解っているらしい
「剥ぎ取り終わったよ～」
「ありがとうシァラ、それじゃ行きましょうか」
と帰ろうとすると
後ろから殺気、そして火の玉が
殺気もうまく隠されていたしそれなりに高位の魔導士らしい
多分ノルゥじゃ燃やされていた
振り返りざまに刀を一閃、さらに水の魔力をついでに刀に乗せて放つ
火の玉をかき消した後さっきの二人の後ろの木を少しなぎ倒してか
ら魔法を霧散させる
「恩を仇で返そうなんていい度胸だな」
「すまない、本当に君たちが俺たちを助けたのか知りたかったんだ」
「結果は？」

「本当にお前たちが助けてくれたようだな、すまなかった」
「次やったら今のをあなたたちに向けるよ
今のは警告、二度目はない」
「わかった、帰るぞ」
「レイドさん・・・解ったよ、帰ろう」
今度は向こうが帰ろうとする
さっきのお返しだ
土の魔力を詠唱、そしてレイドと呼ばれた男の下にグランドスピアを形成する
「！？」
驚いている様子だが難なく避けた
「さっきのおかえし、貴方の実力が計りたくて」
「魔力隠蔽か、俺じゃなかったら死んでたな」
「そりゃどうも、後あなたはまっとうな仕事をしたほうがいいわ」
「それは良い評価をありがとう、後そこのシァラとか言ったか？」
「はい」
とノルゥは答える
「見覚えがある気がするのだか・・・気のせいか」

これはフラグだな

「そうですか？」

ノルゥは覚えていないようだけど

「受け取りなさい」

と言って私は『情報』の玉を生成する

「それはなんだ？」

「いいからそこを動かないで」

スゥ・・・とその玉をレイドの頭に入れる

「ウグッ！・・・・・ハァ、今のはなんだ？」

「私たちの間で使っている暗号

縁がありそうだから渡した、他の奴には仲間にだって漏らしたらだめだよ」

「『ハイリア語』というのは何かは解らないが

俺は信用されたらしいな」

「その通り」

「縁があったらまた会おう」

「あるから渡したのだけどね、さようなら」

？？？サイド

「へぇ・・・まさかこう繋がるなんてね、面白そうなことになる予感」

楽しみにしておきましょうか

《ギロリ》

「なっ！？」

あのミストとかいう奴こっち見た！？

「手は出さない方が良さそうね・・・」

『あれはやばい』と悟った瞬間であった

４：ではさっそく依頼を・・・どうしてこうなった（後書き）

ｘｘ「本家のチート主人公の魔力は約１０万
元々のノルゥはだいたい６万くらい
そして今の二人は約３万
今回魔銃には両方合わせて３０００程込めました
普通の吸血鬼は約１万程度
上位の吸血鬼で２万もあればいいところです」

狭間「魔力が多過ぎるのって十分差別対象になると思うが」

ｘｘ「６万もあると今のノルゥには制御不可だけど
３万だと押さえ込んで隠すくらいはなんとかなります
その為の修行も霧先が叩き込みましたし」

狭間「レイドとやらの実力は？」

ｘｘ「魔力隠蔽をしていたからあの一瞬では魔力を頼りにできない
だけど殺気と勘で気づくくらいには実践経験あり」

１：恋人捜索の裏方　勝手な『便利屋』開始　勝手な『便利屋』１（前編）（前編

「そして半分の吸血鬼は何を願うのか」恋人探し編
裏方の話になると思います

1：恋人捜索の裏方　勝手な『便利屋』開始　勝手な『便利屋』1（前編）

［嘔吐な王都］
ミストサイド

暇になって少し王都を散策していたら
（なにこの人）
（「私の恋人知りませんか？」）
と訪ねながら歩いている人がいるのだ
（でも面白そうなもの抱えてる）
と思って追跡したのだ
そしたら

「私の恋人知りませんか？」

「いや・・・あの・・・そんなこと言われても・・・」

「あ、やっぱり・・・駄目ですよね・・・」

「あぁ・・・いや、そういうわけじゃなくてさ・・・恋人とかいきなり言われてもよくわからないし・・・」

「はぁ・・・って、あっ！そうでした！　うぅ・・・だからさっきからみんな変な目で見てたんだ・・・」

（そりゃ当たり前だ）
『恋人を探してください』なんて言ったら
いらん勘違いを産みかねない
それにしてもあの男の腕輪

（あれから神力（じんりょく）を感じるわね
効果は・・・・隠蔽と改変か、魔力以外の『力』
を感知する術のないこの世界の住人にはほぼ感知不可能だろうけど
私にはバレているよ）

「それで？恋人を探してる理由と恋人の特徴は？　ってかギルドに
いるんならクエストとして出せばいいんじゃね？」

「クエストでそんなのをクエストにしても誰もやってくれませんよ・
・・・・私の恋人はマークというのですが　ある日　「俺はもう
駄目だ　セリエスにはすまないと思うが　別れよう」なんて置き書
きが私の家の机にあったんです　マークは学者なんですが　置き書
きの前日に「すごい事を発見したぞ！」って言って息を巻いていた
のに　いきなりこうなったものだから　私はマークの家に行ったん
です　そして・・・マークの家は跡形もなく消えてました・・・」

「・・・なるほどね・・・そのマーク君の特徴は聞いても意味ない
だろうな　たぶん何か厄介ごとに巻き込まれてるな　それも家がい
きなりなくなってるのに　誰も何も噂してないところから　権力の
大きいやつが関わってることもわかる」

（へぇ、あいつ中々頭良いね
でも付け加えると
『マークという学者の研究を独り占めしようとしているか
その研究がその貴族にとって都合のよくない事』なんだろうけどね）

「・・・・・・」

「・・・うん、引き受けてもいいよ　その恋人探し」

「えっ！ほんとですか！」

（依頼を受けたみたいね
でもその貴族の監視に聞かれている可能性を考慮していないのかしら
まぁ、遮音結界張っておいたからその心配も無くなっているのだけど）

「ねぇ、セリエスさん報酬のことなんだけどさ」

「・・・お金あんまりないですけど・・・
それでもいいのならお願いしm・・・」

「いや、お金はいらないよ　寝れるところをくれれば」

「えっ　そんなことでいいんですか！？」

「うん　後ろの連れもいるけど　三人分用意できる？」

「はい！・・・家族はみんな死んでしまったので部屋だけは余ってるんですよね　今はマークもいないし・・・」

「そうか・・・」

「あ、そんなにしんみりしなくていいですよっ　殺されたとかそんなのじゃないですからっ！」

「そうか・・・とりあえず家まで案内頼むな」

「ほわぁ・・・」

「ん？なんだ？」

「いえ・・・やっぱり冒険者なんだなーって」

「プッ　こいつらにそれ聞かれたら　「私はそんなに重くない！」って怒りそうだな」

「あはははは」

面白くなりそうだから一つ荒らしてやろうかね

でもあっちも動きそうにないし今日は帰るか

2：勝手な『便利屋』1（中編）

［嘔吐な王都のある宿屋］
ミストサイド

朝起きた瞬間

「ん？」
王都中に光と闇の魔術
それに半端だけど魔力隠蔽もかかってる？
それにこの魔術
４００年前に勇者が作った
光の鳥の魔術とそれを闇に置き換えただけのもの？
ちょっとお粗末ね、でも範囲が広すぎて全然術者の場所が特定できない

「どうしたのミスト」

「いや、昨日面白そうなもの発見してね」

「なにそれ！私にも教えてよ！」
「この嘔吐（おうと）のドロドロとして
とても汚い部分を観たいならどうぞ？」

「遠慮しておくよ・・・」

「さて、ちょっくら『面白いこと』を見に行ってきますか」
「今言った『ドロドロとした部分』を見に行くの？」

「その通り
来たいなら来てもいいけど足を引っ張らないように」
「わかった」

［嘔吐な王都の宿屋外］
ミストサイド

カタカタカタ・・・『神力付き腕輪　三人組み』っと
「『赤兎亭』ね、行きましょうか」

［赤兎亭］
ミストサイド

「俺はイシャメシを頼む」
「私は肉野菜で」
「じゃあ私はエビラの肉巻きで！」
成程、ここの店は腐っても王都一だからね
美味しい料理を食べにここに来たのか・・・
って緊張感ないなぁ
それにしてもこの『目録』

画像がないのね、まぁあらかじめノートパソコンで把握しておいたけど

「っと、いい感じの情報を手に入れたぞ」

「え・・・それはどんなことなの？」

「「これがセリエスにバレるわけにはいかないな・・・」という声だ　外見からしてもマークと見ても間違いはないだろう　とりあえず鳥に尾行させる」

あの魔術の術者はこいつか

「了解っ！とりあえずさっさとごはん食べましょ！」

「そうですねー　腹が減ってはなんとやらですからー」

あの銀髪の子と朱色の子は
食い気が強いわね

後この世界にその諺は無かった筈だけど
何処で知ったのかな？
あの中に地球の日本出身の奴が居る可能性があるね
これは良く調べておかないと

食べ終わって店から出たわね
というか食べるの速すぎ

［王都の目立たない場所］

ミストサイド

？王都のひと目のつかないところに来てどうするつもり？
あっ、腕輪を外したね

（！？あいつ吸血鬼だったのか！通りで腕輪を使う筈だ）

『闇よ　我が望みに応えよ　彼の者をここへ誘え』

「っわあああああ！」

成程、それをするために王都の外に出たのか

それにしても迂闊ね
いきなり人が消えたら絶対に騒ぎになるだろうに

3：ミスト「私の『仕事』が無いのは良いことだ」　　勝手な『便利屋』1

［王都の目立たない場所］

「ど、どこの者だ！ゴートン家か！？お、俺は話さないぞ！俺を尋問したって無駄だからな・・・フフフッ　舌を噛み切ってしゃべれなくするぞ・・・」

吸血鬼が光魔法で精神を落ち着かせてから質問している
吸血鬼って光魔法使えたっけ

盗み聞きした話の内容をまとめると

・勇者の文献にあるデンキという物を発見した
・それを王宮に説明しに行こうとしたらゴートン家に拉致られた
・デンキをゴートン家なんてものに知られたら　悪用するだけなので逃げた
・セリエスというのはゴートン家の者で　家に帰れなくなった
・デンキについては彼にも教えていなかった

ふぅん、悪用・・・ね
確かに電気は見えないし暗殺には適しているかもしれない

「ウフフ、ご苦労様やっぱり冒険者に頼むのが一番早いわよねぇ・・・後をつけていてよかったわ」

と言って路地裏から女性が登場
私は気づいていたけどあの吸血鬼は気づいていない
気配探知能力は低いみたいね

そして吸血鬼が混乱してるうちに
その女性が吸血鬼の首を短剣で断ち切った

馬鹿ね、吸血鬼が首切ったくらいで死ぬわけないのに
吸血鬼そのものを知らなかったみたいだけど

「ウフフフッ　これで邪魔者はいなくなったわよぉ？　わざわざEランクの冒険者を探して頼んだのだからぁ・・・　もうちょっと時間がかかるかと思ってたのだけれど　どんな手品を使ったのかしらねぇ・・・　いきなり転移してくるんだもの」

わざわざ説明しているわね
本当にこいつ馬鹿？転移魔法使うってだけで
それなりの奴だって事に気づかないわけ？

お、治ったか
魔術を使うために腕輪を外してたから
吸血鬼の特徴である再生能力は生きている
あの腕輪は改変だから腕輪付けたままだと能力が落ちるみたいだけど・・・

吸血鬼は恐る恐る仲間が居た場所に首を向けた
人間の死体があった、と言ってもあのお仲間さんは
既に移動しているわけだけどこいつは勘違いしたみたい

「おぅあああああああああああああああああああああ！」

吸血鬼は魔力強化をし、女性の背後に瞬時に回る
女性は首を断ち切ったのに生きているから戸惑っている
吸血鬼の再生能力を応用し爪を伸ばし
短剣を持ってる右腕を左手で斬り腕がボトリと落ちる

「ぁ」

女性がしゃべろうとしてるが吸血鬼はそんな暇も与えてない
右手で左足を斬る、左足がなくなり倒れようとするが
倒れる前に左手で右足を刺す
そのまま両手で
刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す刺す
何度も刺しまくっている

「っがっぁぁぁ！」

連続的な刺突によりひしゃげた右足は使い物にならず
腰から崩れ落ちる女性
崩れ落ちた女性の腹に目掛けて吸血鬼は右足を叩き込む

「っぁ」

まだ女性はしゃべろうと出来るのか・・・
だが吸血鬼はしゃべる権利などないと言いたいように腹に爪を突き刺し
そのまま引き裂く、腹筋により抑えられていた腸が噴き出す
吸血鬼は掴み、引きずり出す

「ごぺっ」

女性は血を吐いたようだ、目がうつろになってる
このままではショック死するかもしれないわね

吸血鬼は闇魔術で女性に干渉する
（何をする気だ・・・・・）
普通ならショック死してもおかしくないのに
女性は生きていた

「きやぁ・・・ふぇ・・・・」

何かを言いたそうだが解らない
吸血鬼はそのまま腸を女性の口に突っ込み
時魔法で固定化させてしゃべれなくする

（この時点で時を止めた場所の血液が止まって
それでも流れようとするから心臓が爆発、もう死んでいるわ）

次はそのでかい胸を爪でそぎ落とす
そのまま鳩尾あたりに爪を突き刺し、腹まで割く

奴は女性の精神が途切れないように闇魔法に魔力をさらに与える
（意味ないよ・・・（笑））

まずは耳、そぎ落とし耳に掌打を与える
今ので鼓膜が破れただろうがもう関係ない

女性の蒼い髪を掴み　持ち上げる
そのまま腸がむきだしになっている腹に膝打ちする

奴は女性の最後を惜しむかのように髪を引きちぎり鼻をそぐ
最後に最大限の蹴りをセリエスの首元に放つ

女性の首から上は見事になくなり
首から下はもはや肉片と言えるものしか残っていなかった

そのまま鳩尾だったところに手を突き刺し周りに弾け飛ぶように引き裂く

「まだだ・・・まだ足りない・・・ユーリをこんな目にあわせやがって・・・」

奴は首のところまで走りその首を踏みつぶす
何度も何度も何度も何度も何度も
踏み終わった後には平べったく赤いナニカしか残っていない

「ユーリ・・・」

（仲間の一人の名前はユーリっと）

奴は横たわる死体を前に涙を流す

そうしてると奴の後ろから奴の方に奴の仲間の一人が近づいてきた
奴はそんなのにも気にせずに涙を流す

「どこ見てるのよ　マコちゃん」

「はっ・・・？」

なんだろうか・・・幻覚でも見てるのだろうか・・・

俺の後ろにはユーリとミスティが立っていた

「って何よ　そのえぐいのは・・・マコちゃんがやったの？」

「え？えっ？ええっ？」

『何が起こった？』って顔してるわね

私はニヤニヤしながらあいつを見る

「はぁ・・・とりあえず説明するよ？いい？　私とミスティはセリエスさんがここに来たのを見て、マークさんを安全な場所に連れて行ってたのよ　なぜかマコちゃんがセリエスさんの相手をしてたからね」

（今殺されたのはセリエス・・・と）

「はぁ・・・あぁ！そういうことか！」

やっと勘違いに気づいたみたいね

「何　自己完結してるのよ・・・　で、そのあとマークさんに詳しい話を聞いて　私とミスティでゴートン家を潰してきた」

「えっ」

（もう終わってたの？つまらない）

「それで戻ってきたら　周りが血と肉で彩られてるじゃない・・・
どうやったらここまでできるのよ・・・」

「いやぁ・・・はははは・・・」

「それにしても　返り血でいっぱいじゃない・・・一旦マークさん
の家に行くわよ」

「はいはい・・・あーぁ・・・なんだかなぁ・・・」

その後彼の周りの話を説明
「デンキ」は火属性の魔法を応用すると出てくることが判明
そのことからマークさんと色々な議論を交わした彼らは
とある仮説を組み立てた
火属性は「エネルギー」を操る属性なんじゃないかと・・・
ってこれは私達が既に見つけているね

それでそのことについて詳しく調べようってことになり
彼らはマークさんの助手兼護衛としてマークさんの家に住むことに
なった
マークさんは彼の知識を認めて、さらに二人でゴートン家を潰した
セリエスという奴の家がゴートンだと分かったのはここ

ユーリ達の強さが分かった
銀髪の子がユーリって事が分かったのはここ
その日から彼らはマークという人の家に厄介になり
色々と研究することとなった
研究者がマークだと分かったのはここ

そして、次の日　彼らの中で魔術学園に行ってみようという話になった
学園の事知ったのはここ

なんとマークは魔術学園の教師でもあったらしい
へぇ・・・

しばらく休暇をとっていなかったらしい
そこで休暇を久々にとり、研究していたらデンキを発見したそうだ
だから復帰することを伝えるために一緒に学園に行くことになった

ちなみにマークには彼らの全てを話していた
マークなら大丈夫だと判断したからっぽい
盗み聞きしているんだけどね
そこで残り二人の名前も分かった
そして腕輪の詳しい効果も

マークは確かに受け入れたけどそれは他の人には話さない方がいいと言っていた
当たり前だね

それは理解していたらしく頷いていた
マークの考える表情はやっぱり学者なんだなと思った

「あ、学園が見えてきましたよ　キサラギさん」

そういうミスティアという少女の顔はとても晴れやかだ
ノルゥと同じ顔・・・差別やなんかで学校に行けてないんだろうなぁ

「よし、それじゃ学園まで誰が早く着けるか勝負しようか」

「この前のリベンジってことね！いいわよ！」

ユーリって奴は乗った
「えと・・・やりますけど・・・やっぱり罰ゲーム・・・あるんですか？」

少女は余程罰ゲームが気になるらしい

「ははははは・・・僕は遠慮したいな・・・君たちに勝てそうにないし」

マークはまともにやっても勝てないと踏んだのか
躊躇っている

「大丈夫ですよ　俺達は今　腕輪をつけていますから　一般人とそうたいして変わりません」

あの腕輪にはそういう効果もあるのね

「そうか・・・それなら僕も参加させてもらおうかな」

それなら勝てる可能性もあると踏んだのか
マークも参加する
というか空気を読んでる感じだ

「それじゃ・・・学園まで・・・よーい、スタート！」

さーて誰が一位になるのかな？
後ノルゥにも学校の事言ってみよう

3：ミスト「私の『仕事』が無いのは良いことだ」

ミストがキサラギ君たちの情報聞いちゃったよ・・・・・

1：そうだ、学園に行こう

［王都の外］
ミストサイド

あれからちょくちょく依頼を片付けてたらランクがEに上がってた
溜まりやすい雑事系や採集系の依頼を二人でざっと片付けていた
このまま雑事と採集依頼をやっててもランクは上がらないだろう
（あまり興味はないが）
上がっていたほうが色々と特典もある

「ところでミスト」

「なに？ノルゥ」

今は二人きりなので話は聞かれていない

「あなた一体何者なの？刀の知識といい化学や科学の知識といい
まるで異界の勇者みたいよ？」

鋭くなった、教育の賜物だろう

「異界から来たのは合ってるけど勇者じゃない
勇者は召喚だけだしコインを持ってる私は持ってないから勇者じゃ
ない
だけど歴史をよく覚えていたみたいだからご褒美に秘密を一つ教え

るよ」

「もう既に『異界から来た』『勇者ではない』という情報は貰っているけどね」

「私の場合は転生、そして前世は男だった」

「はい？」

「長く生き過ぎて性別という概念も薄れてしまったんだけどね」

「・・・・・発情はするの？」

「全く、女性にも男性にも」

「なら安心だよ」
その言葉には安心したが

「どうして？前世は男だったんだよ？」
否定する理由も確かにある

「それは貴方を『否定』する理由
『肯定』する理由は二つ
1：性別の概念が薄れてしまっていること
2：全く発情しそうにないこと
3：両親以外に初めて優しく接してくれてここまで一緒に居てくれたこと
よってミストを拒絶する理由はなくなりました
それに生まれで否定するのはいただけないしね」
暗に『私は貴方の教え子でもありますから』

とも言ってくれている

・・・・・嬉しい

「でも前世での名前くらい教えてくれないかな？
それと参考までにその姿のままな理由も」

「霧先　涼
霧先がファミリーネームで涼が名前
ちなみに涼は男女兼用の名前で容姿も中性的だった
それと男の姿に戻らないのは面倒臭いから」

「元に戻るのが面倒臭い？」

「一つだけ言うと私の本体はあなたの中」

「つまりその中で姿が変わったままだってこと？」

「そういうこと」

「でも口調が女口調だよ？」

「それは貴方の精神に引っ張られているから
これに抵抗するのもまた面倒臭い」

「アハハ・・・で始めは何を言おうとしたの？」

「えっと・・・このまま雑事や採集をしていても
ランクは上がらないでしょ？

だから学園にでも行ってランクを上げようかと」

「学園・・・学校かぁ・・・・・」

ノルゥは差別のせいで学校には行けなかったのだ
この憧れの表情は無理もない

「それに『この世界』の魔術を見るのも悪くないと思わない？」

「そうだね、今の魔術だと多人数戦で怪しまれるし
いいと思うよ」

「それじゃあまずこれで座標検索かけてっと
『ｘ座標１０９８３４５　ｙ座標４８４２３６７　ｚ座標３　転移』
」

学園の近くに転移を行なった

閑話：学園までかけっこ　先生と教師

［学園に一番近い森］
ノルゥサイド

「転移完了っと」
《フワッ》

「え・・・キャァァァァァァ」《ドスン！》

《スタッ》「いやあ、ごめんごめん
間違えて地面から３ｍの地点に転移先を指定しちゃった」

３ｍ、確か（「『ｘ座標１０９８３４５　ｙ座標４８４２３６７
ｚ座標「３」　転移』」）

・・・・・・・

「絶対わざとでしょ！」

「あり？バレた？」

ミストは時々こんな風に悪戯をする
だからいつも少し警戒しないといけない

悪戯された後警戒していた時にモンスターに奇襲されて
それに即座に反応出来た時
ミストの悪戯の意味がようやく分かったんだっけ

だから悪戯は「警戒を解いちゃダメ」という指摘の裏返しだと思ってる
楽しんでる節もあるだろうけど

こちらから悪戯仕掛けたときはことごとく躱された
んでようやく落とし穴が成功して（しめた！）と思った瞬間タライ落とし
ミストは魔法を使って空中でストップかけていた

あれは痛かった
そしてあの後に
「相手を仕留めたと思った瞬間に気が緩む、そういう時こそ気を緩ませてはいけない
そして相手のそういう所を突くのも大事」と言われた時は深いと思った

私に教え込むのと一緒に自分も楽しんでいるミストは
本当に教師の鑑だと思った

教師と言えば

（「世の中にいる知識や物事について教えようとする人には二種類いる
一つ目は『教師』
これは物事を教えるために全力を尽くしている人を指す
やり方を探すことにも全力を尽くしている人ね

二つ目は『先生』
これは先に生きているだけで教えるのには全く向かない人

頑張ってはいるけど方向を間違っている
何故ならやり方を探すのを怠っているから

わかりやすく言うと
授業中に生徒の一人が自分の知識を披露した場合
「いまは貴方の知識を披露する場ではありません」
と言うだけなのが『先生』で
「それは間違っています、正しくは〇〇です
そして今は授業であり知る為の場なのです
知識を披露するなら休み時間に
そして知りたければ同じく休み時間に」
と言うのが『教師』

つまり『教師』は授業以外の事も教える人の事を言うの
そして『教師』のプライドを傷つける事が一つある

それは「教えを乞わない事」
『自分には教えられないとタカをくくっている』
と考えさせて怒らせることになる

そして私は『教師』
「教えて欲しいこと」を遠慮することは私のプライドを傷つける
「知りたいこと」は全て言いなさい
私に教えられないことは無いのだから」
まぁ、普段「先生」と呼ぶときは「教師」という意味を込めている
んだけどね)

この言葉を聞いた後は授業に関係なくても
「知りたいこと」を聞くことは遠慮しなかった
それに「教えを乞うこと」遠慮しちゃいけないとも思った

その全てにミストは答えてくれた
他の人はどうか知らないけど私は勉強は楽しいと思ってるよ
《カーン！》（タライが落ちました）
「いたーい！」
「言ったでしょ？警戒は解いちゃダメって
で、何を考えていたの？」
「学園の教師ってどんな人かなって思って」
「そうね・・・『先生』か『教師』かは見てから判断しましょう」
「そうだね」
いまの間に私が考えていたことが分かったんだ
やっぱりミストはすごい

ミストサイド

「そうね・・・『先生』か『教師』かは見てから判断しましょう」
「そうだね、でもここから学園までどうやって行く？」
「そうだなぁ・・・学園まで競争しようか！」
私は時々子供っぽくなることもある
こういう事を言う時はまさにそれだ

確かあいつらもかけっこしてたね

「ルールは？」

ノルゥが乗った！

「ルールは
１：速く門に触れたほうが勝ち
２：土埃を上げてはいけない
３：合計で魔力の消費は３０００までにしないといけない
《ピーン》４：このコインが落ちたときがスタート」

「よーい」「「ドン！（チリーン）」」

私は駆けた
ルールでは『土埃を上げてはいけない』と言っただけだから
土の魔術で土を操って土埃が「上がらない」ようにしている

ノルゥは・・・
風の魔術を使って風圧が出ないようにしていると思ったけれど
火の魔術を使って土埃全ての運動エネルギーを吸収している

・・・やるね
魔術はその属性を持っていれば
その現象から魔力を作り出すことができる
「土埃から運動エネルギーを吸収する」事で
魔力を補充しているのだ
これは
３：合計で魔力は３０００までしか使ってはいけない
を緩和しようとしている

結局勝ったのはノルゥだった
成長した、本当に
遊びとはいえ教え子に負けたのは少し悔しい

閑話：学園までかけっこ　先生と教師（後書き）

霧先「魔術によって『現象』を売却し
替わりに魔力を得ることが可能だ
だがそれにも『手数料』として魔力を消費する上に
『中古価格』だから
１００％の回収は無理だがな
どう頑張っても５０％くらいが限度
だが現象を奪って売却すれば魔力の補充が可能だ」

ｘｘ「以上、霧先の魔力補充の解説でした

2：学園の前　軽い挨拶（前書き）

もみじさんがこんどはこちらから書いてみてくださいと言ってくれたので

2：学園の前　軽い挨拶

［学園の門］
ノルゥサイド

「一番乗り～！」

「少し悔しい・・・かな」

初めてミストに勝った！
普段は手加減したりこっちが少し有利になるように調整したり
私がギリギリ勝てるレベルで調整するから
真剣勝負で勝ったのは初めて

「私たちの勝負はあなたの勝ちだけど
先客が居たみたいね、シェラ」

「一番乗り～！」

ミストサイド

「一番～！」
あの子は確かミスティアとか言ってた
腕輪は三人とも装備していることを見ると
あの子が一番身体強化が得意みたいね

「二番、ミスティに負けた・・・」
あの子はユーリ
となると・・・

「畜生三番か
そう言えばいつも魔力でゴリ押ししていた節があったな」
今度は吸血鬼、確かキサラギと言ったよね

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・はぁ・・・みんな速すぎるよ
なんで皆そんなに速いの？
腕輪付けたら・・・と人が居るか」
あの学者はマーク
『電気』をこの世界で初めて発見した人
私たちも個人で見つけたけど発見はこの学者が早いでしょうね

ちなみに私はこいつらを知っているけどこいつらは私を知らない
なぜ知ってるかって？
まぁ盗み聞きなのだけれど

「こんにちは！」
ノルゥか
そう言えばあの子同年代の友達なんて今までいなかったしなぁ

「あう・・・えと、こんにちは！」

あの二人は似ている
境遇とか、元気いっぱいのところとか

《！？》

ああキサラギ君か、私を見ただけで驚いているけど
どうしたの？

「？、どうかしましたか？」
私は少し心配してキサラギに問いかける

「い、いやなんでも・・・」

動揺を取り繕いきれてないよ？
やっぱりこいつはチートでのゴリ押しだけだったか
でも本当にどうしたんだろ？

「行こう、シェラ」

「うん、またねミスチー！」

「またねーシェラ～！」

もうあだ名で呼び合う仲になったのか
いつの間に・・・

「マーク先生」

「なんだい？」

「『電気』の授業、お願いしますね？」

「！？　ああ分かった、楽しみに待っていてくれ」

フフフ、やっぱり驚いた顔は面白い
こちらが電気の事を知っているという情報を与えてしまったが
そのくらいは百も承知
さて、この情報からどのくらいのことが予測できるか
あいつらを試してみましょうかしらね

「ミストー！置いてくよー！」

そこには門を開けて入っていくノルゥの姿が

「あ、ちょっと待ってー！」
最後に名前の情報を与えてと
さぁ、本当に楽しみね

2：学園の前　軽い挨拶（後書き）

さて、向こうの反応は・・・・・・・

３：学園入学　二度目の挨拶

［学園の中］
ミストサイド

あの後キサラギ君がこっちを見てくる
（まぁあれだけやったんだから当然と言えば当然なんだけど
それより試験の類が一切なかったのが気になる・・・
というか腐っていること確定ね）

体育館と思われる場所に生徒が詰め込まれている
大体５００人くらい
そして入学式が始まったんだけど・・・

この間にも学園長の演説は続いている
教師代表のような人が　この学園の素晴らしさ・・・を語り
そしてそのような素晴らしさを語る人が長い時間をかけて話し、
ようやく学園長様が演説をしていた
こういう話って為になることが多いから
よく聞くようにしているんだけど

「よく遊びほどほどに勉強して、殺しあえ！
だが生き残れ　以上ッッ！」
こりゃ駄目だ

学園長様はかなりの豪傑な人で
なぁにこれぇ？演説でもスピーチでもない
こういうのって小説とかだけの話じゃないの？

・・・・・そういえばここ小説だったよね
初めてそのことを知ったときは鬱だったけど
今となってはそれを利用させてもらっている

そして学園長の演説が終わり、そのままクラスへと移ることになった
「私達のランクはＥだから１－Ｅね」

「学園って・・・」

「大丈夫、ここが腐っているだけだから」

「うん・・・」

ノルゥは幻滅してしまっている
ここを出るときはここの学園長はフルボッコ確定

「俺のクラスは・・・Ｅランクだから１－Ｅだろうな」
おおっこの声は

ガラッ

「や、こんにちは　また会ったね」
私はニコニコと音がするほどの『笑顔』
を浮かべながらキサラギ君を見た

キサラギ君はユーリに『助けて』と視線を送っているが
ユーリは全く気がついていない

おっと、顔を戻して
「授業始まるから席に付きましょうか」

「ああ」

さて、どんな授業がはじまるのやら

『先生』以下であることは既に確定だけど

4：事故紹介（じこしょうかい）

［学園　クラスＥ－１］
ミストサイド

・・・ちょっとやりすぎた？
キサラギ君壊れてるよ？

キサラギ　は　ユーリ　に　めをむけた　そらされた　・・・・・

［3分後］

シェラはミスティアという子と雑談中、楽しそう
ユーリって子はもう友達作ってる
キサラギ君は・・・私を意識の外に置こうとしている

やっぱりやりすぎたか

「・・・いやん　そんなに見つめられると惚れちゃうぞ！」

うん、完璧に壊れてる
やり過ぎた感はあるしフォローしておくか

「ごめんなさい俺がこんなことやっても
気持ち悪いだけですよねすみませんでした来世ではまともになりま

す」

それキャラ違う・・・

「もーあたいったらサイキョーね！パーフェクトフリーズしちゃうなんて！てへっ・・・・あ、ごめんなさい　マジで謝りますんで　そんな目で見ないで　興奮しちゃ・・・あ、ちょっまっ　そんな物投げないでっ？！　すみません！すみません！もうふざけませんから！」

この？（バカ）が・・・

と、何あれペンギン？足が木の棒みたいになっているけど・・・

思い出した、あれ≪著作権により規制中≫だ

少しの衝撃で爆発する奴

とか観察していると見覚えある顔が入ってきた

「担任のレイドだ　これから1年間お前達の面倒を見ることになっ・・・ッ！？・・・た　よろしくな」

レイドがキサラギ君見て引きつってる

そしてこっちに（どうしよう・・・？）って視線向けてきてる

しらんがな、でもその顔面白いからニコッって返しておく

これは推測だけどキサラギ君が時魔法で動きを止めたんだと思う

推測の域を出ないんだけど

「あ・・・すまない、ちょっと色々あってな・・・はははそれで・・・だ、とりあえず生徒の軽い自己紹介から始めろってお偉いさんに言われてるから自己紹介から始めようかまずはアンナからだな・・・」

自己紹介タイムが始まった

「おい、キサラギ　次はお前だぞ」

「マコちゃん！聞いてる？マコちゃん！」

「はっ・・・やばい・・・ちょっとトリップしてた・・・」

キサラギ君の自己紹介が始まる

「諸君、私は戦争が好きだ　諸君、私は戦争が好きだ　諸君、私は戦争が大好きだ　殲滅戦が好きだ　電撃戦が好きだ　打撃戦が好きだ　防衛戦が好きだ　包囲戦が好きだ　突破戦が好きだ　退却戦が好きだ　掃討戦が好きだ　撤退戦が好きだ　平原で　街道で　塹壕で　草原で　凍土で　砂漠で　海上で　空中で　泥中で　湿原でこの地上で行われるありとあらゆる戦争行動が大好きだ　戦列をならべた砲兵の一斉発射が轟音ととｍ・・・」

「はい、次　ギーシュ」

「ちょっとまてぇぇぇぇ！」

「なんだ？キサラギ」

「まだ自己紹介の途中でしょうがッッ！」

「授業の時間が限られてるのでな・・・それに今のは自己紹介なんかじゃない」

「むぅ・・・」

少佐なにやってんの・・・・・と

「どうしてこうなった！」

「キサラギうるさいぞ　そういうのは授業の合間にな」

本当に騒がしい事故紹介だ

あ、キサラギ君寝た（フリ）

次はユーリの自己紹介

「初めまして　ユーリと言います！魔法に関してはほとんど初心者なので授業を楽しみに思ってます！　あと、キ　サ　ラ　ギ　君は　私　の　嫁　で　す　以上です」

事故紹介となりました、ハイ

「次、シェラ」

「はい！」

次はノルゥの自己紹介

「私はシェラ、年は１３
ミストとは双子の姉妹ということになっています
魔法の属性は火と風を持っています
皆よろしくお願いします！」
元気な自己紹介

「次、ミスト」

「はい」

次は私の事故紹介（じこしょうかい）を始めますか

「私の名前はミスト、年齢は１３
シェラの双子の妹ということになっています
属性は土と水
後補足ですが
虐めやすそうな奴見つけて少し弄ったら・・・その、なんだ
壊れてしまったな
壊れたのはキサラギ君、少し虐めが過ぎてしまったようだ
明日には完全に元に戻っていると思いますので
今日の事は忘れてやってください」

クラスの皆からは畏怖の視線で見られた
この位は責任を持たないとね
ノルゥは「いつそこまで？・・・・」といった視線を向けてきてる
後ユーリ、そういう意味じゃないから

5：魔力制御の座学　それだけ

［学園　クラスＥ－１］
ミストサイド

ともかく魔法制御の座学が始まった

「――――という訳で　魔力を消し去るには　体中に循環している魔力を止めればそれで済む　だが難しいのは魔力を抑える方法だ　これは・・・水を含んだ布を絞るようなイメージだ　そうして無駄な魔力の消費を抑えるわけだな」

ふぅん、そのイメージも使えるんだ
私達（シェラ含め）は蛇口をひねる感じで抑えているけど

そして・・・

「先生！俺は魔力の制御を教えてもらいたくて
ここにきたわけじゃないんだ！魔術を教えてくれよ！」

こういう馬鹿は何処にでもいる
魔術だけ覚えたって暴発するだけ
それが分からないようじゃ冒険者として魔術師として生きていけない

そこらへんが分かっていない奴ね・・・ん？これは風の魔術？

「ヒュール君席に座ってくれ
すまないがここには魔力制御について知らない人もいるんでね

そういうことは授業が終わってから個人的に俺に聞きに来てくれ
君が教えてもいいくらいの技量を持っているのなら教えよう」
と口で言いながら

「（いいかい？魔術だけ覚えたってそれが暴発したらみっともない
そんな『マヌケ』になりたくなかったらきちんと授業を聞くこと
そしてこういう細かい魔術は魔力制御がないと使えない）」

という言葉をボソッと言っていた
風の魔術がヒュール君の周りにあるってことは
この言葉を届けているのだろう
私は耳だけ強化したからどうにか聞こえた

体の一部にだけ魔力を集中させるのだって
実は魔力制御を結構必要とする
押し込め過ぎたら必要な部分が覆えないし
逆に押し込めないと広がる

さらに多くの魔力を集中させるなら
加減を間違えると暴発することもあるし
多くの魔力を操るから難易度も上がる

話が逸れた
それにこういうの授業の邪魔だから軽く殺気を当てといた
露骨に睨んでおいたからどんなに殺気に疎くても気づく筈

これがとどめとなったのかその生徒は黙った

ノルゥサイド

わぁ～・・・学園だー・・・
私にそういうのは無縁だって思ってたけど学園に通えるようになったよ
まるで夢みたい・・・

お父さんとお母さんが死んじゃった時は自暴自棄になっちゃたけど
お兄ちゃんが「生きていればきっと良いことがあるよ」
って言ってくれなきゃここまで頑張れなかった

そう言えばお兄ちゃん今どうしているかなぁ
あの状況だし多分死んでいると思うけど・・・・・
って暗くなちゃダメ！生きていたって死んでいたって
私は今を生きる！

そしてミストの御陰で学園までこれた、だから精一杯授業を受ける
この人が『教師』だから尚更

ミスティとお友達になれた、だから精一杯一緒に遊ぶ
この子なら私の秘密を受け入れてくれるかも

ミスティとずっと友達で、ううん・・・親友になりたい
秘密を分かち合う親友に！
・・・だとするとミスティはどんな秘密を持っているのかな
今から楽しみ

5：魔力制御の座学　それだけ（後書き）

ｘｘ「ノルゥは純粋な子です・・・」

ミスト「時に残酷なくらいにね
でも残酷な結果をそうそう生まないようにしてきているのが私達」

ノルゥ「私は人が悲しむ顔を見たくないもん」

ミスト「貴方が悲しんでいる顔は私は見たくない
だから自分を大切にしなさい」

ノルゥ「わかった、でもミストって元々男だよね
まさか・・・」

ミスト「師として、親友として、家族として、よ」

ノルゥ「わかった」

6：魔法制御の実技

［学園　クラスＥ－１］
ミストサイド

あのあとは普通に授業が続き
時間となり授業は終わった
そして魔力制御の実技が始まった

魔術学園は４時間授業があり「座学→実技→座学→実技」
という風に１時間ずつ授業がある

ともかくその内の実技に入った
レイドが教師として教えているがもう一人教師が付いている
監視役って所だろう、いろいろな意味で

高ランクの授業ほど派手な失敗はないが
高ランクって事で天狗になって周りをよく見ずにに魔法を使って
大惨事にする奴は何処にでもいる

実技の授業は自分の魔力の上げ下げを繰り返して
自分だけのイメージを作りなるべく早く
魔力をできるだけ抑えれるようになること

イメージも制御もきちんと叩き込んであるノルゥも
無論私も問題なかった

イメージは湖に作ったダム
それを蛇口でチョロチョロと出すイメージ
ノルゥにも同じイメージを教えてる

私達のイメージはダムの開放と蛇口で出すイメージの二つがある
この方が色々とやりやすい
蛇口の方は一般的な魔術師レベルでダムの方は私達の全開
手加減しなくてはいけない時とかは蛇口
全力でやるときはダム開放

今回はダムを締め切って蛇口で出す
イメージ出来れば後は簡単
でも蛇口だけではつまらなからスイッチを付けている
蛇口もひとつだけではなくいろんな種類を作ってある
その種類を並べてある

『１００の蛇口』５つ『５００の蛇口』１つ『１０００の蛇口』４つ
『５０００の蛇口』１つ『１００００の蛇口』１つ
全部開けば２００００になる、全力はやっぱりダム開放だけど
今は１００の蛇口を締めたり緩めたりして遊んでいる
全て百分率のダイヤルがあるけどそれは使わずに締めたり緩めたり

監視役の教師がこちらを見て固まっている
そりゃこんだけ締めたり緩めたりすれば当然か

・・・キサラギ君が露骨にこちらを避けてる
少し悲しい

「暇だなぁ・・・」
テストをさっさと解いた後みたいな感覚だ

「お前は一体何なんだ」
レイドはそう問いかけてくるけど

「答えない」と言っておいた

ノルゥサイド

Fランクの授業は魔力を感知することから始まった
何も知らない人もいっぱいいるだろうし

さっきキルファ・ジェシカ・ミランダ
という人達が「私達と一緒に魔力制御をしないか」
って進めてくれたけど「もう出来てるよ」と言いながら
魔力を蛇口で出し締めすると「そうか・・」と言って立ち去ってしまった

それにしてもあの三人、所謂「三角関係」って奴だよね
ミランダとか言う人はよくわからない
意図的にわからなくしているような・・・？

まぁ悪い人じゃないみたいだしいいか
ユーリって女の子（ミスティのお姉さんだって教えてもらった）

はその三人と競っているみたいだけど
どんなイメージでやっているんだろう
斬れ味のある刃物みたいな雰囲気だけど
そんな感じのイメージかな？

ミスティは私と同時くらいに終わっている
初めから知ってたのかな？

ユーリが終わったみたいで手を振ってきた
私も振り返す、ミスティも振り返す

私は（こんな平和なときが長く続けばいいな）と思った

7：初級魔術・・・やりすぎた

［学園　クラスＥ－１］
ノルゥサイド

座学で「火よ　灯れ」「水よ　湧け」「風よ　起きろ」「土よ　固まれ」
という初期魔術を教えてもらい
実技で実際にやることとなった

私達は魔力を分けた時に属性も分けあったから
ノルゥ（わたし）は火と風で朱色
ミストは土と水で深緑
になっている
今現在はそれ以外の魔術や魔法は使えない

「風よ　起きろ」《ソワソワ・・・》とそよ風が吹く
・・・・物足りない

「風よ　火よ　舞え」そう言うと
火の玉が、そよ風が、周りで踊り始めた
範囲は限定してるから大丈夫だと思うけど
皆目を見開いている

やりすぎたかな？

ミストサイド

「水よ　湧け」簡単すぎる
そう言うと手のひらから少し水が湧いた
魔力もそこまで込めなかったから
大量に湧くわけでもない・・・・少し試してみようか

「水よ　吹け」《シューーーー》
今度はクジラの潮吹きみたいに水が飛び出た

、

「風よ　火よ　舞え」今度はノルゥが・・・・って何やってんの！？
そんなの見せたら・・・もう遅いか
折角だから遊んでみる

「水よ　飛び出よ」《ピューー！》
今度は強めの水鉄砲みたいに水が飛び出る
そして・・・

《ジュゥ・・・》ノルゥが出した火の玉にあたって鎮火した

「水よ　打て」今度は水の塊が次々と撃ち出る

《ジュゥ、ジュゥ、ジュゥ・・・》火の玉が鎮火される
ノルゥもこれに気づいたのか

「火よ　打て」とこちらに火を飛ばしてきた
「水よ　打て」と同じくらいの魔力量で応戦する

《ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ、ボゥ》

と火の玉が
《ピュ、ピュ、ピュ、ピュ、ピュ、ピュ、ピュ、ピュ》
と水の塊がそれぞれ打ち出されて

《ジュッ、ジュッ、ボッ、バシャ》
《ジュッ、ジュッ、ジュッ、》
《ボッ、バシャ、ジュッ》
さながら水と火の喧嘩のような撃ち合いが始まった

私は後で思う・・・・・・あれは正直やりすぎだったと

8：【暴食】ベルゼブブ・・・・・ってやりすぎ

［学園］
ミストサイド

「あああああああああああああああああああああああ
うぜえええええええええええええええええええええ」

キサラギが叫び声を上げた
その時私達は魔術の撃ち合いをやめたんだけど
止めたのはそんな理由じゃない

「俺は人間をやめるぞー！ジョ〇ー！」

そのあとあいつが腕輪外してその膨大な魔力を放出したからだ

「風よ　疾風に」
「火よ　烈火に」
「土よ　土塊に」「水よ　水竜に」
この詠唱は・・・

「踊り踊らせ踊踊れ」
「怒り怒らせ怒怒れ」
「回れ回らせ回回れ」「狂い狂わせ狂狂え」
二重声法まで使っているし
あれは４００年前の勇者が使った「【暴食】ベルゼブブ」
こんな所で使う気なの？馬鹿なの？辺り構わず壊すの？

後で請求書が来るの？悪目立ちするの？馬鹿なの？

「「「「喰らいつくせ――――」」」」

あぁあぁ前詠唱が完了しちゃたよ

「ッ！・・・クッ」

レイドは驚き落胆している

「――――『ベルゼブブ』」

これは箱の中にそれぞれの属性の大規模魔術詰め込んで

それを開放するような魔術

つまり制御なんてあったもんじゃない

風が回って竜巻となって

火が風に乗せられ火砕流となって

土が周りを抉り火砕流の中心に集められ

水が周りの水分を吸い取って土を泥にする

それにより

風圧で呼吸が難しくなる

空気圧の関係で窓ガラスが割れている・・・

酸素が急激に二酸化炭素に変換される

酸素不足で一酸化炭素が発生しかかっていたので

窓ガラスが割れたのは幸か不幸か

土が抉れるため周りに大きい土塊ができていく

ああ・・・地形が・・・

空気中の水分がその土塊に吸い込まれ泥にする
空気が乾いてきた

そして竜巻の中心からその土塊が周りに放出される
これはひどい

ノルゥが風魔術の応用で
二酸化炭素をさらに炭素と酸素に分解する魔法を
使っているから私たちは無事
火の粉はそもそも防御魔術で入ってきていない
土の魔術で地形が変わるのはどうしようもないけど
水分は私の魔術で保っている

『【暴食】ベルゼブブ』は魔力制御もあったもんじゃないので
簡単に割り込めるが
割り込んだ魔力も巻き込んで暴れるため
制御するのは物凄く難しい

「フハ、フハハ、フハハハハハハハ」
あいつはハイになってる
見ただけでわかる

ガリガリと引っ掻く
血が出ても気にせずに引っ掻く
笑みが濃くなっていくのがわかる
それでも気にせずに頭を引っ掻く
まるで薬物中毒者だ

『キィン！』と突然とある魔術が消えた
とある魔術とはもちろんベルゼブブの事

あんなアニメみたいな音が鳴るなんてね

でも『突然』魔術が消えたのが気になる

神様から特別な能力でも授かったのか？

観察対象に追加だね

9：その後、ノルゥは

［学園］
サイドノルゥ

私は後片付けの対応に追われていた

「お前達もこの被害の一旦を担っているのではないか？」

「私達が与えた被害ごとベルゼブブが薙ぎ払ったので
私達が与えた被害はもう関係なくなっています
請求書は彼らに渡してください」

「分かった」

ふぅ、一安心
ミスティから「うらぎりもの！」という視線が来ているけど
ここまでの被害お工面するお金はこっちにはないよ？
ミストも何処かに行っちゃたし

探しに出よう

［学園：人気の無いところ］
サイドノルゥ

（なんとなくミストを探してフラフラと来んだけど）
だれかがニヤニヤしながら考えに耽っている
気になって見ていると

（召喚魔術！）
召喚魔術の気配がした
そして私は直感で悟った
「あの魔法を消したのはあの人か・・・」

『便利屋』2開始：序章

［学園］
ノルゥサイド

「・・・なんなんだ」
誰かがそう呟いた

それもそうだ
文献にも載ってないような大規模の範囲殲滅魔術を放ったんだし
周りは荒れ果て
見るも無残な光景になると誰もが予想して
それは私も例外ではなかった・・・・・んだけど

それが甲高い音がすると同時に消え
周りには地面が削れたあとしか残っていない

あれを放ったミスティのお兄さん達も規格外だけど
消した人はもっと規格外
誰が消したんだろう

私はその消した人を探していた

その後の事は私でも簡単に想像出来た
主となって詠唱していたミスティのお兄さんを
みんなが恐れ怖気付いていた

だけどそれは間違い
『ベルゼブブ』なんて魔法を知っているミスティ達も十分危険
でもそのくらいで私はミスティを怖がったりしない
私の方がもっと危険だから

ミスティのお兄さんが連れられてゆく
ミストの話だと
王宮の人達も丁度こんな強い人を
戦争の為に欲しがっていたらしいし
これからあのお兄さんどうなるんだろう

［ミスト『便利屋』開始：王宮］
ミストサイド

彼は王宮に連れ込まれていた
（というかあの腕輪目立たない為に付けていたんじゃないの？
それをわざわざこんな事やって無化にするなんて何考えているの？）

只今絶賛盗み聞き中、ちなみに私は
音波変化皆無・光（不可視含む）素通し
天井に張り付き・魔力隠蔽
以上の状態で隠れています
これに気づくには文字通りの勘しかない

そして彼はジャラジャラとした鎖で縛られ
肉付きの良い騎士に守られている王都の王の前に連れてこられ
太った宰相に詰め寄られている

（絵に書いたような『腐った人たち』だね）

ユーリとミスティは隠蔽魔法でも使ったのか
誰にも気づかれてないため捕えられたのはは彼だけだ
元々詠唱を手伝ってもらっただけでベルゼブブの魔力は
全て彼が請け負っていたし
詠唱も彼が風魔法を使った事によって
風の音でかき消され彼らと私以外には届いていない

「名をつげろ！化け物め！」

化け物・・・ねぇ
貴方達の化け物の基準は知らないけど
私には貴方達が『人』であるように思えないんだけど

「俺の名前？んーと・・・イケ＝メンとでも呼んでくれればいいよ？」

（いけない、私が壊した影響まだ響いてたか・・・）

「・・・・・・ッ！」これまた絵に書いたようなご立腹

「ん・・・でお前らは
化け物をこんな鎖で封じれたとでも思ったの？」

そういって彼は立ち上がる
騎士たちは彼の鎖が千切れてるのを
確認したのと同時に一斉に王の周りに集まった

（その通り！だけど悪目立ちしすぎ、ますます腕輪の意味がない
それにあの騎士達の練度も低い）
立ち上がった後に鎖が切れている事を認識した後集まるなんて
5流だよ5流、そこらの一般兵以下なんじゃないか？
そして『立ち上がる』のを認識して集まるのがようやく二流
いつになったら一流の騎士を見れるのかな？

「でさ・・・お前らは俺をどうしたいの？」

「・・・・・・・・・・・・」

「あーら無言？俺を殺すことができないってのは
お前らの足りない頭でも理解できるでしょ？」

「ッ！無礼なるぞ！」

「おぉーテンプレ乙！そういうのってけっこう言うよね
とりあえず自己紹介してあげるよ俺はキサラギ、しがない吸血鬼さ」

本当にテンプレ祭り
（というか吸血鬼なんて情報与えちゃていいの？）

「吸血鬼！？・・・伝説のか」

「おっ　やっとしゃべってくれたね
自分で考えたことも言うことができない無能かと思ったよ
よろしくね？お・う・さ・ま」

「貴様ァ！」

王の隣にいた騎士が突っ込んできた
彼は「わけがわからないよ」って顔しているけど
これだけ煽ったら当然だよ当然

「おっと　危ない危ない　頭まで筋肉でできてんじゃないの？こいつ　いきなり襲いかかってきたんだけど」

彼は騎士の体を伸ばした爪でバラバラにした
『遅すぎるし俺の爪はこんな鎧くらい簡単に断ち切れるぜ？』
っていうアピールなんだろうけど
『国』煽ってどうするんだよ

「貴様が強いのは理解した・・・」

彼は少し考えたあと

「んー・・・なんか退屈だし　帰るね！じゃっ！」
そう言った彼は帰ることにしたようだ

「・・逃がすと思ってるのか？」

王がそう言うと宰相の隣にいた・・・王宮魔術師？
そいつが彼に手をかざした

「・・・俺に魔法が通じると思ってるのか？」

（今度メドローアぶち込もうかな？♪）

「そんなもんじゃない・・・ちょっとした召喚魔術さ」

召喚魔術・・・まぁ空間魔術の下位といったところ？
それを使えるのは流石王宮魔術師
（でも敵に情報教えるなんてやっぱり経験少ないね
流石『王宮』魔術師）

まぁともかく彼が逃げようとした所には
魔方陣があったわけだけど

「おわっとと・・・なんなんだ？」

そこにはノルゥにも引けを取らない美少女が召喚されていた

［学園の人気が無い場所］
イリアサイド

うーん・・・さすがにアレは連れてかれるわよね・・・
王都は優秀な下僕を求めてたし・・・
せっかく魔術を抑えてあげたのに王宮まで連れて行かれるのはね・・・
・
アイツは私の下僕（予定）よ！

でもまぁ放置してても問題なさそうね

アレを唱えても全然減ってなさそうなあの魔力なら
王宮じゃ扱いきれなさそうだし
捕えられなかったらZランクのやつらを呼び出すに決まってるわね
ギルドも王も腐敗してるからねぇ

便利なやつを自慢したいがために捕獲しようとして
捕獲するのも他人を使う・・・
しかも目的は自分の自尊心と金のため・・・

とりあえず召喚魔術の気配を感じたら私が行こうかな
アイツは私が飼うんだから・・・

っとそんなこと思ってたらさっそくね
それじゃ召喚されますかなー

その時「あの人か・・・」というつぶやき声には誰も気付かなかった

［呉宮（おうきゅう）］
ミストサイド

「初めましてー　如月誠さん　私の名前は渡辺伊里亜よ」
そんなことを美少女改めイリアは言っている
（うわっ、なんてＤＱＮネーム
この子の親ってどんな人なんだろう？）
私のはじめての感想はそれだった

「あそうっすか、とりあえず帰りたいんですけど出口はどっちですか？」

「出口ね・・・私の後ろの扉を出てまっすぐ行けば出られるわよ？」

「あ、ありがとうございますーちょっと困ってたんですよねー、それじゃー」

まるで友人同士の軽い会話
名前からしてこの人も地球出身のイレギュラーなのかな？
（それにしても何人いるのかな？イレギュラー）

彼がイリアの横を通り過ぎていこうとすると

「よく見たらイケメンじゃない・・・君が欲しくなってきちゃったなぁ・・・」
そんな事を彼の耳で囁いた

（愛の告白？いいえ、下僕宣言です）

「おい！イリア！早くアイツを捉えぬか！」

「いやですよー面倒臭い
そ・れ・に・・・キサラギ君が気にいっちゃった！あはっ！」
ちょっとこいつどうなってんの・・・・・

「うおおおおおおお！魔力強化あああああああ！」

「イリア！はやk・・・」

「うっざぁい・・・ちょっとしゃべれないくらいに痛めつけておこっと・・・　そのあとはゆうぅっっくりキサラギ君を追いましょ」

（ヤンデレか・・・対象外だな）
そう思いつつも追いかけていった

『便利屋』一時停止：交渉開始

［王宮外］
ミストサイド

「・・・気づくのおせえよ！」

（何に？）

「転移～　発見！私のペット！」

「うおおおおいっ！はえぇ！見つかるのはえぇ！」

そうしていきなりイリアが転移してきた
成程、転移すれば良かったってことか
あいつの魔力なら無駄だらけでも転移が出来るだろう

［なんか性格違うな・・・キサラギが気に入ったのか？］

「・・・あんたには関係ない」

誰？今の声
とりあえず他に人が居ることは察知しているみたい
神もしくは神に準ずるもの？
【存在感知】でも使えないと今の状態は察知できないはずだけど

［・・・まぁいいか、とりあえずキサラギ魔改造計画発動するから］

「えっちょっ、なに怖いこと言ってんの！？」
魔改造・・・何する気？
「だいじょうぶ～　私がずっとそばにいてあげるから・・・ね？」
そうイリアが言うが目が怖い
［・・・ほんっと性格違うな・・・とりあえず修行場に連れて行くから勝手にやっててくれ
プランはイリアに任せたし大丈夫だ］
あいつに任せるのが余計に恐ろしい
「何が大丈夫だよ！俺の意志はっ！？ってかユーリとミスティは！？」
「ん～なに？・・・彼女とかいるっていうの？キサｒ・・・
マコト君は私のものだからね？」
やっぱりヤンデレか
［時を止めた場所に修行させるから問題ない
ここに戻ってくるだけだ
・・・イリアユーリはキサラギのただの幼馴染だから心配すんな］
神に準ずる者が気を遣う相手なんてどんな精確なんだろ
「・・・あんたには聞いてない
それじゃあ・・・キサラギ君が「私がいなかったら死んじゃう！」っていうほどイチャイチャしてても問題ないわね」
「んっと・・・でもリョウちゃんとか俺の修行場に入ってきそうな

気がするんだけど・・・」
勘？だったら当たってる

「リョウちゃん・・・？誰だ？・・・・・・イレギュラーか
まぁ・・・できる限りのプロテクトはかけておくさ
例え上級神でも数週間は干渉できないだろうくらいにはな」
そのくらいは問題なく突破出来る
潜入した跡形なんて残さずに

「私を無視しないでよ～それとリョウちゃんって子？私もプロテクトかけておくから
サマーと一緒にやれば1か月は大丈夫ね、それまでイチャイチャしましょうねー」
一週間↓一ヶ月（三週間位）つまりイリアの方が力が上？
ただ継持するだけなら別だろうけど

「ま、とりあえずリョウちゃんってのは俺に任せとけ
そんじゃ・・・魔改造がんばれー」
そう言った途端にイリアとキサラギは転送された

そこには神に準ずる者しか残っていない
・・・顔見せくらいしとくか

サイド霧先　涼

「こんにちは」と言って姿を現し
「初めまして、霧先　涼だ」そう言って元の姿にした
場所は神に準ずる者の傍だ

元々この体はゲームの中のキャラみたいなもんだから
元の自分になるようにカスタマイズしたようなものだ
言っとくが初めからスカートなんざ履いてないから
女装男子なんてことにはなっていない
それに服ごとカスタマイズしたからな

「!?・・・・・【イレギュラー】か、俺になんの用だ」

「いや、魔改ｚ・・・修行する場面を見たくてね
もし良ければ修行相手になってもいいが？
勿論キサラギに正体は明かさんが」

１０：少年交渉中・・・

［王宮外］
サマーサイド

「いや、魔改ｚ・・・修行する場面を見たくてね
もし良ければ修行相手になってもいいが？
勿論キサラギに正体は明かさんが」

誰だこいつは？
いや、さっき名乗っていたな
霧先　涼と・・・

「修行相手・・・それをするメリットはお前には有るのか？」

「すること自体がメリットと言ってもわからんよな
具体的には
１：キサラギの実力が大体解る
２：キサラギの強化が図れる
３：イリアという奴の事も少し分かるかもしれない
といった所だな」

「では此方のメリットは？」
分かり切っているが一応聞いておく

「『１：キサラギの強化が図れる』これでは不十分か？なら
『２：出来るだけキサラギと敵対しない』とつけてやるが」

完璧、こちらから提示できる条件すらなくなってしまった
本当に何を企んでいるんだこいつは・・・

霧先サイド

「では此方のメリットは？」

分かり切ってる癖にな

「『1：キサラギの強化が図れる』これで不十分なら
『2：出来るだけキサラギと敵対しない』とつけてやるが」

そう言われたあちらは此方を警戒しながら考えている
『何を考えている？』という顔だったので

「別に何も考えちゃいないさ、強いて言うなら興味本位
でどうするよ、こちらとしてはさっき提示した条件は自分で飲むが」

「顔に出てたか、こちらから提示する条件は
1：俺から敵対またはキサラギに敵対を促す行動はしない
2：キサラギを絶対に殺さないこと
これだけだ」

「殺せと言われたって殺しはしないさ
何時でも呼んでくれ、あぁ一つ忘れていた
そちらの自己紹介がまだだったな、仮の名前でもいい」

「名乗るときはそちらから・・・とそちらはもう名乗っていたな
気づいているとは思うが神に準ずる者だ
あくまで『準ずる』ということを忘れずに
呼び名は・・・サマーとでも呼んでくれ」

とりあえず神に準ずる者の呼び名ゲット
いちいち『神に準ずる者』なんて呼んだら長ったらしいからな

「OK、じゃあいつでも呼んでくれ」

１０：少年交渉中・・・（後書き）

久々に霧先登場
ミストとしてではなく霧先として登場したのは久々です

１１：主人公の修行前　『時』の説明　イリアにも説明　（戦闘描写書き直し）

［王都外］
霧先サイド

あの後俺は自分の姿を変えている
武器は特殊空間に仕舞っておいた

「さてと見た目は
『性別「男」・年齢「１７」・容姿「中の上（標準）」』っと」
ゲームキャラの容姿設定みたいなものだ
別に言う必要は無いのだが言った方がイメージが固まり易い

「それにしても『時間』止まってるな」

厳密には『全ての出来事が起こらないようにしている』のだが
時が止まっていると言った方がイメージしやすいだろう

余談だが時を動かすのはすごく重い
道路に車が走っているのを想像するとわかりやすいだろう
それをそれ自体は創造主や神が『時』を操作しやすいように
アクセルやらブレーキを設置して利用しているだけ
さらに後ろから追突してスピードを上げることも出来るし
前から押して止めたり押し戻したりすることも可能だ
必要な力は
《キングクリムゾン＞戻る方に跳ぶ≫先に跳ぶ≫戻す＞止める
止める＞遅くする＞速くする≫元に戻す》だ
キンクリに力が要るのにはさらに説明が必要だろう

『道路を谷折りしてそこに車を走らせているからだ』

・・・すごく短く纏まった
だが車に追突して速めるより難しい事は分かっただろう
難易度だけなら他の序列はそのまま止めるのが一番難しい
これは止めるには進む力と逆方向の同じだけ力を
使うので調整が難しいからである

まぁ「時を操る能力」とかは
動画のスクロールバーを動かす
マウスみたいなものだからあまり関係ないが

何が言いたいかというと
現在は「誰かがブレーキかけて時を止めている」
ということだ、これは能力を使っていることを表す
「そういう能力」というのは大抵世界からの加護で出来ている
やってることは同じだが俺なら使用不可能に出来る
そして放っから俺には効かない

・・・話を戻そう
その止まった時の中でその設定をしていた

[体感時間一週間（七日）後]

「出番だぞ～って姿変わったな」

「・・・ハッ！」
七日間待ってました
半睡眠(ぼーっとした)状態に突入してました

「姿変えたのは特定されないため・・・かな？
（ムッ）結局意味なかったみたいだが」
少々過去を読みまして、なんて説明してくれる
俺もキサラギもホモじゃねえ！

「それは・・・すまん」

「いや、済む」
と言って霧先涼に戻る

「済むんだな、じゃ転送するぞ」
そう言った瞬間に飛ばされますた

［修行場］

霧先涼サイド

「サマーはあいつの愛しの子と紹介したようだが
俺もあいつもホモじゃねぇしむしろ嫌われているから勘違いすんな」
≪ビクッ！≫

まずはイリアに説明
勿論寝る寸前に窓割って入ったので
「誰だ！」≪ヒュッ　シュ　パシ≫
武器を取った臨戦態勢
≪サッサッ≫
「（想定はしていたけど）落ち着いて下さい、敵ではありません」
無論こうなる
「問答無用！」
イリアは左斬り下ろし放ちそこから薙ぎ払いを放つ
俺は斬り下ろし斜め下に躱(かわし)しなぎ払いは翔びながら避ける
そこから俺は刀から切り払いを放ちイリアは防御して対応、着地
着地してからはアッパーカットの要領で右から切り上げ
それを向こうは軽く避けるがそこからの斬り下ろしは受け流した
「ハッ！」着地した俺にイリアが右斬り下ろしを放つ
≪キィン！≫が、俺が居合の要領で放った右切り上げに
イリアの剣は弾き飛ばされる
≪ヒュルヒュルヒュル・・・カッ！≫戦闘中に片付けておいたガラス片の山に刺さる
ガラス片の山に刺さったはずなのに≪カッ！≫かよ
床に刺さったな・・・・・どんな切れ味だ
「何者？」

「昨日紹介された修行相手だ
まったくサマーめ、なんつぅ説明してくれる」

「まさか・・・」

「ああ、それはキサラギが俺をすごく警戒して
チラチラ見ていたからだろう
恋愛感情どころか親愛感情も友情もない
あの時は学園内に潜り込みやすいように少女の姿だったけど
ミストって覚えてるか？あれ俺だから
それっぽく振舞っているのは見た目がそうだからであって
趣味じゃない
抵抗無い位には慣れたが慣れただけで好きじゃない
ノルゥは好きだが、親愛として」

「・・・シスコン」

「少し傷付くがあくまで親愛の
延長線上だということをお忘れなく」

「・・・・・・」

「ともかく明日から参加するんでよろしく」
そう言いながら（元）窓に風よけの結界を張る

「わかった・・・」

「じゃ、俺は廊下で雑魚寝しとくんで」

「帰れ！！！」

「んじゃ帰る」

寝るとこどうしよ・・・

１１：主人公の修行前　『時』の説明　イリアにも説明　（戦闘描写書き直し）

キサラギ君はどう反応するやら
誤解されないようになるべく頑張ったけど
ちなみに今回は至高妖刀で戦いました

１２話：霧先流の修行開始！

［修行世界］
霧先サイド

とりあえず朝まで寝ずに待った
１０万年も寝ずにいた俺にはどうとでもなる
（さぁてと・・・とりあえず抜き打ちテストを開始しますか）

≪カシャーン！≫
なんかデジャブを感じるが気のせいでは無いだろう
確かイリアの時だったか

キサラギサイド

≪カシャーン！≫
！？窓ガラスがっ！
ここには侵入出来ないはず・・・きｒ

いや、いないんだ！キリサキリョウなんていないんだ！
ほらこいつは別人、見た目も違うし
矛盾はしてない、うんしてない
ともかくこの侵入者兼襲撃者をどうにかしないと・・・

≪ヒュッ≫≪シュン・・・≫
この刀どこかで・・・いや、見たことないんだ！
あいつが持っている刀はあいつが居ないから
見たことないんだ！・・・矛盾はしてない、うんしてない

とりあえず
「て、敵襲だ！であえーd」≪ビュン！≫「うぉあ！」
俺はギリギリ避けた
ノリがわからん奴だな～

「巫山戯てる場合じゃないのは分ってるだろう・・・（呆怒）」≪ビュ！≫
「わわっ！」

「はぁ、対奇襲抜き打ちテストはギリギリ不合格だな・・・
鍛錬クラスを１つ上げるか・・・」

なんか嫌な予感がする

「サマーに呼ばれて今日からお前の修行に参加だ
主に技を試す相手として
ストレスやらなんやらは俺にぶっぱなすといい
よろしく」

うぉう、以外にフレンドリーだよこいつ
今までビクビクしすぎてたな・・・って騙されないぞ！
以前俺が使った扇動術の気配がするぞ！

「今日はとりあえず対奇襲反応の抜き打ちテスト
イリアにも既に試して合格している」

あいつも合格か・・・って勝手に試されているし
「じゃ訓練場に行きますか
今日はお前の実力を見る、出し惜しむと死ぬぞ」
（やっぱりかー！！）
［同時刻］
霧先サイド
「て、敵襲だー！であえーd」≪ビュン！≫「うぉあ！」
剣先が怒りと呆れで少しぶれたのは仕方ないと思う
「巫山戯てる場合じゃないのは分ってるだろう？（呆怒）」≪ビュ！≫
「わわっ」
「はぁ、対奇襲抜き打ちテストはギリギリ不合格だな・・・
鍛錬クラスを１つ上げるか・・・」
ちなみに１クラス＝５Ｌｖだ
「サマーに呼ばれて今日からお前の修行に参加だ
主に技を試す相手として
ストレスやらなんやらは俺にぶっぱなすといい
よろしく」
とりあえず今日から修行の手合わせ相手になる事を伝える
「じゃ訓練場に行きますか

今日はお前の実力を見る、出し惜しむと死ぬぞ」
訓練で出し惜しみしたら実践でも出し惜しみするだろうこいつは
だから訓練で出し惜しみなんてさせない
情報戦はそのあとで教える

１２話：霧先流の修行開始！（後書き）

ｘｘ「扇動術？それはキサラギの気のせいだ」

主人公修行一日目

［修行世界］
霧先サイド

ともかく
「今日からこの俺、霧先涼が修行の相手を務める
今日は俺がどのくらいの力加減でやればいか計る為のものだ
協力願いたい」

キサラギはあからさまに嫌そうな顔をする
そんな嫌な顔されても辞めるわけにはいかない
下手したら一発で消し飛ばしかねないからだ・・・魂ごと

・・・嫌そうな顔しながら既に
キサラギの後方
4キロくらいの場所に高エネルギー高魔力反応
それも大量に・・・やるね
ふざけた罰として1ランク上げていたが
もう2レベルくらい上げても問題なさそうだ

「試合開始」

「先手必勝！」
正解・・・不意打ちならばだが
そうでなければあの光で視界が遮られるだけ

（一つ少なめに見て４０００以上
そしてそれが目算２５０以上・・・
まともに食らったらまず無事じゃ済まないな）
現在スペックはそれほど上げていない

「弾幕はパワーだぜ！」
キサラギのその一言で俺のスイッチが一つ入った

（全部直線弾な上に
少しこちらの位置に依存しているがランダム弾
避けるのは容易だな）東方で身に付けた回避術である
３Ｄ版もやったから問題ない
弾速は桁違いだが軌道予測は容易

そこでキサラギは目を瞑って
何かに集中しているのが目に入った
（そういうのは移動してからか移動しながらにしないと
相手側にこちらの状態がまるわかりだよ？
指摘箇所一つだな）

今度は槍の形をした高魔力魔術を３００個ほど生成し
こちらへ飛ばしてきた
（チョン避けチョン避けっと）
槍一つ分ずつ横へ避けながらキサラギの様子を見る

（ん、地形が変わった？
明らかにあちらが上になるように調整されてる）
≪ドドドドドドドドドドドドドドドド≫
（目算直径５００ｍの岩が転がってきた・・・
って明らかな殺意だな、いやこの位じゃ死なないっていう

信頼の裏返しだと嬉しいんだが・・・うん？分身）

これはあいつの魂の一部が入っているな
（１０１匹ネズミ・・・転移した
探すのめんどくさいが一番あいつの魂が濃い奴探せばいいか）
これも指摘に一つ追加
それにしてもあいつ魂操れるようになったのか
（吸血鬼ならぬ吸魂鬼ってか？っと冗談は置いといて
・・・見つけた）
俺も転移出来るので飛ぶことにする
上から近づいて麻酔銃エンド
体が小さくなってるからすぐ体に回る
もちろんただの麻酔銃ではなく
魔術・霊術・妖術・神術をふんだんに使った特別性
もちろんキサラギは眠った・・・意識落ちてもネズミのままか
とりあえずキサラギを元に戻して起きるまで待つか

きちんと時限式で効果が切れるようにしているぞ？
ついでに時間後起こす効果もある

イジってる×　イジメてる○

［修行世界］
霧先サイド

「ところで」「なんだ？」

「俺どうやって気絶させられたんだ？」

「順番に説明するぞ
０：キサラギが１００匹のネズミに分かれる
１：俺がその中で一番キサラギの部分が濃いネズミを探す
２：そのネズミの後ろ斜め上に転移
３：俺お手製麻酔弾を打ち込む
以上だ」

「吸魂鬼を眠らせる麻酔弾って・・・」
「俺お手製だからな」

「次、今回の戦いの指摘だが予想以上で予想以下だな」

「どういうことだ？
そんな『鯨より大きくて蟻より小さい生き物はなーんだ』
みたいな矛盾は」

「戦術面で予想以下、力の面で予想以上ってことだ
その証拠に今回俺が使った魔法は身体強化と転移くらいだぞ？
せめてあんなお粗末な弾幕ではなく

マスパみたいな極大魔導砲でも打てば
俺に防御魔法くらいは使わせられたのにな」
威力にもよるが大抵は
転移に使う魔力＞防御に使う魔力だ

「それに短時間で２００ｍ動いた時点で少なくとも
それ相当の移動が可能だってことは頭に置いておくべきだった
そして何かに集中する時は移動しながらか移動したあと
でないと相手に集中していることがバレる
お前とまともに戦う相手は５００ｍの岩程度じゃどうにもならん
さらに無駄弾が多過ぎだ
行動を制限するなら最初広範囲に散蒔(ばらまいた)いた後
徐々に範囲を狭めるべきだ
後放射状に広げるのは間違っていないが
中心点を増やすべきだ、具体的には１０個位に
さらに言うと力押しだけでなんでもかんでもできると
思ってんだろお前力の使い方が大雑把だ
さっきの魔力砲だって６０００～４０００位の幅だったぞ」

「・・・・・」

「では魔術の詳しい授業に・・・と行きたい所だが
８割方聞いてないだろ」

≪ギクッ！≫

「・・・後で説教だな
ではそれぞれの属性の説明に入る
質問タイムまで口挟んだら説教を倍にするぞ」

一般的な火属性＝あらゆる力全てを操る魔法
一般的な風属性＝あらゆる気体を操る魔法
一般的な水属性＝あらゆる液体を操る魔法
一般的な土属性＝あらゆる固体を操る魔法

さらに一般的には基本属性が４つあると言われているが
実は２つしかない
その内約は

火＝エネルギー
土・水・風＝動かす物体の自由度
の二つだといことも教えた
例えば半液体半固体（溶岩とか）は水魔法でも土魔法でも動かせるし
凍った水は土魔法
溶けた水は水魔法
水蒸気は風魔法
でしか動かせない

「そしてこの世界は重力に似た変な力が働いている
大方何処かの神がこの世界に付けたんだと思うが
その不可思議な力による下に動く速度は一定だ
さらに別の力で液体が沸騰しないようになっている
よって気圧は風魔法でないと変化がない
重力はこの世界に存在しないが
空間魔法で重力に近い力を発生させることは出来る」

「・・・・・」

「おい、人の講義を無視とは良い度胸だな」

≪ビクッ！・・・・ｓ≫転移か、逃がす訳ないだろう？

「ふふふふふ・・・吸血鬼固有の転移には追いつけまグフッ！」

キサラギは顔を上げ

「ゲェッ！孔明！」

「誰が孔明だ、転移先くらい察知できる

そしていくら吸血鬼特有の転移でも

無駄な台詞（セリフ）を吐いているとそれ生かしきれないぞ

大体『ふふふふ』の当たりで追いついた

いくつめの『ふ』かは自分で数えろ」

そう言うとキサラギは少し考え・・・

（反省しているのか？）と思った矢先に

「霧のようにとらえどころのないやつだな！ミストだけに！」

≪ドヤァ・・・≫

「・・・・・・・・・」≪じとー≫

（くだらねぇ、ギャグ言うならもっとうまくやれよ）

ん？キサラギの口が何らかの神力で閉ざされているな

心覗いてみるか

（あ・・・無言はやめて・・・そのジト目もやめて・・・心が痛い・・・）

俺は虐めるのが好きだからな

（ちょっ・・・痛い！そんな目しないで！めっちゃ心が痛いの！

良心の呵責ってやつがきてるの！俺にも良心はあるの！）
なら尚更だ、もう少し考えて喋れ

（あぁ・・・やめて・・・そのジト目をやめて・・・ってか何でか
知らないけどしゃべれないんですけど・・・）
恐らくサマーかあの時こちらを見ていた、奴の仕業だろう

（やめて！って叫びたいのに叫べないんですけど・・・）
言われてもやめないけどな

（あ・・・サマーがこっち見て笑ってやがる・・・
貴様かァ！貴様がやったのか！）
見えないのにどうやって・・・視線か
とりあえず【存在探知】やってサマーの近くに
にナイフ（神にも刺さるよ！）を出現させ
時速４０ｋｍくらいでサマーに追尾させる

（あ、やべぇ・・・ずっと攻撃（じとめ）してくる・・・
ミストってふざけるやつとか嫌いなのかな・・・？）
俺は―ふざけてはいけない場面（シリアスシーン）で巫山戯る奴が嫌なんだ
打ち砕く為にやるなら兎も角中途半端なそれだと逆に悪化するからな

（俺はふざけることを生き甲斐にしてるんだけど・・・
だったら相性悪いな・・・）

ここで心を覗くのをやめ

「生き甲斐にしてるならもっと巧（うまく）くやれ
・・・よし、修行を始めよう」

［1時間後］

今は完全に気配を絶った俺の奇襲を避ける訓練を行なっている
第六感を鍛えてるというわけだ
俺はナイフ（キサラギにも傷を付けられるよ！）を持ち
軽く傷を付ける程度の攻撃を行なっている

（現在の的中率は3割と言ったところか
確立そのままだな、もう少し続けるか
7日以内には5割程度にはなってもらわないと）

ちなみにやっている理由はＲＰＧのレベル上げと同じである
ただ規格外ばかりが集まる世界もあるからな・・・
と考えながらも攻撃は続けている

（現在約３１％・・・ノルマはなんとかなるか
イリアの視線を感じるな・・・一緒に修行に参加でもさせるか
一緒に居させた方が面白そうだし
矢文でも飛ばすか・・・４次元空間移動式の）《ビュッ！》

［3時間後］

「今から実践訓練を開始する・・・こらそこ、嫌そうな顔するな
きちんと手加減するから
具体的に言うと魔法と体術しか使用しない」

「つまりそれ以外も使えるの？」

「勿論だ」

キサラギの顔が少し青ざめている

・・・大丈夫だろうか

「もう一つ安心してくれ

さらにその状態からも手加減するから」

さっきよりは青ざめたのがましになった

［ざっと1分］

「左手に氷塊、右手に炎・・・」両方熱量魔法である

こういうのはイメージにも左右されるらしく

火の方は赤色、氷の方は青色になっている

（かき混ぜて・・・と）

そしてそれがかき混ぜられ入り乱れ

もはや紫色になっている

（とりあえずメ□ーアとは違うというヒントは

軽く与えているが・・・些細すぎるな、気づくかこれ？）

今やっているのは『メド□ーア』ではない

いうなれば『メヒャド』だ

それでも威力は十分

熱膨張と冷縮小が蛍光灯の点滅（＋・０・－の繰り返し）

のように繰り返され着弾した周囲のあらゆる障壁が無意味になっている

注意：・０・の部分が顔文字に見えた貴方は
顔文字に毒されているでしょう

『メヒャド』はＭＵＧＥＮで言うと
通常即死級ーダメージ（＋の値と同じ絶対値）→５ダメージ→通常即死級ダメージ
の繰り返しである毒（毒即死）と通常即死を組み込んだ即死だ
ＭＵＧＥＮの毒（毒即死）と呼ばれるのは
『僅かなダメージを短時間に物凄い勢いで叩き込み即死させる』
という単純なものだ
数Ｆに一度とかを叩き込む

これは～ダメージ以上は無効化する
という能力を持っている奴にダメージを与える為に作られた即死である

他にはメヒャドの説明でも出てきた

通常即死：普通なら死ぬダメージを叩き込む
（ＨＰが異常に高いキャラや
防御力が異常に高いキャラは即死しない
ちなみにキサラギもこれでは死なない）
の他に

オーバーフロー即死：威力∞のダメージを叩き込む

即死投げ：掴んだ相手のステータスを引き込み即死させる
『要は掴んだ相手そのものに干渉して即死させる
血液の流れ止めるとか逆流させるとか心臓潰すとか』

落下即死：落下した時のダメージを死ぬレベルまで倍増させる
『要は相手に働く重力を倍増させて即死させる』

即死当身：掴めない相手を無理矢理掴んで
ターゲット化し即死投げへ持ち込む
このターゲット化はどこにいても持続する（永続化も可能）

直死：こちらから相手のフラグに干渉し強制的に勝利にする
『要は相手の存在そのものに干渉し
「死亡」の状態に書き換える事により
強制的に死亡させる、蘇生で抵抗可能』

【永続ターゲット】
ターゲット化を永続化するバグのこと

【死の宣告】
規格外クラス以上にもなると
ターゲット化した相手を好き勝手出来る
それを用いて殺す技や魔法などの事を言う

【強制死の宣告】
死の宣告を相手が出来る状態で
相手に強制的に死の宣告をさせ
その後自分を蘇生
そうすることで一時的にターゲットが外れるので

死の宣告後に出来た隙を突いて即死させる事が可能

【変数リセット・変数弄り】
「ＨＰを常に１００に保ちつづける」
という能力を持つキャラがいたとする
その能力を
「ＨＰを常に０に保ちつづける」
にして自滅させたりする事の出来る技や魔法などの事
大体は
「常にＨＰを１０００ずつ回復させる」を
「常にＨＰを０ずつ回復させる」に変える事になる

・・・話が盛大にずれまくった
今回の『メヒャド』はこの内
「通常即死」と「毒即死」の混合だ

（流石に今メド□ーアはやり過ぎだろうと思ったからだ
検証したがあれ魂ごと消滅させてるもん）

一応自重はしている

イジってる×　イジメてる○（後書き）

ＭＵＧＥＮ凶悪キャラｗｉｋｉ引用

メド□ーアはダ○の大冒険引用

始まりは突然に（前書き）

1色々おかしかったので修正しました
2期間が短すぎたためさらに修正しました
3さらに色々修正しました

始まりは突然に

［回想］
霧先サイド

キサラギの修行（修行世界で7ヶ月）
を終えた後色々ごたごたがあって帰ったのは夜だった

ノルゥに『霧先　涼』の姿を見せて説明
ノルゥはちょっとびっくりしながら
「な、ナルホドナ～」と言って納得してくれた
そのあと姿を『ミスト』に戻し
さらにキサラギに稽古をつけた事をノルゥに報告して
「（精神的に）疲れたから寝る」と言って寝て起きたら

［『？？』（まだ認められない）］

「・・・・・・ここどこだ？見覚えあるが・・・」
（この機械は間違いなく狭間の『意識転送機（仮）』だ
ここで考えられるのは
『ミスト』という器が死んだということだ
それならもう一度器を作って意識を転送すればいい
だがしかし先程の世界に座標をセットできない
これは先程の世界が「消失した」事を表す、クソ・・・」

何度この考えを巡らせたっけ
何度も同じ結論にたどり着く
自分で調べても見たがやはりあの世界は存在しなかった

〈ならば転送した世界の並行世界へ行けばいい〉？
馬鹿言うな
あの世界はまだ小さくて
並行世界なんてそう多く存在しなかった上に
その並行世界も破壊しつくされている
さらに『霧先　涼』という意識は
『狭間』の中で一つしか存在できないんだぞ
〈俺が意識を『ミスト』に転送した後
『ミスト』という器が死ななかった並行世界〉
の「俺が意識を」の時点でもう存在しないんだ
それにそこにいるノルゥも『ミスト』とすごしたノルゥではない
もういいかげん認めるよ・・・

「どうしたんだ？」

［『狭間』（霧先が認めました）］
狭間サイド

「・・・・「消失した」事・・・クソ・・・・」

「どうしたんだ？

ここにいるってことはお前の器が死んだということになるが
それなら別にもう一度創り直せば・・・！？」
そう言いながら私も調べたら
霧先が言った世界が「平行世界ごと消失していた」

狭間は急いで〈「根元」名簿〉を開く
今まで「平行世界ごと全部消える」
なんて事態はなかったからだ
霧先が行った世界の部分の８ページが空白になっていた
「嘘だろう・・・今まで
『「根元」そのものが消失した』事なんぞ今までなかったぞ・・・」

霧先サイド

「嘘だろう・・・今まで
『「根元」そのものが消失した』事なんぞ今までなかったぞ・・・」

「なんだと！ちょっと見せてみろ！」
それを見ると［半分の吸血鬼は何を願うのか］の世界に該当する
８ページ全てが空白だった
恐らく
『キサラギ　ユーリ　サマー　結局名前がわからなかったあいつ
ノルゥ　レイド　イリア』は入っているはずだ

「クソ！」
これで『ノルゥと同じ「根元」を持った存在と出会う』
という望みも無くなったということだろう

「すまんが頼み事があるんだ」

「なんだ？・・・今の俺はそういう気分じゃ無いことは
分かっているだろう？」

「今回の事件の犯人を消して欲しい」

「お前のその名簿から探して消せば良いんじゃないか？」

「無理だ、あいつは別の『狭間』から来た存在でな
この〈「根元」名簿〉には載っていないんだ
さらにどういうことかは知らんが今回の事件を起こす
程度の実力はあるみたいだから気配で探せばいいんだが・・・」

「だが？」

「この広さを一人でどうやって探すと言うんだ」

「・・・確かにな」

「相手も一応、存在隠蔽位は出来るみたいでね
《顕現》使えても見ないと見破れない程度には隠せるみたいなんだ
だから人手が一人でも必要でね
一応『学園世界』の連中にも頼んではいるんだが
《顕現》を使える奴自体少ない上に
生半可な《顕現》では返り討ちに遭うみたいで
どうやらあちらには《顕現》を破ることが出来るらしい
お前の『完化』だったら一瞬で倒せるだろうが」

「フフフ・・・『完化』であれば
一瞬で奴の所までたどり着いて殺せるだろうが

そんなもの生易しい・・・恐怖の底に沈めた後
何もない場所に放り込んでじっくりじっくりと精神を壊してやろうか・・・」

「どう見ても三流悪役だな霧先
テンションが変な方向に逝ってるぞ」

「悪？正義？そんなものとうの昔にこだわることをやめているよ
今からやるのは的（てき）の復習だ
『俺に逆らってはいけない』と言うな
それに変なテンションなのはいつものことだろう？
だが三流は勘弁してくれよ、まぁそんな感じのテンションだったがそれにな、その位に俺は怒っているんだ」

「そうだな、で霧先はどうするよ」
「的（てき）を探しつつ世界を放浪かな？
次はどこへ行こうか・・・ところで」

「なんだ？」

「お前は世界のいくつか位消えても問題ないんじゃなかったか？」

「流石に平行世界ごと世界が消失したらいくら私でも困る
一応〈管理者〉なんでな」

「成程、じゃぁそいつはきちんと探しているんだろう？」

「無論、ボソリ（わたしもあいつをころされているしな）」

「向こうの六日前の居場所はわかるか？」

「調べるにも時間がかかる
私も全てを把握している訳ではない上に
世界そのものだって中に住んでいる者を全て把握している事は
稀なんだ
大体は儀式完了の少し前位にしか見つからない」

「儀式？」

「お前や学園世界の連中じゃないんだから
軽く世界をぶち壊すなんて出来るわけないじゃないか
儀式には相当時間がかかる
平行世界ごと吹っ飛ばすんだからな
壊すための力を溜め込んでそれを解放し破壊する
といった形みたいだ」

「それをやる奴の目的は解るか？」

「わからん、だが破壊された時に欠けた筈の
『狭間』の破片が無い
奴が回収した可能性が高いだろう
何に使うかは解らないが」

「壊れた平行世界も全てか？」

「あぁ、全て無くなっている
本当に何に使うんだろうか」

「居場所は解るか？」

「昨日ようやく見つかったよ
ここだ」

それはファンタジー世界の一つだった

「これでくだらない目的だったら
さっき言ったやつ全部実行してやる」

そう言って霧先は次の世界へ行った

「その慢心、裏目に出なければ良いがな」
ただ一つ、ポツっと呟く狭間がそこに居た

始まりは突然に（後書き）

狭間「「根元」とは『狭間』での「魂」みたいなもの
「魂」は『その世界での存在の証明』であり
『その世界での存在を許可された証』でもある
「根元」はそれの『狭間』版ってわけだ
私ですら「根元」はあるぞ
ちなみに名簿を弄っても本人には何も起こらない
戸籍書みたいなものだからだ
ただ本人の現在の状態が書かれている
何処にいるとかどんな状態かとか」

ｘｘ「つまり『「根元」そのものが完全に消失する』ということは
正真正銘消えてなくなったということです
・・・本当に消えていればですが」

狭間「そして『狭間』時間とは世界時間の『狭間』版みたいなもんだ
地球の一日とほとんど変わらない
そして『狭間』より強くなった状態を私は《顕現》と呼んでいる
ただそれだけだが敵の顕現破りは一体どうやったのか・・・」

霧先「そしていきなりの事が多すぎてグダングダン
伏線すらまともに張れやしてねぇ」

ｘｘ「文才が足らなかっただけのことだよ」

狭間「お前がそういうのならそうなのだろう」

1：あるファンタジーの世界の始まり（前書き）

結局クロスオーバーは取り付けられませんでした
二次創作の舞台もまだ早いと思い
オリジナルになりました
まだ入れる予知のある作品はいっぱいありますけどね

そして残酷描写注意

1：あるファンタジーの世界の始まり

［あるファンタジーの世界：森の中］

霧先サイド

「色々と面倒くさいよな、高次元体って」
俺はそう呟いた

下位次元に乗り込むときは
仮の体（ゲームアバターみたいなの）
が必要だし
なにより存在そのものの力以外のものが制限される

「それよりここどこだ？
何処にでもある森だから場所の特定もできないし
木の生え方やその割合も何処にでもある森だから
それもヒントにならん
やっぱランダムに飛ぶべきじゃなかったか・・・」

ちなみに今呟いているのは日本語で誰かに聞かれたって判りゃしない
ちなみにこの世界の大昔に
日本語っぽい文字や言葉も存在しているというわけでもないので
ただワケワカラン事言っている人にしか見えない

翻訳魔法などは存在していた記憶もあるが
その魔法の効果は
「その言葉で伝えようとした事が解る」なので
誰かに伝えようとしているわけでもない呟きは翻訳されない

ちなみに日本語で呟いているのは自分が自分である証拠の一つ
要は軽いホームシックってやつだ

「とりあえず轍(わだち)とか川でも探すか」

轍とは馬車についてる車輪の跡の事
それが見つかれば町の方向がわかる
ちなみに良くファンタジーでこれを見つけて
(どっちが町の方向だろう)
と迷う奴がいるが、近いか遠いかは兎も角実はどちらも町である
何故なら馬車は町から出て町へ行くのだから

と、考えながら歩いていると早速轍を発見
(蹄(ひずめ)の方向から見て向かっているのは西か
少しぬかるんだ場所で良かった)

行くあてもないので西へ向かうとする

[轍を追っていった所・テンプレな光景]
???サイド

私はある村のたった一人の村人
私に優しく接してくれた貴族の青年に惚れ
魔法使いになれば貴族の方に近づけるという事を知ってから
ひたすら魔法の訓練に明け暮れていた
幸い魔力もあったようで初級魔術はすぐに使えた

友達のノァも私と一緒に居たいと一緒に魔法の訓練をしていた
あの子の魔力は凄く多くてびっくりしたけど・・・
魔法学園へ行く道の途中の馬車で2人近い盗賊に襲われています
盗賊の数が多すぎて護衛の人も馬も疲労しているし
追いつかれるのは時間の問題

馬車に乗るのは貴族が多く
その中の荷物を狙って盗賊が来るのは日常茶飯事
私達は平民なのでそんな物を持ってないけど
馬車自体も高く売れる、そして奴隷も・・・

盗賊に追いつかれ、囲まれた

（このまま私は奴隷として売られて・・・
強制労働？愛玩奴隷として犯される？）
恐らく2つ目だろう
奴隷になった後の悲惨さを思うと重い気持ちになる

「おい！こいつら荷物積んでないぞ！」
「大丈夫だろ？こいつら売れば問題ねぇ」
「お？上玉の嬢ちゃんがいるじゃねぇか」
「売る前に味見するか？」
「そんなことしたら値段下がらね？」
「大丈夫だろ？バレなきゃ問題ねぇ」
「じゃぁ俺が先だ」
「ダメだろ？一番最初に見つけたの俺じゃねぇか」
「じゃ俺二番目な」「あ！ずりぃ」

その前にこの盗賊たちに犯されてしまうようだ・・・

「くっ！これじゃこの子を逃すこともままならない・・・」
「せめてこの光景を誰かが見ていてくれたら
この盗賊たちを討伐に動くだろう
せめてその時のために数を減らさないとな」
「おい！諦めるつもりか！」
「だがこの数はどうしようもないだろう！」

護衛の人達も既に諦めかけている

「これから私達どうなるのかな？」
（誰でもいい・・・助けて・・・！」
そう心で叫んで涙を落とした瞬間

黒い閃光が走ったと思うと
私達を囲んでいた盗賊達が

胸から、首から、頭から、血を吹き倒れ
足が、腕が、首が、右半分が、左半分が、上半身が、下半身が、
吹き飛び血溜まりの中に沈んでいた

霧先サイド

「馬車が盗賊に襲われているとかどんなテンプレートだよ
今まで俺の行動以外は全部テンプレだぞ」
森に転移したこと然り、轍を見つけてその方向へ向かったこと然り
馬車が襲われているところを発見したこと然り

（この分じゃ別途で勇者召喚とかやってそうだなぁ・・・）
狭間からパクったノーパソで調べたら本当にやってた
今さっき成功したらしい
そして召喚の理由が魔王退治・・・
（ここを〈異世界ファンタジーテンプレート世界〉と命名してやろう
どうやらそれがごった煮になっているらしいからな）
ちなみに召喚された勇者はきちんと儀式場に出てきたそうだ
一般的な情報では

そうこうしているう内に馬車が盗賊たちに囲まれた

盗賊たちは２３人位、その中の数人が喋る
「おい！こいつら荷物積んでないぞ！」
「大丈夫だろ？こいつら売れば問題ねぇ」
つまり奴隷か・・・

「お？上玉の嬢ちゃんがいるじゃねぇか」
「売る前に味見するか？」
「そんなことしたら値段下がらね？」
「大丈夫だろ？バレなきゃ問題ねぇ」
「じゃぁ俺が先だ」
「ダメだろ？一番最初に見つけたの俺じゃねぇか」
「じゃ俺二番目な」「あ！ずりぃ」
馬車の中にいる女性を犯す順番の算段をしているようだ

一方護衛達は
「くっ！これじゃこの子を逃すこともままならない・・・」
「せめてこの光景を誰かが見ていてくれたら
この盗賊たちを討伐に動くだろう
せめてその時のために数を減らさないとな」

「おい！諦めるつもりか！」
「だがこの数はどうしようもないだろう！」
諦めかけている

「助けて・・・！」
小さな声だが馬車の中から声が聞こえてきた

「助けてやるか、あの盗賊気に入らないし」

そこから思考速度と身体速度を加速させる
純粋な魔力で鋭いナイフを作り
胸を、首を、頭を刺して殺し
上から下へ、右から左へ、左から右へ、下から上へ斬り真っ二つに
足を、腕を、首を、切り飛ばし

その後には盗賊達だったものが転がっていた

［テンプレだった場所］
ノァサイド

「何があった！」「敵か！」
「見ろ、盗賊達が」「いったい誰が・・・」

護衛の人達は警戒しています
それよりあの影・・・

「どうかしたの？」
この子はティア

私の友達

「ううん何でもない、それにしても今の・・・」

「何だろう？よく解んない
とにかく凄かったって事位しか・・・ウッ！」
今になって地の臭いが漂ってきた
・・・吐きそう

「血の臭いが今になって・・・ウッ！」
ティアもきついみたい・・・

「大丈夫か！何があった！」

「血の臭いだろう、慣れてない奴にはかなりきついはずだ
良く吐かなかったと褒めてやりたいくらいだ」

「俺達はもう慣れきってるからなぁ・・・
それでもこれは少しきつい」

護衛の人達は血の臭いに慣れているみたい
私はあんまり慣れたくないな

「馬車を」「はい、解りました」
護衛と操馬師の少し会話した後、馬が走り出した
そして馬車は進む

「この事を国に報告しなくては・・・」

霧先サイド

「とりあえず盗賊は片付けたが、多分騒がれるだろうな・・・
俺の姿が特定できない位の速度で盗賊を葬ったが
とりあえず黒い姿だという認識くらいはされるか」

まぁ、黒い閃光位の認識しかできないだろうが

「なんか厨二センスの二つ名が付いたりして」
少し楽しみだったり

特定されると色々と面倒臭いから髪と目の色を変える
この世界に良くあるブロンドの髪に青い目
そして見た目は１６歳程だ
「先ずは街へ、あの馬車を追うしかないけど」

その先が街じゃないとは露ほども知らなかったり

1：あるファンタジーの世界の始まり（後書き）

もし設定かぶりがあるなら教えてください
意図的なものではありません

召喚された勇者の性格募集
そして偉そうにもこの小説の二次創作も募集
「クロス出来ないならしてくれる所を作ってくれる人探せばいいじゃない」
という変な発想です

後、完全に言い忘れていましたが
「表示（V）」から「文字サイズ（X）」を選び
「最大（G）」推奨です

2：霧先「予想外です」（前書き）

前話を少し書き換えました

2：霧先「予想外です」

［馬車を追いかけて］
霧先サイド

この世界の魔法学園とは
簡単に言うと
「魔法の素質が特にある者に魔法を教える専門学校」
みたいなものだ

他の学校でも魔法は教えているが日常で使うような物ばかり
そして魔法学園の卒業者は高ランクの冒険者に成る者が
非常に多い為、泊を付ける為に通おうとする貴族が多い

だがそんな事を許す魔法学園ではない
きちんと選抜して選び抜いているのだ

1：世界各地に測定者が周り、魔力を計る水晶を使う
2：1により高魔力判定が出た者に推奨状を渡す
3：学園に連れてきてもう一度水晶で計る
4：軽い試験をして素質ある者を入学させる

といった具合で不正をするのは難しくなっている
だが1と2をすっ飛ばして3から入学する事も可能だ
何故なら選抜者が見逃している者の中
に素質ある者が居るかもしれないからだ

魔法学園に辿り着く事も大変な場所にあるので

3から入学する可能性の方が高かったりする

・・・何故こんな話をしているかというと
あの馬車が魔法学園に着いたからだ

「俺は3からの入学者になるのか
前の世界で楽しめなかった学園ライフでも楽しむとするかね」
俺はそっと呟いた

護衛の人Dサイド

「凄い！」「これが魔法学園・・・」
俺らが護衛した子供たちは
それぞれ似たような感想を呟いていた

それもそうだろう、この魔法学校は国立なのだ
小さい訳がない

「さぁ着いたぞ、途中であんな事があったが
どうにか着くことが出来た」

「何があったか俺達でも解らなかったが
見たままを伝えるしかあるまい」

「お前らは学校を楽しんで来いよ～」

「「はーい！」」

「相変わらず子供は元気だなぁ」

「これでこそ護衛した甲斐があったってモンだよ」

「俺らが守ったって言えるか？今回の事は」

「・・・解らん、だが俺たちは精一杯やったんだ
それは胸を張ってもいいだろう」

≪ガサガサ・・・≫
「「「「！？」」」」

草陰から物音が聞こえてきた

「こんにちは、俺は学園の入学希望者です
ここから入学式へ行くにはどうしたらいいですか？」

「お、おう・・・」
（なんだこいつ、今の今まで気配に全く気付かなかったぞ
俺達油断を抜きにしてもそこそこやれるだろう・・・
この歳で？何者だこいつ・・・）

草をかき分けて出てきたのはブロンドの髪に青い目
そのくらいなら何処にでもいるような少年だ
（だが「単独で」ここに辿り着いたのは魔法学園で５年ぶりだ
それに見た目１４歳位じゃないか？）
※日本人は欧米の方から見ると少し童顔に見えるらしいです※

「こっちだ」とにかく俺は案内することにした

霧先サイド

［入学式終了：洞窟前］

とりあえず学園の入学式が終わり

次は試験となった

この試験は学園内でのランクを決める為のもので

入学できるかどうかを決めるものではない

課題は魔石採集

魔力の高い魔石を採集した方が高いランクに付ける

奥の魔石の方が魔力を大きく内包しているからだ

これは奥の方の魔石の方が取られ辛く沢山の魔力を内包でき

また、奥の方の魔物の方が狩られていない為数が多く

魔力に集まる強い魔物が隠れている可能性が高いからだ

（ただの石でも長い年月を魔力の中で経ると魔石になるからなぁ）

実に都合のいい洞窟があったものだ

都合のいい物は利用するのは良い事だと思う

（とりあえずCランクくらいの魔石を採るとしますかね）

3：入学試験　洞窟の蛇の巻

［洞窟の中］
霧先サイド

「しっかし多いな～魔石」
1分歩けば1個は見つかるってのはいくらなんでも多過ぎる
・・・？入学式で見た教師の魔力が混ざってるぞ？
（成程、教師が時々魔力を洞窟に向けて放つことで
魔石に魔力を貯めてるのか、それでここまで多いんだな）

と思案しながら歩き
途中で襲ってきた魔物は適当に斬り、倒す

（そういや動物が魔力を溜め込むと魔物になるって話があったな
それもそうなんだが実際には
死んだ時に霧散する魔力の内の
恨みつらみとか怒りだとかそんな感情が魔力に宿り呪（じゅ）属性に
その呪属性の魔力が・・・って話が飛んだ）

純粋な魔力だけならただの魔力持った動物ってだけで問題ない
だが呪属性の魔力が多く混ざると魔物になってしまう
しかも魔力を持った動物はなまじ知能を持つから
さらに呪属性が発生してしまう無限ループ

（そういやこの辺に呪属性が発生しそうな場所は

・・・うん完璧にここだ、今理不尽に殺した魔物とか
でっかいのが奥の方に居るかもしれんな）

「（とりあえず一番奥へ進んで退治しておくか）」そう呟く
それでもまだ呪属性が発生するが
霧散する分まだどうにかなるはずだ
それ以外にもただ魔力を持って強くなったそれに興味がある

そう考えているとまた魔物が襲ってきた
大きな鼠（ねずみ）みたいな魔物が噛み付いてくるが
それを一刀両断にする

（呪属性が増えてゆく、見える分俺には辛いな
そしてそれが纏まって魔王になりそれを倒してもまた霧散するだけ
少しづつだがだんだんと溜まってゆく呪属性の魔力
・・・今回奴が使うのはこれか）
だったらどこぞの召喚された勇者について行った方が良いだろう

蝙蝠みたいな魔物を魔力弾を撃ち落としながら進む
一匹は弱いが数が多い、そして数が多いから呪属性も沢山発生する
そしてそれが奥の方へ流れてゆく・・・

「間違いないっぽいな」

その多量の呪属性魔力を追って奥の方へ進む

［洞窟の奥、開けた場所］
霧先サイド

「こりゃまたデカいのが居たものだな」
≪キシャアアアアアアアアアアアアアア！≫
馬鹿でかい蛇みたいな魔物だった

そしてその魔物は俺を丸呑みにしようと大口開けて襲ってくる
まぁ魔力刀で≪ガァン！≫「ん、魔力刀が折れた？」

そう言いながらも飛び退いて避ける
どうやら目算を見誤ったらしい、岩位は切れる程込めたんだが
経験不足がやはり響いている
少し魔力刀の密度を上げる

≪ガアアアアアアアアアアアアアア！！！≫
しかも中途半端にも奴の牙は折れていたらしく
怒らせてしまったようだ

≪ブシュ・・・コキコキコキコリ・・・≫
奴の骨が肥大化し皮膚を破り
さらに大きくなりながら音を立てる
第二形態と言った所か、気が早い

そこ！『蛇（へび）に骨なんかあるのか？』
とか思ったお前現実の蛇にも骨はあるぞ、調べてみろ

まぁ態々（わざわざ）待ってやることもないだろう
骨を一本づつ・・・≪ガキンッ！≫「またしても硬（かた）い」

先程より魔力を2倍程にしたが
それでも斬れない、弾(はじ)かれた

さらに5倍程の魔力を込める

≪ザン！ザン！ザン！ザンッ！≫今度こそ骨を斬ってゆく
それでも抵抗が有るのだが・・・

１５本程斬っ所で
≪シャアアアァァァ！≫
どうやら変身が終わったらしい
変身中に攻撃したのを怒っているのだろうか
こちらへ突進してくる

「速いな、時速５０ｋｍはあるだろうか」
そう言いながら避(さ)ける
去り際(ぎわ)に骨を3本くらい切ってやったがこれでは埒(らち)が明かない

≪シャアアアァァァ！≫
今度はその馬鹿でかい尻尾をぶん回してくる
その尻尾を関節を狙って斬る

≪ゴアアァァァァ！！！≫
流石にこれは痛かったらしい
器用にもバランスを取りながらぶん回した尻尾の感性を利用し
こちらに顔を向ける

≪シュアアァァァァ！！≫
今度は短くなった尻尾の分を考えながら体を曲げ
『今度こそ飲み込んでくれる』と言う様に

大きく口を開けながら此方へ跳んできた
魔力刀に妖力をさらに込め、そして伸ばし
脳が有るであろう頭を一刀両断にする
≪グシュアアアァァ！シュヲヲオオオオ！！！≫≪ドゴン！≫
大量に血を吹きながら洞窟の壁に激突し、絶命した

「大量の呪属性の魔力が・・・」
霧散して洞窟の中に霧散した
それにしても多い
ただ強い魔物が死んだ時が死んだ量よりも遥かに・・・

「まだ奥があるか、行ってみよう」

［洞窟の最奥］
霧先サイド

「ここを守っていたのかそれであんなに多かった訳だ」
そこにはあの蛇の物と思われる卵があった
これを奪われるであろう悲しみであんなに・・・

「安心しろ、盗っていったりしないからさ」
結界を張ることにした

〈一時間後〉

「・・・これでよし」

恐らく魔王でも破れないであろう結界を張った
外からは入れない、内側からは出られるが

「気のせいかな」
呪属性が薄くなったような気がした

4：入学試験　魔石の巻

［洞窟の奥の開けた場所］
霧先サイド

あの大蛇の件が終わり
俺は魔石を発掘していた

「♪～♪♪～♪～
ここらの魔石は発掘し放題だからな（実際はそうでもないはずだが）
Ｂ－ランクからＡ－ランクくらいまでの魔石がゴロゴロしているし
評価は提出した分だけだし
魔石は色々と便利だし
あんな奴居たから生徒は近づかないし
採った魔石は保管空間に放り込めばいいし
あの大蛇自体も良い武具になるし
見られてないし良いこと尽くしで言うこと無しだね」

モソハソよろしく剥ぎ取りと採集を行なっていた
採った傍から保管空間に放り込み
放り込んだにもかかわらずきちんと整っている
それは彼の投擲スキルによるものだろう

「・・・さて、遺品を漁るのはこのくらいにしとくか」
採った大蛇の部位は切り取った骨と牙

魔石は2割しか採っていない

「と言ってもこれだけで十分過ぎるんだがな」
二割しか採っていないと言っても数は7，８０個
骨は一本１m位はあるのだ

俺はこの開けた場所の入口に戻り
「『修業中』っと」
『修業中、近寄らないでください』と書かれた看板を立てた
念を入れて筆跡まで変えて

何故『修業中』かと言うと
この先の大蛇を見て逃げ帰ってもらうためだ

「またな・・・」
俺はその場を去った

［洞窟の中］

俺は洞窟の浅いところで魔石を採集していた

「こんなもんだろ」
D＋ランク５つCランク３つC＋ランク２つ程を採集し
試験会場へ向かう

（試験時間は３時間
大蛇の所で一時間と２０分程を消費、採集で１時間位だから

多めに見積もって３５分、少なく見積って２０分程だろう
そして提出場所まで２０分程、どうにか間に合ったか
提出はＣ＋・Ｃ・Ｄ＋の３つにするとしよう）

［提出場所］

俺が提出場所を示すラインの中に入った瞬間

「時間切れです！
今ラインの中に入っている者が試験合格者
最低でもＥランクを保証します
ですが添え意外の者は最低のＦランクからです！
でもこの学校は簡単にランクが上がるんですけどね」

審査員の女性がそう合図した
（危なかった、タイムオーバーでＦランクはちょっとな・・・）

課題提出の列に並ぶ

少し周りの声を聞くとこんな会話が聞こえてきた

「なぁ、お前どのくらいの魔石を採ってきたんだ？」
「う～ん・・・前父さんに見せてもらったＤランクくらいかな？」
「すっげーな！親父がＣランクなだけはあるぜ！」
「まぁね～」

いつどこにでもこんな子どもは居るみたいだ
微笑ましい

「次の人！名前とファミリーネームの頭文字をどうぞ」
「ライト・Cです、よろしくお願いします」

Dランクの魔石を採ったと言っていた子の番が来た

「これは・・・Dーランクですね」「え～Dランクじゃないの～！」

「はい、これは間違いなくDーランクです
でも行くクラスはDクラスですけどね」
「う～・・・」

実はDーもD・もD＋もギルドではすべてDとして扱われる
Dの中で弱ければー（マイナス）強ければ＋（プラス）ーどちらでもなければ・（ドット）となる
・は省略される事が多いのだが

「次の人」
「ミスト・T、これがいいかな・・・っと」

次は俺の番である

「これは！・・・Cランクですか・・・」

「おい！お前の父ちゃんと同じかよ！」
「俺らよりは強いんじゃね！？」
「俺の父ちゃんはCーなんだ・・・」
「なに！」

そんな声を特に気にせず俺はCクラスへ向かっていった

審査員サイド

初めからＤ－ランクですか
父親が冒険者という事もありますし期待できますね

「次の人！」「ハイ！」
すぐに返事が帰ってきた
さてこの子の持ってきた魔石は・・・！？

「これは！・・・Ｃランクですか・・・」

「おい！お前の父ちゃんと同じかよ！」
「俺らよりは強いんじゃね！？」
「俺の父ちゃんはＣ－なんだ・・・」
「なに！」

周りの子ども達がすごい凄いと言っているけれど
これはそんなものではない

学園にはそりゃ沢山いるけど
初めからＣランクというのは異常
Ｄ－ランクだって十分に凄い事なのにＣ・ランク・・・
それに疲れの色も見られない

その少年は周りを気にせず去っていたけど
一体何者なの・・・・

5：入学　デジャブだらけ

［Cクラス教室前］
霧先サイド

「今日はこのクラスの新入生3三名います
内二名は女の子ですよ」

『「おお～！！」』

この教室の教師は男性らしい

「先ずは男の子から紹介します
ミスト、入ってこい」「はい」

≪ギロリ≫男子から睨まれた
俺が一体何をした

「ミスト・T、色々とこなせるオールラウンダーだ
よろしく」
そんな視線なんぞ屁にもしないが

「次、ティア」「はい！」

入ってきたのは女の子だった
ノルゥと同じくらいか？

「ティア・Ｌです、魔法や魔力の操作が得意です
よろしくおねがいします」

（来る途中で助けた女の子の一人か
魔力操作が得意・・・なんか聞き覚えがあるような？）

「次、ノァ」「はいっ！」

「ノァ・Ｖです
魔法を使えますがあんまり強いのは使えません
よろしくお願いします」

『強いのは使えない』実に曖昧な自己評価だ

（このノァという子の周りに妖精が集まっているな
ティアの周りにも集まっているがノァの方が遥かに多い
他の奴には見えないが魂も透き通った水晶玉みたいに綺麗だ
しかも綺麗に形が完成しているから周りに影響を受けにくい
・・・ノルゥにそっくりだな）

あまり関係ないだろうがこの世界の妖精について説明しておく

単純に言うと無駄に使った魔力の塊だ
そこに感情とか思想とかが混ざって妖精となる
大きければ精霊と呼ばれるが特に区分はない

「君達の席は空いていると所に適当に座るといい」

「私はここ～」「じゃ私はここ！」
予想通りというか二人は隣に座った

「じゃぁ俺はここで」

この二人の付かず離れずの位置に座る
窓際の席で外の景色がよく見える、右側からしか出られない
前には青髪（かみ）の少年と水髪の少女が隣同士で坐（すわ）っている
少女が右側、そして俺とあの二人が座ってもまだまだ空きがある
・・・つまりこの少女はこの少年に惚れている可能性がある、と
何故なら好きな奴の隣には座りたいもんだし
閉じ込めてるていうのは『私のものだ』と言いたいって事だからだ
あくまで可能性だけど

そういえば少し教室を見て回ったがＣクラスは広い
中堅クラスだからここで止まる奴が多いのだろう

青髪の少年が話しかけてきた
「いょぅ、俺はキサラギって言うんだよろしくな」

（！？・・・キサラギ！？同じ名前の被召喚者！？
いや、召喚されたのはここから何１０ｋｍも離れた王国だぞ？
移動手段が馬車くらいしかないこの時代じゃその可能性は低い
となるとトリップ・・・この可能性の方が高いかもしれん）

≪ＰＲＲＲ、ＰＲＲＲ（鉄歯車風）≫
・・・念話か、なんて通知音使ってるんだ狭間は
思わず身構えそうになったじゃないか

〈霧先〜！〉

〈狭間か？なんだこんな時に〉

〈いや、あの「存名簿」を今見たら吃驚
なんとあの八頁（はちページ）分が
そっくりそのままその世界に行っているではありませんか〉

〈本当か！〉
今度は少女の方が「私はユーリっていうの、よろしくね」
俺は「ああ、よろしくな」と答える
〈その内二人はここにいるっぽいぞ〉

〈その二人にはお前の事はバレていないらしいな〉
「こそ（ところでユーおまえあいつのことすきだろ）こそ」
「！？／／／」
ちょっとカマをかけてみたら見事にビンゴだった

〈きちんと聴いてるか？〉

〈大丈夫だ、問題ない〉
「こそこそ（まぁばらしちゃいけないでおくよ）」
〈ユーリをいじっているだけだからな〉

「ユーリ顔赤いぞ、どうした？」
この朴念仁が・・・まぁいいか

「い、いや何でもないから！／／／」
さらに顔が赤くなるユーリ

そして思いっきり顔近いぞキサラギ

〈私もこの状況を見たときは驚いた、後はお前次第だな
それとチートクラスがお前を除いて４人居る〉

≪ギロン≫俺の隣の少女がユーリを睨む・・・イリアか
見事な三角関係、有難うございました

〈３人？キサラギとイリアと・・・後は？〉

〈ユーリともう一人は秘密だ、ただＡクラスに居るぞ〉

〈分かった、Ａクラスまで上がってみるか〉

〈お前ならそう言うと思ったよ、頑張れ〉

俺の隣の少女が
「私はイリアよ、よろしく」「よろしくな」
予想通りイリアだった

〈お前、並列思考（マルチタスク）でも持ってんのか？〉

〈持ってるぞ〉

「では、新入生が席に着いたところで授業を始める
今日は魔力制御の授業だ」

「えー！今日もですかー！？」

「出来ている奴が少ないんだから仕方がないだろう」

「先生！俺は魔法を習いに来たんです
魔力制御を習いに来たんじゃありません！」

（なんかデジャブが発生しているんだが）
そう思いながら耳を強化する
本当にデジャブか確かめるためだ

風の魔術か・・・

「（魔力制御なんて基本中の基本、出来て当たり前だ
出来なければ魔法でミスして笑われるぞ？）」

「だけど・・・！」

「（第一お前は出来ていないじゃないか
笑われるだろうな）」「くっ・・・」

デジャブじゃなくて既に見ているな、確定したよ
つまりこの教師はレイドか・・・

〈もう二人、確定した〉

〈速いな！これからどうなるんだよこれ・・・〉

5：入学　デジャブだらけ（後書き）

はい、今回で色々と詰め込みました
色々と確定、そして勘の良い人なら気付いているでしょう
霧先がユーリの事を知っているのはキサラギから修業中に聞いたからです

6：授業開始

［運動場：授業開始］
霧先サイド

「さて、魔力制御についてだが
体を動かすのと同じで初めから教えることはできない
だがＣクラスにもｊなれば動かし方位は分かるだろう
だからその技術について教える」

指の上に風の魔力を目に見えるように含ませ

「回転」そのう言うと３０ｃｍ四方位の街風（つむじ）が発生
少し緑色が付いているので誰の目にもわかる

「移動」今度はいつの間にやら集めた木葉の近くに寄せる

「縮小・圧縮」今度は街風が３ｃｍ四方くらいに圧縮される
圧縮と判断したのはその中の魔力量が変化していないからだ
そして中で落ち葉が舞っている

「解放」魔法が開放され落ち葉が吹き飛んだ

「こんな感じで扱うんだ、言葉は別に必要ないが
言葉にしたほうがイメージしやすいからな
それと魔術には言葉や陣は必要ないが
魔法にはそれが必要だ、また魔法の方が威力や正確性が高い
『風よ、かの物を巻き飛ばせ』」

ビュオオオ！という音が鳴った後
風で散った落ち葉が校庭の外へ吹き飛んでいった
今度は無色

『巻き飛ばせ』の単語から
空気砲の様に回転しながらの風だろうと推測する
事実、木の葉もそんな感じに飛んでった事からおそらく正解だろう

「とまぁこんな感じになる
魔法というのは魔法使いにとって個人情報並みに重要なもので
簡単に人に教えるものではない
だからどんな魔法を使ったかは教えられないが
魔法を作る助け位はする、それがこの魔法学校だ」

頑張って作るといいさ
そう教師は続ける

「とりあえず今から魔力の細かい操作を教える
魔力が篭った糸をこの別の魔力の篭った針の穴に通す
それが今回の課題だ、そしてこの二つの魔力は反発し合うから
魔力をどうにかして無力化しないといけない
頑張れ」

こういうのは一番難しい方法で突破したくなってしまうのが俺だ
あいつのことだから
そのままやっても無理なくらいにはしているはずだ

「難易度順に並べると
反発方向と逆の方向に力≫魔力そのものを相殺＞魔力で固定≧魔力

を抜く
だろうな
さて、先ずは反発方向への相殺だが・・・」

十分後

「先生！できませーん」
さっきのイチャモンつけてた男子だ
俺ではない

次、魔力そのものを相殺・・・できた

「先生！出来ました！」

「は！？お前どうやったんだよ！」
「篭っている魔力そのものを相殺しました」

「よし、俺もやってみる」

さらに十五分後

「無理です！先生！」

「そもそもどんな魔力を入れれば相殺するのか
解析する前にやったのが悪い」「うっ！」

「お前もだミスト
ほかの人にできなさそうなことをわかってて教えるな」
「は～い」
「全然反省してないだろ」「まぁね」
「はぁ・・・」
五分後
「出来ました！」
ノァだ、先程の会話でも聞いていたのだろうか
「どうやった？」
「あなたのやり方聞いてそのまま」
「・・・他には魔力で固定、魔力を抜くという方法もあった
与えられた情報で判断するのは人形と変わらん」
「？・・・ごめん」
何に『？』したんだ？
「別に謝らなくていい、これからに役立てればいいんだ」

なんか物語の波に飲まれている気がするが
抵抗しなくてもいいだろう
こういうのは後でわかるだろうし

「出来たー！」
この子はティアだったかな
「どうやった？」
「針の反対側からもう一本の糸で引っ張って・・・」
「その発想はなかったありがとう、糸はどこから？」
「言えない」
魔力糸だろう、糸を持っていない

４０分後

その後１０名程が成功し（クラスは５７人だったはず）
この日の授業は終わった
今回の授業は入学式後の顔合わせみたいのものだったのだろう
学生寮に寝ることとなった
「寝るか・・・」

6：授業開始（後書き）

話があんまり進んでいませんね

すみません

誤字修正：空気泡→空気砲

7：魔法学園で依頼形式の授業開始（前書き）

またしても説明が多くなってしまうｘｘなのでありました

7：魔法学園で依頼形式の授業開始

［クラスＣ：実戦授業］
霧先サイド

「今日は１階の『冒険者ギルド育成所』で依頼型式の実践訓練を行なう
既に依頼は貼っておいたから自由に受けるといい
そして今回は依頼者として評価する、では行ってこい」

教師がそう言った途端に生徒達は散り散りに依頼を探し始める
そして依頼を見つけ手続きして出かけて行く

「・・・はぁ」

「どうかしましたか？先生」

「いや、変わらんなぁと思ってな」

「確かになぁ・・・」

その視点の先を見ると

「おい！それは俺らの依頼だぞ！」「だったらさっさと取っておけよ」

「おい！聞いてんのか！？」
「はいはいわかったわかった
俺らはこっちの依頼をやるから好きにしてください」
「なんだと喧嘩売ってんのか、ア”！」

こんなやりとりが繰り広げられていた

「あの叫んでいる奴らのランクは？」
「C－だ」

「適当に対応してるのは？」
「C＋」「成程」

「・・・そういう事情は公開していないはずだが」「勘だ」

そう言うと教師はこちらに疑いの視線を向けてくる

ギルドでー（マイナス）のランクが付く奴らは
あんな風にマナーがなってない奴らだったりする
実力が低いだけでーがつくことはない

ちなみにランク分けは

マナーが悪く仕事が雑だとー
マナーが良く仕事が丁寧だと＋
どちらでもなければ・

魔物の場合

力は強いが知能が低い魔物にはー

知能が高く集団で襲ってくることが多かったり
特殊な能力をもっていたりする場合は＋

単独で知能が低いわけでもなく
特殊能力を持っているわけでもない場合は・

武具防具・道具や消耗品などの場合は

量産品ならー、個人的に作った物なら・
質が良かったり魔法の品だったりするなら＋

この事が分かったのは教師に言ったとおり勘だが
確定したのは寮で例のノーパソを使って調べた時
公開している訳ではないが隠してもいない情報だ

「お前も依頼をとってきたらどうだ？」

「そうするとします」

俺が取ったのは

『Ｃランク：薬草採集５枚の３束』

『C＋ランク：ウルフ退治１０匹』
『Bランク：ホーク退治』

「Bランクなんて Cランクが受けても大丈夫なのか？
それに３つも依頼を受けたりして同時に達成できるのか？」

「ホークは空を飛ぶから危険、でも魔法が使えればそれなりに戦えます
チームも組みますし数にも対処出来ると思います
それに３つの依頼の対象はどれも同じ森に固まっています
ホークはウルフを食べる事もありますし
まとめて見つかることもあるでしょう」

「そこまでわかっててその３つを？」

「はい、それにこの３つは元々纏めて受けるのを想定していたでしょう？
貴方の片手で届く範囲にあります」

「依頼を同時に受けてはいけないというものでもないし
お前なら受けても大丈夫そうだ、行ってもいいぞ」

「有難うございます」

7：魔法学園で依頼形式の授業開始（後書き）

Ｃクラスの大半はＣ－です

8：チームを組もう（前書き）

説明回が続く・・・（泣

8：チームを組もう

［ギルド受付］
霧先サイド

「さて、チームを組もうと思うんだけど」

「俺は『ランクB：ホーク退治3体』で」
「私は『ランクB＋：レッドウルフと群れの殲滅』にしようかな」
「私は・・・『ランクB＋：レッドゴブリンと群れの殲滅』に」

上から
キサラギ・ユーリ・イリアの順だ

キサラギは3体のを受けたけど俺のは1体だけだからなぁ
ランクは変わらないけど

この世界で『レッド』と付くと全てが3倍でその種類のリーダー
もちろん頭脳も三倍なので＋が付く
リーダーが変わるときは挑戦する側も赤く変わるそうだ
前の世界にもレッドウルフはいたがこの世界のそれとは別物だ

「ちょっといいかな？」

「・・・なによ」

「いや、３人共仲良くしていたのにチーム組んでないんだなと思って最後のレッドゴブリンなんて反対方向だよ？」
でもウルフとホークは同じ場所だよねーと図鑑と地図を見比べながら続ける

「・・・『ランクＢ＋：ムーンベアほｋ「ちょっとまて」・・・なに？」

「ムーンベアはｎ」
「『聖獣』とされている動物で捕獲なんてしてはいけないとされている」

「わかってんじゃん、だったらなんでそんなの取ったのさ」

「・・・ムカッときて試してみたの」

「さいですか・・・そういえばあんたらチーム組んでるんだろ？だったら俺もチームに入れてくないか？
『Ｃランク：薬草採集５枚の３束』
『Ｃ＋ランク：ウルフ退治１０匹』
『Ｂランク：ホーク退治』
の三つを受けたんだがどうも一人じゃ達成出来そうになくてね」

「もしかして３つとも場所が近かったりする？」

「近いぞ？そうでなきゃ３つもなんて受けない」
ユーリの質問に答える

そしてユーリとイリアの小声の相談が終わり

「・・・わかった、連れていくとする
ただし足を引っ張らないこと」
「俺は色々とできるからどれかの分野ならあんたらより上だと思うぞ」
「あのー俺の意見は？」
「レッドゴブリンの件で指摘が出来なかった時点で
あなたは情報部としてアウト」
「あの～誰が一番最初に依頼を・・・すいません」
イリアに睨まれて言葉が続かなかった様だ
「・・・苦労してんな」
「俺もお前の・・・て名前は？」
「ミスト・Tだ、よろしく」「「！？」」「ふぅん」
あ、しまったミストは前の世界で使ってた名前だ
イリアは最初からなんか察してたみたいだけど
「よ・・・よろしく、な？ミスト」ガタガタ
「よろしくね？」少し引きながら
「よろしく」そっけなく
「ああよろしく・・・イリアは後ユーリに説明してやっててくれ」

「あんたがシスコンって所も説明しておくわ」
「家族愛の延長線上の・・・ね？」
「親愛から家族愛に変わってるわね」

「とにかく依頼に出ようか、このまま話しててもなんだし」
「そ、そうだな行こうか」
依頼編に続く

8：チームを組もう（後書き）

現在居る世界ではランク差の強さの差は前の世界よりは穏やかです
かわりにSクラスからがとんでもないことに

9：依頼編（前書き）

学園編はダッシュで終わります

9：依頼編

霧先サイド

［少年達依頼中・・・］

え？依頼の内容はどうなったかって？
あんまりアッサリ終わったもんだから省略してたよ

【ホーク退治の場合】

「『闇よ　かの者を・・・』モゴッ！」

「馬鹿野郎（バカヤロウ）、証明部位ごと消滅させる気か
【貫け　光の筋『レイ』】」≪ピュッ≫〈ギャッ！〉ドサッ

「無駄がねぇな・・・」

「早速証明部位を「まて」・・・？」

「この死体を何に使うの？」

「簡単に言うと囮（おとり）だ
この死体を操って他のホークの縄張りに入れる
そうするとこのホークの死体を侵入者だと思い攻撃する
そこをさっきの『レイ』で《サクッ》っと」

「ちょっとまって！それ人を操れたりしないよね！？」

「操れるが死体である事が条件だな
ついでに動物は生きていても操れるが抵抗が強くて難しすぎる
電気刺激で筋肉を動かすんだからな」

「恐ろしいなおい」

「お前だって似たようなことが出来ただろ」

「そりゃそうだがな・・・」

その後は順調にホークを倒していった

［ウルフの場合］

「『ウルフ』と一言で言っても
人に迷惑かける奴らとそうでない奴らがいる
迷惑かける奴らの大半は群れからはぶられたり食料が極端に減ったり
余程の自信家もしくは馬鹿なリーダーが率いてたり
何かの原因で狂ったりした奴らだ
そういう群れを仕留めない限りあの依頼は貼られっぱなし
無闇矢鱈（むやみやたら）に狩る奴もいるが
そういうのはランクも上がらないし冒険者としてもアウトだ」

狂うのはお約束の呪の魔力である

「先程のホークの場合はどうなるの？」
「ホークは単純に数が問題になるケースが多い
ホークは捕食者だから増えすぎると生態系が狂う
つまりホーク退治の依頼が貼られている間は狩るのが基本」
「へ～」
「つまり冒険者の仕事は魔物を狩ることではなく
生態系の管理ということね・・・」
「その通り、と言いたいところだが主な仕事は雑用(なんでもや)だな
勘違いしている奴らが多過ぎるけど」
「俺も今まで勘違いしてたな・・・
ウルフ退治、行くか」
「「「お～！」」」」
［2時間後］
「お、あのウルフじゃないか？」
明らかに目が赤く体が黒くなって狂っている
「でかしたぞキサラギ！『レイ』！」≪ピュ！≫〈キャン！〉

「後はさっきの要領で群れのリーダー探し出して終了だな」

「そうなるな・・・」

「？　どうかしたか？」

「いや、なんでもない」

レッドウルフも無事退治し終わったが
魔物図鑑に書いてあった
『魔物は最近になって出現するようになった』
という一文が気になるな・・・

［現在］

「という訳で現在クラスＢ＋に上がったのだが」

周りからの変な視線が付き纏います
面倒臭いです、これから対処しようと思います

対処編に続く

１０：対処編（流血あり・死亡なし）（前書き）

流血表現注意です

１０：対処編（流血あり・死亡なし）

［Ｂクラス教室前］
霧先サイド

「おいお前！」

「何かようか？」

「『何かようか？』じゃねぇよ！
実力もねーくせにＢクラスまで上がってきやがって！」

さっきからこういう輩が絡んでくるのだ

「お前、正確なランクは？」

「Ｂーだよ・・・」

「成程、新参がいきなり自分より上のランクに来たもんだから
今まで頑張ってきた（笑）お前の立場が無い・・・と」

「ガタガタうるせぇ！いちいち馬鹿にしやがって！
第一お前が上がってこれたのはマグレだろう！
ホークが縄張り争いしているところを不意打ちしたり
同じくリーダー争いしているウルフを仕留めたり
そんなのばっかりじゃねーか！
それにお前はチームを組んで挑んだそうだなぁ？

それだったら普通はチームランクがBだろ？
俺は納得いかねぇ！決闘だ！」

ざわ・・・　　ざわ・・・
ざわ・・・　　ざわ・・・
ざわ・・・

『決闘』
この学校にはこういうルールがある

第3条：『決闘』
これはこの学校においてランクを変動させる一つである

決闘のルールは4つ
1：双方の同意の上で始めること
2：どちらかが負けを認めるか戦闘不能になったら終了である
3：審判に教師を必ず付けること
4：チームで戦った場合チームランクが上がる
5：尚、教師に挑んでもよい
6：個人で追加ルールも使える

決闘で負けた場合は3つに分かれる
1：ランク下に負けた場合は二つダウン（＋・－含まず）
2：同ランクに負けた場合は一つダウン
3：ランク上に負けた場合は変わらず

決闘で勝った場合も3つに分かれる

1：ランク上に勝てば勝った人のランクに上がる
2：同ランクに勝った場合は1つ上がる
3：ランク下に勝っても変わらない

そして教師はランクが一切変わらない

といった具合だ
なんでこんなルールを作っているのだろうと教師に聞くと

（「対人戦を学ばせる為だ
それと苦手な場所で責められても対応できないと死ぬからな」）

ごもっともである

「わーったわーった決闘は受けてやるよ
日時は今日の放課後
追加ルールは
1：自分の持ってる武具だと思われるもの全てを持ってくること
2：敗者は勝者にその中の一つを差し出すこと
3：勝者がその得る武具を決めること
以上だ」

「けっ、結局自分有利なんじゃねーか
まぁいいさ、そのくらいのハンデ位
やってやろうじゃねーか・・・殺しちゃダメなんて誰も言ってないよな？」

「「「ひっ」」」
さっきまでざわざわやってた外野がビクつく

「おい、あの狂殺者（バーサーカー）が試合するってよ」
「マジかよ！破壊力じゃＡランクでも可笑しくないって噂のあの！？」
「決闘ふっかけて無理矢理納得させてルールにないから殺したって噂も・・・」
「マジか！？対戦者殺されなきゃいいがな～」
確かに『殺しちゃいけない』なんて無かったな
（バーサーカーなんて二つ名を持ってんのかあいつ（笑））」
「おい！途中から聞こえたぞ貴様！
・・・ブッ殺ス・・・」

「あ～あありゃぁあいつ死んだんじゃね？」
「賭けでもしないか？俺はバーサーカーに銅貨５枚」
「それじゃぁ勝負になんねーだろ？」
「いや、俺はあの対戦者に銀貨２枚」
「そんなに賭けるのかお前・・・よし俺も賭けてみよう」

こんな賭博もあるようだ
それにしても４番目はなかなか見る目がある
これでも色々と隠しているつもりなんだけどな・・・

ーーーーー放課後ーーーーー

「では両者位置について・・・」

そこで並べてある武器を見る

俺の方は適当に作っておいた
剣・短剣・槍・弓・ナイフ
あの妖刀はこの間の世界破壊でどこかに行ってしまった

そして向こうの武器は
大剣・戦斧・戦槌・バスタードソード
戦闘スタイルが丸分かりだ

もう戦いは始まっているというのに

「最近体動かしてなくてウズウズしてたんだ
勢い余ってコロシチマウカモナ・・・」

向こうは戦斧を持っている

「あんまりあっさり終わらんでくれよ
せめて小手調べくらい耐えてくれないとここのレベルがわからんからな」

対して俺は手に剣を持ち短剣を腰に付けている

「貴様！あんまり「始め！」「小手調べ・・・と」ぐおっ！」

肘に軽く魔力を込めて吹っ飛ばす
５０ｃｍ位飛んだ所で向こうは着地

（それにしてもよく飛ぶな～）

「今のは痛かった・・・痛カッタゾーーーー！」
向こうは手にもった斧を上から下に振り下ろして攻撃
物凄い大振りなので難なく避ける・・・地面が砕ける

「おいバーサク入ったぞ！」
「なんだよあの威力！」
「大丈夫なのかあいつ」

「遅い、欠伸（あくび）が出る・・・ファァ」

「ナメテンノカ？」≪ドゴォ！≫
また上から下の大振り

「さっきから大振りばっかりだな≪ブオン！≫っとと」
今度は右から左

「ゼァ！「飽きた」≪バキッ！≫！？」

また上から下の大振りが来ていい加減飽きたので斧を折る
刃の部分が落ちる

そして首筋に剣を当てる

「降参しろ、でないと・・・」

「誰が≪スパッ≫う・・・あ・・・」

動脈を切断

バーサーカーは自分の血に少し怯えているようだ

「もう一度言う降参しろ、でないと出血多量で死ぬぞ」

今度は喉元に剣を向けそう言う

そしてバーサーカーは少し剣を見て『ニヤリ』≪キィン≫!?≪カランカラン≫

(残っていた棒で剣を弾き飛ばした!?確かに意識が逸れていたが何て奴だ

また経験不足・・・か)

「死ねえええ!」

自分の血が流れるのも構わず向かってくる

「折れた先が尖って・・・」

ザシュ・・・

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「流石あいつ・・・だな」

「そう・・・だね・・・」

「吐かないのは流石ね」

「うる・・・さい・・・ウッ！」

「ユーリ、大丈夫か？」

「なん・・・とか・・・」

あの後ミストは尖った棒を腰に付けていた短剣で横に真っ二つにし

そのまま親指と肩を切り落としたのだ

結局ミストは無傷（返り血をかなり浴びているが）

そしてあちらは血の流しすぎで倒れた

「審判、流石にこれは戦闘不能として扱っていいよな」

「そうですね・・・勝者！ミスト・T」

（血の臭いがきついな・・・これも経験不足か）

そして俺はバーサーカーの所まで歩いてゆく

「おい！何をするつもりだ」

「治療だよ」

肩と親指を治療魔術で付けた、動脈の傷も治す

「こんなもんかな・・・と」

血の量は回復させない
しばらくこいつには挑まれたくないからだ
正直ヒヤッとした

「さて、武器を一つ・・・これでいいかな」

両手でも片手でも扱えるバスタードソードを取る

「あいつのお気に入りは横の大剣か
使い込まれているな」

本来は大剣を振り回すスタイルなんだろう
確かにそういう戦い方だった

「帰るか」

周りは騒然としているが
今後絡んでくる奴はいなくなるだろう

１０：対処編（流血あり・死亡なし）（後書き）

戦闘描写、うまくいっているだろうか

11：霧先、対話する

［Aクラス前］
霧先サイド

この間のバーサーカーの一件で一気にAランクまで上がったのだが
Aランクのチートクラスというのがすごく気になる

あれから一ヶ月経って騒ぎも収まってきた頃だが
と誰か話しかけてきた

「よう、お前がミストか？」

「そうだが、何か用か？」

そういやこいつ
あの時俺に銀貨3枚賭けてたやつだ

「いやまぁ用と言えば用だけどさ・・・」

「なんなんだ？」

（この人、嘘とかつけないタイプじゃないか？
俺としては好感が持てるけどな）

小声で
「（ひょっとして『狭間』の件か？）」

「・・・向こうに行って話そう」

「了解だ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして俺らは人気のない廊下に移動した訳だが

「なんでわかった？」

「勘、強いて言うなら隠していたつもりの力を一瞬で見破ったこと」

「あれはわかるよ
隠そうとしすぎて隠しているのががバレバレだった」

また経験不足か

「今度から気をつけるよ
でも俺のことをそちらが知っていたのは何故だ？」

「狭間が教えてくれたんだ」

「俺には教えてくれなかったんだがな・・・
それで狭間の件なんだが」

「・・・表立っては俺が探してみる」

「そして裏で俺が探るということだな」

「そういうこと・・・そしてそこに隠れているお二方は・・・」
そして彼が二本のクナイを持ち視線と殺気をやった先には

「わわっ、バレちまった！」
「気配は隠していたはずだよ！」

「キサラギ、ユーリ、何やってる」

「知り合いだった？」

「そして関係者」

「それはすまん」≪サッ≫とクナイを仕舞う

「ミストが（居）なければ即死だった・・・」
「まだだ！たかがクナイを投げられたくらいで・・・
まだ戦える！」

「あれにはゲイボルク並みの死の呪いがかかっていたぞ」

「一発で見抜いたのか！」

こいつ、何気にエグい事するな

「そういうのにはかなり詳しいつもりなんで」

「ゾッとしないな・・・」
「危なかったよ・・・」
ホッっとする二人

「仲いいね～君たち」

「だってキサラギ君はわｔ「スタァァァップ！
待て！今お前は危険を犯した　即刻黙るｋ」グスン・・・」
「御免ユーリ・・・後で何でもするから許して・・・」

「こんな奴らですがよろしくしといてくれ」

「さっきはごめんな～」

「いいよ、いい人みたいだし」

「よろしく！」

もう打ち解けてるよこの三人

「それじゃあ」
、チラッ
そして少し彼と少しアイコンタクトをし

「そういやお前の名前は？」

「風上（かざかみ）　風斗（はやと）だよ」

「霧先（きりさき）　涼（りょう）だ」

ここで偽名名乗る必要もないだろう

「そう言えば二人のクラスは？」
「A・だ」
「同じくA・です」
いつの間にランク上げたんだこの二人
「もう授業始まるから戻ろうか」
「もうそんな時間か！戻ろう」
「あ、待ってー」
風上が二人を連れてAクラスの教室に戻っていった

「・・・でイリア、いつまでそこにいるつもりだ」
そして何もないように見える空間からイリアが現れる
「あら、バレた？
あの時貴方がお城で使った隠蔽法を使ったんだけど」
「まだ荒いな、それにその隠れ方にも穴がある
お前もよく知っているはずだぞ？」

「そうね・・・でもその前に本題
『狭間』としか言わなかったからよくわかんなかったのよ」
そこで俺は一枚の紙を取り出し
「伝達［かくかくしかじか］」
これは【説明中・・・】と同じ意味があるスペカである
伝えた内容は呪属性魔力の事と世界を破壊しているやつのこと
「成程・・・このことは皆に伝えたほうがいいかしら？
「駄目だ」
「わかったわ
それにしてもそのカード便利ね、一枚頂戴」
「自分で作れ
何を伝えたいかで術の構成を変えなきゃいかんからどっちにしても
無理」
それを一枚の紙に念写する魔術も必要だし
「でも参考にしたいから解析させて？」
「わざと無駄を残してるぞ？」
これは本当のことだ
「やっぱり自分で作る」

「そうするといいさ
さて、もう授業が始まるから帰るか・・・ってもういねぇや」

もう転移してるし
きっと一緒に帰ったら誤解されると思ったんだろう
きちんと魔力痕跡を消しているところが細かい

「帰るか」

少し授業に遅刻したことは言うまでもない

１１：霧先、対話する（後書き）

風上は隠しすぎてバレバレと言っているけど
Ｂクラスの範疇だったんだよ？

ただ規格外クラスが実力を隠そうとすると
周りに合わせる傾向があるからそれを風上が見抜いたのです

風上はチートクラスな上に前の世界でだいぶ経験を積んでいました

１２：卒業　そして本編開始（前書き）

いくらなんでも早いですよね・・・

本編スタート

１２：卒業　そして本編開始

［3年後］
霧先サイド

結局卒業まで何もなかった
バーサーカーの一件以来、畏怖して近づく奴がいないのだ
Aランクに入りたての頃に盛大な歓迎を受け、きちんとお礼してからそれっきり
A＋を維持して終了している

「なにかあったと言っても
ノァがノルゥと同じ魂元を
ティアがミスティと同じ魂元持っているというだけだしな」

二人とも前の世界の記憶は持っていない

迫害の記憶を思い出させても辛いだろうし
こちらが記憶に干渉しない限り拾うこともないだろう

友好関係なら新しく作ればいい
ただ見守ってあげるだけで良いのだ

そこら辺はキサラギ達に任せている

「カザカミさん！またね～！」

「ギルドで仕事やってたら会えるかもしれんなー！
イリアにキサラギにユーリにティアも死ぬようなヘマはするなよー！」

「わかってるよ！
お前らに散々叩き込まれたんだからな！
思い出すだけで寒気がするよ・・・」

アレを思い出したのかキサラギが身震いする

「ミストさんもまたねー！」

「あぁまたな、今度遭った時は鈍ってないか試してやる
サボるなよ」

「その基準はどうする気なの・・・」

イリア、いい質問だ

「せめてSランクチームはどうにかできるようになってろ
今のお前らじゃ戦術次第じゃ殺されるぞ」

その戦術に対抗策を練れたら負傷する程度で勝てるだろうが
今のあいつらには危機感が薄い
俺にも言えることだからそこらへんは経験を積む必要があるだろう

・・・無論一人で戦う場合だが

ちなみにキサラギ達はステータスとスキルを引き継いで人間になっ

てる
ステータスには寿命も含めまれている
「それでもカザカミさん達を相手にすると
一瞬でやられかねないと思うんですけど・・・」
「わかんないよ？ひょっとしたら追いつかれるかもな」
「そうだな、５対２の公式試合でやれば
負けるようになる可能性は十分にある」
「公式試合限定かよ・・・」
公式試合となると大勢が見ているため全力が出せない
そこで技術や戦術などが勝敗を決めるようになる
戦術や技術においても余念は無い俺達だが人数の差は埋め辛い
やってのけるが
「年季がちがうっての」
「何の年季か聞かない方が良いかも・・・」
『ワハハッ』と皆で笑いあった後解散したのであった
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「霧先、行く当てはあるのか？」

「奴の事か・・・・・・恐らく魔王を使うつもりだろうな」

「確か『呪の魔力』だっけか？
そこまで溜め込んでいるなら使わない手は無いだろうしなぁ」

「世界を破壊するとなると莫大な力（エネルギー）がいるからな
そこに今回は呪の魔力というわけだ」

並行世界が多ければ多いほどそれれには時間がかかる
何故なら集めるエネルギーが多量になるからだ
下手をすればこの世界の呪の魔力だけで世界の一個を壊して余るかもしれない
そこまで説明すると

「そんなのコントロール出来るのか？」

「『ただ破壊するだけ』の物に制御なんていらないさ
後は範囲外に逃げるだけ」

「壊した破片が無くなったって話だが」

「それが解らん、どうなるんだか・・・」

謎は多い
ただ少しずつそれは始まっている
この世界は破壊されずに残るのか、それとも跡形もなく破壊される

のか

それは神にすらもわからないだろう

「情報集めに王都へ向かうしかないか」

「昔の魔王についての文献があるといいね」

１２：卒業　そして本編開始（後書き）

まだ黒幕の名前すら無かったり

1：森を抜け　関門通過

［魔法学園森の中：朝］
霧先サイド

「というわけで文献を探しに出発したのだが」

「魔物が多いな」

何を隠そう魔法学園と王国は近いらしく
森を抜ける事が出来れば魔法学園に簡単にたどり着けるのだ

・・・しかし行きには見当たらなかった魔物が多い
本当に多い、これはあれか？
『特定のルートを通らないと魔物に遭遇する』とかいうのか？

（通理であの馬車は時々変な方向に行っていたわけだ）

「これってゴリ押しで突き抜けたほうが良くないか？」

「そうしようか、面倒臭い」

スピードを一気に上げ
木を避けながら魔物を蹴散らして進んだ（本当に蹴散らしました）

［森を抜け街道：昼］

≪ピピピピピ、ピピピピピ≫

（魔法の森付近・・・と）

狭間からパクッたＰＣで検索をかける

「お、それ狭間のノーパソか？」

「パクッた」

「おいおい、とりあえず出たよ？」

そう言われて画面に目を向けると

「『魔法学園付近の森は最低でもＤランクないと抜けることすら難しいです
Ｃランクでも死の危険が伴い
さらに魔法学園を探すならＢランクは必要でしょう
特定のルートを通れば一度も魔物に遭遇しないですが
それを知っているのは迎えの馬車のみです』・・・成程」

「ところで霧先はルートは知らなかったのか？」

「いや、馬車を追いかける途中の景色は粗方記憶しているが
こんなこと知らなかったからな
もう一度行くときがあればその道を案内できるが」

「知識の殆どは転生する前に流し込んだんじゃなかったのか」

「掘り起こすのに１０分は掛かるし並行世界の一つ一つで道順違うし
道順違うのも全部知識として記憶しているしで色々と難しいんだよ」
並行世界番号を出されればどうにかなるが
最低でも１００万桁無いと細かい特定は出来ない
要は情報量が多すぎて拾い上げるのに苦労するのだ
「大変なんだな」
「まあな」

そうこう話しているうちに王都の関門が見えてきた
「関門は卒業証書のカード出せばいいと思うぞ」
「なんでカードなんだろ？」
「ギルドカードも兼ねてるらしい」
それと大きいと持ち運びに不便だからだと思うが
「成程・・・これって関門までの列だよね？」
「・・・長いな」
そこには関門までの長蛇の列が出来ていた
最後尾が『常人に関門がようやく見える程度』

だと言えば長さがよくわかると思う

『常人に』ってところがまだいいと思うが・・・

［関門前：夜］

風上サイド

「おい、日が落ちたぞ」

「こればかりはいくら俺でもどうもできないぞ・・・・・」

「身分証明書を」

門番が身分証明書の提出を求めてくる

「これだな」

「これです」

俺達は魔法学園卒業証書であるカードを出した

それを確認し、Aランクであることに少し驚いた後

「了解しました、通っていいですよ」

受付仕事だね、この時代にもこういう人がいるのか

「やっとか・・・」

「でもこの調子で通っていたら夜までかからなかったような？」
「多分、その場で身分証明書を発行していたからだと思うぞ」
「どうなんですかー！？」
真意を聞こうと思って相手に届くように聞いてみたんだけど
霧先に軽く睨まれました・・・
「確かにそうですよ」
丁寧に答えてくれる良い人だ
「そう言えば前のここ担当はどうした？」
霧先が聞くけど前の担当の事知ってるのかな？
「国への来客として暴言を無視してきちんと通すのがここの仕事なんですけれど
それが出来ずに私情を挟み、結局挑発に乗って取り押さえようとして返り討ち
その人が召喚された勇者だったらしく結局解雇されました」
成程、この事を聞き出すために聞いたのか
最近の勇者はガラが悪いなぁ・・・
「勇者って・・・内状話していいのか？」
霧先は別の意見みたいだけど

「別に隠しているわけでもありませんしそろそろ公開するから良いのでは？」

「曖昧だな！？」

「行くぞ、あんまり時間食うわけにもいかん」

霧先はいつの間にか先に行ってるし！

「待ってくれー！」

「いちいちはしゃぐな！」

霧先さんツッコミ早いです

2：文献あさり

［資料館］
霧先サイド

ここまでの道中には何事も無く資料館に着いた
本当にただ歩いていただけなので省略

「ッフフ、アハハハ！　本が・・ホンがイッパイだ！」

風上があまりの本の量におかしくなっている

「カザカミ～大丈夫か～」

まぁおかしくなるのも無理もない
迷路の様に本棚が並んでおりその殆どが天井に突いているのだ

・・・だが問題なし
アナログ式の検索が出来るからだ

「まずは古い文献を探すから右と」

「おい、俺はお前が居ないと必ず迷う自信があるぞ・・・」

そりゃそうだろう、普通に迷うよこんな場所
俺ですら気を抜いたら迷うぞ

「心配ないさ

右手法か左手法を使えば最終的には外に出られる様に作られているからな
孤立した壁が一箇所もない」

それまでどのくらい歩くかは俺は知らんが
ちなみにキーワードは床に刺さっている看板に沿って歩く事でどうにかなる
辞書みたいなもんだ

「さっさと行くぞ」

[図書館：キーワード＝古い・物語・「ま・お・う」]

「ざっと見た所４００冊位か」

たったこれだけのキーワードで４００冊まで絞れてしまった

「ずいぶんと少ないね
それにしてもこれ全部見るのか・・・？」

「見るよ、これ全部」

「えっ」

「だけどお前はそこでみてていい
リミット１０％まで解除・・・文献は俺にまかせろー！（パラパラパラ）」

「うおっ！　はええ！
でも本当に読めているのかこれ」

［3分後］

≪パラパラパラパラパラパラパラ・・・パタン！≫

「もう読み終わったか
これを４００回も繰り返すと・・・２０時間かかるな」

風上が簡単に計算し終わるまでの時間を計算してげんなりしている

それに対して俺は答える

「４００回も繰り返す必要もない、今読んだのは考察資料
あとは総集編４・５冊も読めば大体は把握できる」

≪パラパラパラパラパラパラパラ・・・パタン！≫

「えっと・・・なんで４・５冊で把握出来るの？」

４００冊の内１％で把握できるのはなぜか
答えは簡単

≪パラパラパラパラパラパラパラ・・・パタン！≫

「それは書いた人が別々だからだ
一人の作者で総集編が４・５冊と考察資料
ここにおいてあるのは総集編のみ
そして同じ本が１０冊あるから４００冊近くになる」

「もう一つ聞きたいんだが」

≪パラパラパラパラパラパラパラ・・・パタン！≫

「なんだ？」

「なんでそんなに早く読めているんだ？」

確かに俺が読んでいる速度は異常だ

「それはだな・・・≪パラパラパラパラパラパラパラ・・・パタン！≫
なにも１００％把握する必要がないからだよ」

「それはどういうことだ？」

「『魔王がどんなふうに語られているか』が知りたいだけだから
登場人物のセリフまで把握する必要がないんだ」

そしてここにあるのは物語
小説みたいなものだ

≪パラパラパラパラパラパラパラ・・・パタン！≫

「今ので5冊目、どうだった？」

「ありきたりなもんだよ
『魔王は突然現れ、魔物を操り世界を征服しようとしました
その魔王はかっこいい勇者に倒され世界に平和が訪れました』
ってね」

ほんとにありきたり、そして美化されている

「今の説明でも納得できない速度だったんだけど・・・」

「それは俺が知識を流し込んで覚えただからだろ
何度も流しているうちにそれを処理出来る頭が出来ちまった」

「それに並行して『実際の勇者の活躍』を覚えておいた
結果は・・・英雄って感じはしなかったな」

「とりあえず調べものは終わったってことか」

「今日はここまで、あんまり根つめてもはかどらないしな」

「俺何もしてない・・・」

「朝に組手やっただろ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5472u/

チートを通り越した先には何があるのか

2011年10月28日23時32分発行